
EVAcuee of EVA -the 3rd story-

おおいす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

E V A c u e e o f E V A - t h e 3 r d s t o r y -

【Nコード】

N O 4 7 2 I

【作者名】

おおいす

【あらすじ】

W A N、S U Nの続編。 昴栄治は見た目が恐い。 色黒で短髪、大柄で目付きが悪い。 しかし中身はナイーブで、ジャパアニメーションを愛する、一言で表現するならば『オタク』である。 幼馴染である塚本佳織と他五人の仲間と過ごす平和な日常。 それが彼の思い出の全てだった。

プロローグ ―エヴァ―（前書き）

僕らの世界 ―サン―の続編。時系列を同じくして、昴栄治の視点で物語は進行していきます。

プロローグ ― エヴァ

エヴァという少女の話だ。

コンクリートの王国での物語。

箱庭のような世界たち。

人の数だけ世界があった。

光の分だけ影があった。

そんな世界で闇の中、身じろぎする胎児のように。

エヴァは彼女の世界に陽が当たるのを待っていた。

世界とは彼女の中で二つの意味がある。

暖かな日が降り注ぐコンクリートの上の楽園。

そこには八十万人の生活があり、八十万人の世界をまとめ上げて一つの世界を作り出す。

その世界を深い闇の中から羨望の眼差しで見つめる少女だった。

彼女の世界は、無機質で薄暗いリノニウムの香る世界だった。

彼女の世界には二人の人間しかいなかった。

それは逆を言えば、世界は二人だけのものだった。

エヴァとノヴァ、そこは二人だけの世界。

――手をつなごう、輪を描こう。

いつでもノヴァがエヴァに囁いていた言葉。

特に憂鬱な日曜日。

毎週定められた儀式のように、二人は手を繋いで囁きあった。

月曜日には白い服を着た白い肌の大人たちが、彼女たちの血を抜くためにやってくる。

額に装置を当てられて電流を流されることもあった。

白い大人たちにとって、彼女たちはガラスケースの中の鼠となんら変わりはない。

人権、倫理、道徳——人对人の価値観が全て治外法権の世界。
月曜日は実験の日。

だから彼女たちの憂鬱は、月曜日の学校に溜息を吐く子供たちの
比ではなかった。

彼女たちモルモットは呪文を囁き続ける。

——手をつなごう、輪を描こう。

私も辛いけど、貴方だって同じ。
貴方も辛いけど、私だって同じ。

苦しみを共有できるから、彼女たちは互いの半身に成り得た。

——手をつなごう、輪を描こう。

遠い記憶の中、ノヴァは囁いた。

記憶1 黒い雨 ― 昴栄治

「どこに行くの？」

真っ黒な雨の中、俺は手を引かれていた。

「逃げるんだよ」

彼女は短く答えた。

立ち並ぶ家が燃えている。炎の壁に囲まれた大通り、喧騒と怒号が響いていた。

大人たちが叫んでいた。

子供たちが泣いていた。

目の血走った男が、刃物を振り回していた。

子供を庇おうとした女性の背中に刃物が突き立てられた。

抜いて、再び突き刺す。

突き刺されるたびに、奇妙な喘ぎ声を上げる。

びくり、びくり、と痙攣し、そして動かなくなった。

泣き叫ぶ子供の声と共に、亡骸は炎に包まれていく。

ぱちぱち、と。

子供は生きたまま焼かれた。

「立ち止まるな――」

彼女は叫ぶ。

「止まると、巻き込まれる」

繋いだ手が、汗で滑って離れそうになる。

その度、彼女は強く手を握った。

痛く、骨が折れそうなくらい強く――。

「塚本研究所の――」

「あいつらが全部悪い！ あいつらのせいだ――」

「高辻の一家が――」

「高辻さえ議案に可決しなければ――」

大きな音、爆発音に地面が震えて、転びそうになる。

地震だと思った。

爆発だと気づいたのは、何年か経ってふと思い出した時だ。
その時の俺たちは気づかない。

赤と黒ばかりの世界。

赤と、黒ばかりだった――。

「振り返るな」

心を読まれたのかと思った。

「どこに向かつてるの？」

尋ねてみる。

「どこでもいいじゃん、大人のいないところ」

俺の手を引く力が強まる。

「自由なんだ。もう私たちは自由なんだよ。どこにだっていける、
何にだってなれる。だって、奴らはもういないんだから。ノヴァが、
みんな殺したんだから――」

「ノヴァ？」

「……そう、最期に罪を償って私たちを自由にしてくれたんだ」

彼女は息を切らせながら、笑いながらそう呟いた。

「……最期、って？」

俺は、息を切らせながら尋ねた。

「……」

彼女は答えなかった。僕の前を走る彼女の表情は分からないまま
だ。

パチパチと爆ぜる音が支配する。

冬だというのに、そこはあまりにも熱くて――。

夜だというのに、そこはあまりにも眩しくて――。

爛々と揺らめく炎が、何もかもを呑みこんでいく。

「どうして急いでいるの？」

「大人たちが追ってくるかもしれないから」

「どうして追ってくるの？」

「私たちが逃げ出したから」

「どこから？」

「檻の中から」

「檻？」

何も知らない。

何も覚えていない。

気がつけば、手を引かれるままに逃げていた。

「ねえ、エヴァ——」

唯一覚えていた名前。

俺は、二つの名前を覚えていた。

エヴァとノヴァ。おぼろげに覚えている。

——エヴァ。

声に出せば、心がなぜか温まる。彼女の名前。

「ねえ」

前を向きながら走るエヴァに尋ねる。

「何？」

「……」

少しの逡巡、そして——尋ねた。

「僕の名前、知ってる？」

「……」

彼女はそう言った。

「知らないの？」

「昴、栄治だよ——」

その声が、なぜか泣いてるように聞こえた。

幼馴染 ― 昴栄治

「ねえ、アンタ本気？」

「うん……」

「だって、あの昴くんだよ？ 絶対やばいって！ 前にサトコが街でヤーさん系の人と話してるの見たって」

「……丸聞こえだ。」

女というのは、聞こえるように話すという陰湿な手口を使う。影で自分のことをコソコソと言われると、本当に落ち着かない。すごいナーバスになる。そもそもなんで知らない人のことを好き勝手貶せるのか。

「……三次元は汚い」

「クレイジーだぜ……真っ昼間からモテねえこと言いやがる」

声の方を見る。

「よお」

慶介だった。

「なんだ？ 真っ昼間から現実逃避か？」

「真実の愛は二次元にしかないのかもしれない」

「二次元こそフィクションだろうが……」

溜息をつかれる。

「それならばこの人生はフィクションでも構わない！ 力説してみる。」

「……ああ、お前は本当にダメ人間だ」

ダメな人間にダメと言われてしまった……。

「なんだ慶介？ 三次元フィギュア世界に馴染めない俺を見下しに来たのかよ？」

「貴様、なぜフィギュアとつけた……いや、敢えて問うまい。久の

教室に行つたんだが、いなかったからこっちに来た」

久と慶介は仲がいい。佳織曰く、ガチホモ、だそうだ。

「ねえねえ庄治くん」

クラスの女子が寄ってくる。思わずぷいっと目を反らした。馬鹿

な会話が聞こえていなければいいが……。

「なになに、俺告られる？」

「えーっ、妊娠しちゃうよー」

「テメエ……、本気で中にぶち込むぞ」

「うわあっ、けどものー」

慶介はクラスの女子と軽口を叩く。羨ましい性格だ。

「あのお……昂くん悪いんだけど、庄治くん借りてもいい？」

目を反らしたまま。

「……好きにすればいい」

その様子を見ていた慶介は悪戯な笑みを浮かべて。

「んな態度だから恐がられんだよ。愛想笑いの一つでもしてみろって」

「余計なお世話だ」

「へっ」

クソ、あいつ鼻で笑いやがった——。そのまま女の子に囲まれて

慶介は教室を後にする。

「……」

うらやましくなんて、ないんだからね！

と、思ってみたが如何だろうか？

「……ん？」

慶介を取り巻く女の子の一人がこちらをチラチラと伺っていた。目が合う。

「——っ！」

さっ、と慌てて視線を反らされた。

「……」

ブルーになる。俺って、そんなにモテないかなあ……。

「はあ……。」

溜め息をついた。

「はい、いち幸せロストしましたー」

「……佳織？」

佳織は俺の机にいつの間にか腰掛けていた。

「景気悪いなー」

「……サブプライムの影響です」

頬杖をついて、再び溜め息をつく。

「幸せ二つ目ロスト、ブルー入りすぎ」

「……。」

幸せを手に入れ損ねたから、溜め息をつくんじゃないかと思う。

「……で佳織、どしたの？」

佳織が昼休みに訪ねてくるのは珍しい。クラスの友達なんかと昼食にいくからである。

「四限目寝てたらパヤスに捕まって今まで説教。ありえねー、皆食堂いっちゃったじゃん」

「追っかければ？」

「別れた男に縋る女みたいなことは出来んでしょ、淑女として」

「……。」

分かるような分からないような例えだ。

「ところで、お前ほんとモテないねえ……」

歯に衣を着せない言葉は暴力に等しい時もある。

「余計なお世話だ——」

机を両手で叩いて立ち上がる。暴力には断固として戦う姿勢だ。

「慶介を訪ねてきた女の子に向かって挨拶とかする？」

「……目すら合わせられません」

いきなり目を逸らす羽目になった。

「こちらが目を合わせずとも挨拶をしてくれました。さあ、どうする？」

「……失言のないよう、とにかく無言を貫きます」

弁護士を呼んで下さい。

「なんで裁判での対策なんだよ。だから恐いとか言われてんだよ」

「ご趣味は？ とか聞けばいいのか？」

「お見合いじゃねーよ」

頭にチョップされる。

「デカ恐れガタイで二次元大好きって、存在が既にギャグだな」

「……………」

人の気にすることをズケズケと言いやがる……………と、このままじゃ昼飯を食べ損ねてしまう。

「食堂行くか？」

「賛成」

佳織は立ち上がって、同意した。コソコソと話す声は、やはり聞こえてくる。

「塚本さん……よく昴さんと話せるよね。恐くないのかな？」

「ああ、幼馴染らしいよ」

幼馴染、らしい。

それは佳織から聞いた話で、俺の記憶じゃない。

妄想 — 昴栄治

食堂へ移動すると、そこその込み具合だった。だが、食堂が埋まることは滅多にない。昼食を買って手ごろな席に座った。

「素うどん」

「そうだけど？」

「一番安いメニュー。しけてんな」

「……………うるさい」

「カツ丼こそが食堂の王様である」

そう言っただけ美味そうなカツ丼をこれ見よがしに見せびらかす。コイツはバイトしてないくせに、どうして金を考えなしに使えるのだろうか。大体月の半分で仕送りを使い果たし、南さんにいつも怒られている。たまに日向に口座を抑えられて小遣い制になったりする。

「やらんけど」

「……………」

本当にいい性格してる。しばらくは無言でお互いに飯を食べ続けた。

会話のない空間は本当に苦痛だ。だが、それは他人同士に限ってだ。佳織や、教会出身の七人の絆——家族に代わる新しい絆。提案したのは沙耶久だった。

親しいと親しくないの境界線はどこかというところ、『会話』じゃないかと思う。お互いに気を使い、退屈させないように会話しようとする。俺の苦手な社交辞令の行事だ。学校はどこ？ 部活は何？ 彼氏いるの？ 慶介が当たり前のように女の子に聞く質問。俺はつい思ってしまう。興味が無いのに、どうして聞かなくちゃならないんだろう、と。聞いても俺は、ふうん、で終わってしまう。そこから話を広げる話術も引き出しもない。

でも、そんな風に何か喋らないと、って必死に考える必要はない。無言でいたっていい。取り繕うような言葉がなくなるとかもかわらない。

それが、家族、もしくはそれに近い信頼関係じゃないかと思う。

素うどんはすぐに食べ終えてしまった。

「………そういや、久しぶりだな」

「ん、ひゃひが？」

「いや、食べながら喋るなよ」

佳織は咀嚼し、口の中のカツ丼を飲み込む。

「食べてる途中に話しかけてきたんはそっちだろ」

箸で人を指すなよ………。

「ああ、悪い悪い」

「んで、何が久しぶり？」

「俺ら二人で飯食うの」

「きも、彼氏気分かよ」

「はい？」

言った言葉を思い出してみる。

………ふむ、キモいと。

……。

………うお！ 言われてみると、なんか別れた後の恋人っ

ぽい！

なるほど、じゃあ妄想してみようじゃないか。

幼馴染の二人は、いつしかお互いを異性として見るようになった。ぎくしゃくし出す態度、男は女に恋心を打ち明けて、二人はゴールインしたかに見えた。そのまま学園を卒業し、一つのアパートを借りて二人は同棲を始めるのだ。しかし、現実には困難が付き物。誰かが言っていた。恋愛結婚とは落ちていくだけだと。互いの為に等身大以上の自分を描こうとする。そして、それは長くは続かない。人とは綺麗なものより汚いものの方が多いからだ。それを隠し続けることは出来ない。ともすれば、許容の境界線をはつきり引くことだけが長く続ける唯一の対策。言葉を変えれば、妥協や諦めと呼べるかもしれない。少しのズレが大きな亀裂となって、一緒に暮らした

びに二人の距離は徐々に離れてしまうのだ。顔を合わせるたびに許せていたものは許せなくなっていく。だけど、お互いが本当は知っている。本当に許せなかったのは、他ならぬ冷めてしまった自分自身の心であると――。

「おい、えーじー」

ある日、仕事から帰ってきた男に待っていたのは、女のいない部屋だった。そこには置手紙がひとつだけ。こうなる予感は無かったわけではない。だが、喪失感という感情は仕方がないというロジカルな思考では抑えることはできない。

「えーじー戻ってこー」

ふっ、男女問題はいつも面倒だぜ！

「さよなら、さよなら……」

「……ダメだ、こりゃ」

「もうすぐ外は白い冬……はっ――、佳織？」

やばかった、意識が二次元に飛んでた。思わず口ずさんでしまった。

これが慶介の言う小田和正シンドロームか！

「おい、やっと戻ってきた？」

「同棲は止めよう。あれはお互いの嫌なところも含めて全てを受け入れなければならぬ所業なんだ。若い恋人達にはまだ早すぎる」

「……てや」

「ゴ――ッ！」

お盆が顔面にディープインパクト。

「戻ったか？」

「すまん、たまに妄想と現実が分からなくなる」

「妄想禁止ね」

「息をするな、と！」

「お前の妄想は生命活動かよ」

佳織が溜息をつく。

そんなアイツへ、心の中で呟いてやった。幸せ一つロストだ。

「栄治の妄想は、鳥が空を飛ぶようなものだね」

後ろから声をかけられる。

「おっ、ヒツサーと悠希」

久と悠希は、これから昼食のようだ。

「もう食べ終わったところ？」

悠希が尋ねる。

漆黒の髪と瞳。なのに、彼女の肌は病的に白い。本当に芸術品のような、美しさ。それは、美人とは異なる感覚だと思う。

「んー、もうすぐつてとこ」

佳織が先に答えた。

「俺は食い終わったかな」

「ちよつと遅かったわね」

「いいよ、付き合っよ」

俺が答えると、悠希は微笑する。笑顔さえも、どこか神格化されている。

「ありがとう栄治」

「・・・・・・」

そんな悠希と俺の会話を眺めながら。

「なんでか悠希だけは平気なんだよなー」

佳織が呟く。

「何が？」

久が問いかける。

「栄治ってさ、必ずって言うていいほど相手が女だったら会話どころか目を合わせることもできないじゃん。のぞみんもひなたんも数ヶ月かかったのにさー、なんでか悠希だけは始めから大丈夫だったのはなんでかなーって」

「歳の功だよ」

「・・・・・・」

久は冷たい視線を感じたらしい。悠希も久と話すときだけは、歳相応の表情を見せることがある。それが、少しだけ羨ましかった。彼女だけは、未だ他の仲間たちに気を使っているフシがあるから――もしかしたら、それが彼女の暗黙の了解に関わることなのかもしれないが。

「おい、やばいつてヒツサー。悠希の目線が一瞬『オトウト・コロス・モード』だったぞ」

「……………はははっ」

「愚弟のことはいいの。栄治、何か理由はあるの？」

「愚弟というのは、愚かな私の弟ってことで――ひいっ！」

久の言葉は悠希の視線によって途切れた。

「……………何かしら？ 『愚かな、私の、弟』――」

視線の温度は氷点下八十度。我が家の黒き侵略者ゴツキーも三秒でひっくり返る。

「ナンデモナイデス」

久はカタコトになっていた。

「ああ、お前悠希に惚れてるんじゃない？」

佳織がとんでもないことを言い出す。

「……………はい？」

「そう言う話だったかしら？」

悠希も眉を顰める。

「話し飛びすぎじゃない？」

「ああ、いいから答えろって」

なんとも横暴な態度が気にかかるが、まあいつか。顎に手を当てて考えてみた。

――恋愛対象としての沙耶悠希。

「ちよつと違う気がする」

「ちよつと？」

久が首を傾げる。

「本人にも自覚がないってことか？」

なぜ佳織は恋愛に結び付けたがるのか。

「んー、あんまり意識することがないというか……………」

「女ってことを？」

「……………久？」

久は再び冷たい視線に曝された。

視線の温度は氷点下百度を突破。

「おい、やばすぎるってヒツサー。お前今日は歩く起爆装置かよ。

地雷原を匍匐前進かよ。勇氣と無謀は違うっつーの」

「……………違うんだ、文脈を読んだだけなんだ」

「言い訳はいいわ」

無表情でありながら、どこか怒気を含んでいるのが分かった。

久、自重するんだ。このままじゃ酸素すら液体化してしまう。

「……………」

久と目が合った。子犬のような目で『フォロミー！』って言うてる気がした。

いつもは俺が子犬のように久や慶介にいじられるのに、なんだか新鮮だなあ。

……………。

いつもドSに責めるくせに、姉の前ではそのザマですか……………いいでしょう、私が出ましよう。

なぜか丁寧語で思考していた。

いつもは慶介に舐められているが、それは世を忍ぶ仮の姿。

本気なれば俺だって女にガツンっ、と意見するんだZe！

『ごめん栄治、僕勘違いしてたよ！ 栄治って慶介なんかよりもずっと頼りになるんだNe！』

ふふふ、悔しがる慶介の姿が目に見えるようだ。キーツとか言っ
てハンカチを噛んで悔しがるに違いない。お前のネンゴロの久を寝
取ってやろう！

見てろ久、これが本気になった友の姿だ！ 実は私、脱いたら凄

いんです！

「凄いや栄治くん。マジパねえよ栄治くん！」

何、まだ六十パーセントさ！

マジすかエー
ジくん！ やっ
ぱエー
ジくんパ
ねえよ。 S
O K O ナ

シ・ラヴだよ！

[illegible]

目くるめくの薔薇世界。

俺の妄想には、性別の垣根すら存在できない縦横無尽の自由世界だ！

勢いよく悠希の方を向いた。

……視線の温度は氷点下百五十度を超えてました。

「……どうしたのかしら、栄治？」

——液体室素！

「失礼を承知で申し上げます……私の顔に免じてお許しに出来ないでしょうか？ 小生の小汚い顔ではございますが――」

低頭低位で敬語になっちゃいました。

礼の角度は腰から九十度。

仕方ないよね？ 親しき仲にも礼儀ありって言うもんね？

「栄治、気にかかる必要なんてないのよ。——今日の久に人権なんてないのだから」

「……人間失格かよ」

佳織すら悠希の見えない威圧感に気圧されている。

「栄治……無力すぎる」

久の中での株が下がった。

ううう……こんな俺でほんとすみません。

女尊男卑の時代なんです……。

「話を戻すけど、確かに私も栄治とは予想以上に仲良くなるのが早かったように思うわ」

「……………そうかな？」

首を傾げる。

「日向やのぞみ、他の女の子たちへの態度を見ている余計にそう思うわね」

「やっぱり惚れてるんか？」

「違うって——」

「ほう……………それは悠希が惚れるに値しない、と？」

「ち、違う——、悠希は美人だけなんていうか高嶺の花というか……………って何言ってるんだよ俺は……………」

「へえええ……………、聞きました奥さん？ 奥さん美人ですつてよ」

「光荣ね」

佳織のからかいもさらりと流す。どこか、遠い存在だった。

「おいおい、栄治さんよ。光荣だってよ。脈ありじゃないんすか？」

「だ、だから……………」

どもりながら反論しようとする。けど、顔は赤面していたと思う。でも、きつと違う。恋愛感情と言うものではなくて、それに近いもの。それ以上は、考えてみても言葉に出来なかった。

「佳織とはどうなの？」

不意に久が口を開く。

「何が？」

佳織が首を傾げる。

「佳織と仲良くなるのに時間はかかったの？」

「……………それは」

「……………」

佳織と栄治は口を噤んだ。

「……………俺さ、記憶がないんだよ」

告白する。

「話す機会がなかったし。ほら、教会って過去のことを聞きだすのって暗黙の了解でタブーだっただろ？ 別に隠すつもりはなかったんだけど切り出す機会もなくてさ……」

言い訳がましいな、と自分で苦笑してしまう。

「そっか……。ごめん、悪いこと聞いたね」

「謝るなよ、久。別に隠そうとしたことじゃないからさ」

「でもさ、不用意に過去に踏み込むべきじゃなかった。あんなことがあったのにさ」

「……………」

言葉もない。

針木市においては、十年前の事件に関して心に深い傷跡を負った人たちで溢れている。メンタルケアも市を挙げて行っているが、数がだけに追いつかないのが現状らしい。御座市市民だった、ブラツクマンデーを体験した人達にとっては、過去は受け入れがたい苦痛であるケースも珍しくない。

「……………湿っぽい話は止めましょう」

悠希がよく通る声で告げる。

「今日の久は減点項目ばかりだわ」

「……………面目ないです」

久は小さくなる。

「じゃあ、昼代ヒッサー持ちってのはどう？」

「あら、いいわね」

「ちよ、それは待つて……………」

「何かしら？ あなたの人權を回復させるだけの言い訳が思いついたなら聞いわ」

「……………払います」

弟はいつだって姉に弱いものだと思った。

記憶2 塚本佳織 — 昴栄治

ある日、目を覚ました。

そうとしか言いようがない。

光が差し込み、瞼を閉じているのに目が眩んだ。

失明するような光の洪水に、痛みすら感じた。

だが目が慣れてくればそれ程でもない。蛍光灯程度の光だった。
長い眠りから覚めたかのように。

白い部屋。

よく分からない機械が沢山並んでいた。

そこから生えたシールドが蛇のように床を伝いこちらへと伸びて
いた。

辿ってみると、足元を過ぎ、まだ迫ってくる。

終点は、俺の額だった。

裸のまま、全身が濡れていた。

薬品の刺激臭が香る気がするが、鼻は鈍感だった。

どこか夢見心地。

さて。

始めに思ったことは、何をすればいいんだろうか、という疑問だ
った。

少し語弊があるので言い換えよう。

何を考えればいいのだろうか、ということだった。

指を動かしてみる。

首を振ってみる。

深呼吸してみる。

「うん」

とりあえず、始めに考えるべきことは分かった。

「……お腹すいた」

空腹だということだ。

そして、ここはどこか、ということに考え始めた。
辺りを観察してみる。

とりあえず白い、それが第一印象。

そして色々な機械が雑多に並べられている。

よく分からなそうな機械ばかりだ。

鉄製のドアがある。

そのドアのノブの高さくらいだろうか。

ドアの横の壁には窓がついていた。

横に広い、縁はシンプルで装飾の一つもない、開けるところもない、壁にガラスを入れただけのような窓。

その向こうは外ではなく、同じような白い部屋。

後で聞いた話では、研究室だったらしい。

こちらを観察するための部屋だそうだ。

そしてその時も、俺は観察されていた。

窓からこちらを観察していた少女——それが、塚本佳織だった。

エヴァ2 ―幕間―

彼女たちは、『プログラム・チルドレン』と呼ばれていた。

「……………これが塚本技研の結晶ですか」

スーツの男が呟く。

温和な笑みだった。

ノヴァは彼のことを足長おじさんと呼んでいた。

エヴァはそうは思わなかった。

だが、ノヴァが彼のことをそう呼ぶから、エヴァもそう呼ぶことにした。

「ファウラウェイプロジェクトのプラン・エーは破棄の危険性が出てきました。筧正樹の理論は失敗するかもしれません。今は、プラン・ビーを担うこの少女たちこそが希望です」

足長おじさんの質問に答えたのは、少女達の横に並ぶ白い大人たちのリーダー格の男だ。

壮年の白衣の男から溢れる自信が、言葉に偽りはないことを示唆する。

「人類の、希望なのですよ——」

まるで、自らが神であるかのような尊大な態度で。

「人類ですか、大きく出ましたね」

足長おじさんは冗談めかして言う。

だが白衣の男は真剣な表情だった。

真剣に自分が神であることを疑わない。

彼らは、真剣に狂っていた。

「けて大風呂敷を開いたわけではありません。古人達が叶えられなかった永遠の願いを叶えることが出来る最も素晴らしい技術です。不老不死の夢、それは様々な媒体で、メディアで人々が夢を見続け、そして諦めてきました。今まさにそれに手が届こうとしています。」

有限という神が人間に与えたシステムを超えることができるのです」

足長おじさんは少女たちを見る。

だが、少女たちは無表情のまま焦点の合わない目でぼんやりと部屋の中を眺めるだけだった。

早く狂人たちの茶番が終わってくれないだろうか、と彼女たちはただそれだけを思っていたのだろう。

「感情が乏しいようですね」

それを見透かすかのように、足長おじさんは尋ねる。

「感情？」

可笑しそうに。

「馬鹿馬鹿しい。脳の容量の無駄遣いでしょう？」

冷たい物言いだった。

「彼女の使命は人間らしく生きることではありません。今人類が直面している問題を解決する為だけに彼女は存在する。我々は、そうデザインしました」

「彼女は人間らしく生きることが出来ない、と？」

「彼女は人間ではない。プログラムなのです」

白衣の男は続ける。

「だが……副作用は必ず存在してしまう。我々はついに解決することが出来なかったのです。自我のメカニズムを解き明かすことは出来なかった。だから、プラン・エーは失敗に追い込まれようとしている。ならば、入れ替えるしかないでしょう。何度も実験し、結果から因果関係を選び出し、再び実験を行う。まるで、辻褄を合わせるように繰り返し返しました。結果として残った希望が、彼女たちモルモットでした」

白衣の男も隣の少女たちを見下ろす。

「だから、この子に感情など与えてはならないのです。彼女たちはモルモットです。そんなものは必要ない——」

「・・・・・・・・」

足長おじさんは一息ついて目を閉じた。

「人間とは、何をもって人間と定義できるのですかね？」

「・・・・・・・・そうですね、生物学の見解ならば彼女は間違いなく人間です。しかし、人の権利と書いて人権。それを本人が求めなければ、それは最早人間として扱う必要はないのではないのでしょうか？」

「この子の前でそのような話をしてもいいのですか？」

男が少女に視線を合わせると、少女は首を傾げた。

まるで、少女自身が「それに問題があるの？」と尋ねているようでもあった。

そう演技すれば大人たちは喜ぶ。

彼女たちは、そう学んだのだ。

大人たちを観察して、そう学んだ。

「言葉の意味は理解しても、それがどういうことかは分かりませんよ。この子に道徳はない。生存する意思も持たない。彼女は身体を維持するために必要な行為しか知らないのですよ」

それは勝手な思い込みだった。

そうあるほど、大人にとっては都合がいい。

だから彼女たちはそれを演じているだけだった。

だからこそ茶番。

二人となった時点で、自己と世界の間境界線が発生する。
他者性。

他者の存在を認めて初めて、自らの存在を人は確認する。
自我の存在は他者との区別から始まる。

「人形ですね」

足長おじさんもそれには気づいていた。

気づいていながら茶番に付き合った。

「その言い方は彼女たちに失礼なことです。我々は肉という絶対的な支配から解放されて新たな人類となるのです。神の支配から解放され、新たな神となる。故に彼女は神の器、聖なる贄なのです！」
叫ぶ声が薄暗い室内に反響する。

反響した後は、ぶくぶくと、泡立つ音だけが響く。

その部屋は、エメラルド・グリーンの光の柱が何本も立ち並ぶ。
「姉さんたちも、喜んでいるぞ？」

柱を見上げながら、白い大人はエヴァに話しかける。

少女も光の柱を見上げた。

ぶくぶくと、緑の培養液が泡立っている。

装置の発光を培養液が吸い取り、それは美しい光の柱となっていた。
た。

そして、その一つ一つに人間の脳が剥き出しのままで浸っていた。
脳だけとなった彼女たちも、永遠の夢を見続けていたのだろうか？
それとも、世界を呪っていたのだろうか？

——ファウラウェイ・プロジェクト・プラン・ビー。

その存在を知る者はほとんどいない。

その実験の非人道的な側面故に、塚本の手により秘密裏に進められてきたプロジェクトの名前である。

永遠の命という命題に対し、彼らは人間の人格、自我を『ソフト』と認識した。

人間の身体をハードして考え、そこにソフトの情報を上書きする。
だがプラン・エー、脳をハードとして扱いドナーの脳に他者の記憶や自我を書き込む実験は数え切れない犠牲を生み出してきた。

それが緑の培養液の中で眠り続ける彼らだ。

そこで立ち上げられたのがプラン・ビーだった。

手段は、脳移植である。

部分移植も考えられたが、結局採用されたのは全移植だった。

脳に不要な部分などない。

一部でも欠ければ正常に作動しなくなるデリケートな部位だからだ。

言わば、一つでも自分とは違う部分があれば、それはもはや自分ではなくなる。

移植には様々な問題点が発生した。

まずは神経の塊である脳の神経を切断し、その全てを再び結合することである。

身体と切り離した状態でいかに酸素を送り続けるかという問題もあった。

だが、それらの問題を解決した時、彼らは脳をソフトとして延命を行う結論に至ったのである。

自室にて ― 昴栄治

人生はゲームのような側面もある。
だが、ゲームとは根本的に異なる。

人生にセーブもロードもない。

起こってしまったことをなかったことにするなど、誰にも出来ないからだ。

一度選んでしまえば、もう取り返しはつかない。

だから、一つ一つの選択肢は取り返しのつかない一歩でもある。
失われてしまった物を取り戻すことなど、誰にも叶わないのだ。
例えば――。

「……やっぱり買っておくべきだった」

俺こと昴栄治は一人パソコンの前で身もだえする羽目になる。

「んだあ……、どした変態？」

俺の部屋でフローリングに横になっている佳織が気だるげに反応する。

我が物顔で菓子を食いながら俺の観賞用抱き枕を下敷きに漫画を読んでいた。

「突っ込んだら負けだ」

慶介はテレビの前で格闘ゲームに勤しんでいた。

「様子見にしていた『破壊惨劇型ヤンデレヒロイン集』……廃盤となり、値段が跳ね上がってる」

「好きだねえ……」

興味なさそうに。

二人ともけして深くは突っ込んでこない。

なぜ、語らせてくれないのだ。

そもそも、ヤンデレというのは――。

……仕方ないので、心の中で語り続けていた。

自給自足の一人演説である。

ともあれ、『破壊惨劇型ヤンデレヒロイン集』、価格は実に定価の十倍だった。

「一万二千円か……」

呟いてみた。

「……そんだけ出せばヘルスで六十分いけるだろうが」

慶介が答える。

「お前はほんと、下半身のことしか頭にないな」

「それが男と言う生き物だ、栄治よ」

「とりあえず、世界の男たちに謝罪をしろ」

「チツ、カマトトぶりやがって」

それは男に使う言葉なのだろうか？

「けどさあ、えーじの金の使い方もおかしいだろ？」

な、な・ん・だ・と——！

「ここにははちきれんばかりの情熱がある！」

画面を指差しながら叫んだ。

佳織は寝返りを打って。

「……育てた息子のうち二人がこれじゃあ、南さんも浮かばれねえな」

南さんは死んでないだろうが。

「女の佳織には分らない。ジャパニーズ萌えは日々進化してることを」

腕を組み、語ってやった。

「あーあー。そこまで言うなら勝手に買えよ。無駄で無価値な消費すればいいだろ。えーじの人生みたいに」

「コメントが酷すぎる——！」

「自室で二次元と交尾する男、昂栄治。お前のキャッチコピーを考えみたが、いかがだろうか？」

「け、慶介えええええ——！」

怒りのあまり、ブリッジをしていた。

「悔しかったら三次元の恋に生きる！ 今のお前は負け組だ！ 働いたら負け、って言ってるヤツくらい負け組だ！ それで貴様はいのか！」

「そだねー……、たまには三次元の荒波に揉まれればいいんじゃない？」

ゲームをしながら熱く語る慶介と、ぱりぱりと煎餅をかじりながら適当に答える佳織。

「俺のモテる世界は二次元にしかないんだよぉ！」

心からの叫びだった。

「それは知ってる」

「それは知ってる」

満場一致でハモった。

「そこは冗談だというのが優しさじゃないのか！」

血の涙を流した。

現実を他人の口から聞くことは、あまりにも残酷だ。

「そついや、えーじ。この前告られたとかなんとか言ってたじゃねーか。アレどしたの？」

「……レイプ魔扱いされた」

まざまざとトラウマが蘇る。

何もしてないのに女の子に泣かれるなんて、俺にとっては日常茶飯事だった。

それを昔久に言ったら。

「えっ？ そんなことあるわけないよ。栄治じゃあるまいし」

ニコリと純情そうな笑みで返された。

慶介に言ったら。

「存在そのものがレイプだ。お前がそこにいるというだけでその子

は心に穢されたトラウマを抱えてしまったんだ」

とんでもない人権迫害だった。

のぞみに言ったら。

「うーん、それはいいとして全国の小学生の為に栄治くんは社会に出るべきじゃないね」

ニコリとロリコン扱いされた。

違う！ 俺はどちらかと言えばクーデレ属性だ！

そのような勘違いをするのぞみに、オタク・イコール・ロリコン、ではないことをクールな大和撫子にカテゴライズされるキャラクターに対する萌えをつらつらと、しかしながら明快に説明していたら「ねえ、なんか分からないけど、キモいから殴っていいかしら？」鈍器を持つ日向の殺意にあてられた。

「レイプ魔扱いねえ、案外慶介の存在自体レイプってのを得てるんじゃない？」

「否！ だったらここに居る佳織は既に想像妊娠状態のはずだ」

「そだねー、だったら金で解決してやる。百万寄せ」

「ひい！ 想像妊娠すら慰謝料をせびられる世知辛い世の中！」

とりあえずブリッジで歩行した。

そのまま階段を下りるとエクソシストごっこになる。

一度はしたことがないだろうか？

「そう言えば、あん時のぞみに言ってた大和撫子がどうのって、あれ悠希のことか？ というか悠希のこととしか思えなかったぞ」

ビクビク――！

動揺からブリッジを崩しそうになった。

慶介、この手の会話には恐ろしく鋭い。

「そのような事実は確認されておりません」

「ケケケツ、分かりやすいねえ栄治は」

佳織がいやらしく笑う。

モロバレだった。

プルプル震える腕を指先でツンツンされる。

「どうしたかね？ そんな妄想をしたことがあるのかね？」

悪魔のように佳織が囁く。

してたさ。してたに決まってるじゃないか！ この妄想に、もやもやした気持ちを抱えること幾千晩、その度、右手でわが息子ポールをなだめ続けてきた！

神格化したような、絵画のような美しさ。

気高く孤高に見える傍ら、ほんの少しの衝撃で簡単に壊れてしまいそうな儚さ。

世界を俯瞰するかのように落ち着き払った表情に、たまに見せる少女のような悪戯な一面。

久が日本幼馴染評論家ならば、俺は日本大和撫子のお姉ちゃん評論家だ。

冷たい目線でゴミのように見下される。

そんなお姉ちゃんに踏みつけられるのを想像しただけで、だけで！

「ラメエ——！ そんなトコまで！」

ブリッジのまま喘いだ。

はっ、いかんいかん。

妄想でイッてしまうところだった。

「……どんなトコだよ、コノヤロー」

「佳織くん、俺は妄想のプロだぜ」

某マジ。ガーのパイロット風に決めてみた。

「コイツ……見てたらなんか本気で可哀想になってきたじゃねえか、色々と」

慶介は目頭を押さえていた。

「あー、いいこと思いついた」

「なんだ？」

「まあまあ、野獣」

そんなこと言いながら、佳織は携帯を操作し始める。
何か嫌な予感がする。

「ああヒッサー？ アタシアタシ。いや、詐欺じゃねえって」

「あの……」

「いやー面白いこと思いついちゃってさあ。あつ、今近くに悠希いる？ ちょっと聞かれたら困ツチングな話題」

「待ちなさい！ 佳織さんや！」

大江戸口調になっていた。

「てや」

「ノオオオオオオ——！」

股間を蹴り上げられた。

「ぬおおお、子孫が！ 一億のフューチャー達があああああ！」

「ああ、なんでもないつて。変態が股間押さえて転がってるだけ」
急所攻撃に床をのた打ち回る。

「そうそう、悠希と栄治にデートさせるわけ。大丈夫、大丈夫、面白くなるよう佳織ちゃんの全面プロデュース」

苦悶する俺の隣で、不吉な会話がどんどん進んでいく。

「うんうん、そんなワケで明日よろぴく」

佳織は電話を切った。

「……あの」

恐る恐る、股間を押さえながら尋ねる。

「というわけで明日デートセッティングしたんでよろぴく」

「うそーん！」

とりあえず三点倒立をした。

「とりあえず、俺は未だかつてお前ほどのDMを見たことがない」

「慶介よ……。これは、私たちの業界では御褒美なのです」

倒立しながら答えた。

デート ― 昴栄治

庄治慶介のデート講座。

「いいか、初回のデートでは注意すべき点がある。一緒に居て楽しいと思わせることももちろん重要ではあるが、話を盛り上げて明るさをアピールしつつもがつついてはならん。クールを装わなければならん」

「クール？」

「そうだ、始めからがつついたオーラーを出していると相手に警戒されてしまう。それと、相手に気がなかった時、押せ押せだったら自分のプライドを傷付けてしまう」

「ただの馬鹿かと思つてたけど、色んなこと考えてるんだな、お前

……」

「まあ俺も楽し、もとい、応援するわけだからその暴言には目を瞑つておいてやろう」

「……おい、本音がダダ漏れだぞ」

針木駅前、噴水広場と呼ばれる場所。

クリスマスには噴水のショーが行われるほど大掛かりなものだ。

普段からもカップルや友達同士の待ち合わせ場所に利用されている。

待ち合わせ時間より、三十分も前だ。

「悠希のような几帳面な相手に遅刻など論外だ。さらに言えば、待ち合わせ時間十分前からは既に遅刻にあたる。十分前行動の原則だ」

「じゃあ十一分前か？」

「……オークションじゃないんだ、セコく釣り上げるんじゃない。三十分前に行けばいいだろうが」

「は、早過ぎないか？」

「いいか、相手がいつ来ようが、合言葉は『俺も今来たところ』だ——」

「んなベタな」

「ベタというのは古人たちが積み重ねてきた経験法則だ。古き良き日本が残してくれた王道とも言える。これが言えない男は挨拶が出来ないに等しい」

「な、なんと……」

上手く騙された気がするような、しないような。

「栄治……」

「えっ？」

不意打ちだった。

まだ待ち合わせ三十分前だ。

振り返ると、すでに悠希は到着していた。

「今来たところ——！」

色々とテンパっていた。

「……ええ、見てたわよ？」

悠希は不思議そうに首を傾げる。

『馬鹿野郎！ テンパリ過ぎだつちゅーの！ 先走るな！ お前の股間の海神様を今すぐ静めろっ！』

右の耳に付けたインカムから佳織の声が聞こえる。

ちなみに、襟元には小型マイクを取り付けている。

無駄にお金がかかっていた。

「インカムとマイク、超小型無線機セットだ」

「慶介……、色々と突っ込みたいところだが、なぜこんなものを持っている」

「男には色々ある。しかしその色々があったおかげで、貴様はデパート中でも我々の指示を仰ぐことが出来るという寸法だ」

「ちょっと待て！ お前たち、後を付けるつもりか！」

「ふうーん、だったら栄治は一人で何とか出来るとのたまいますか。いいねえ、楽しみだねえ。どんな失態見せてくれるんだろううねー」

「か、佳織……、なんて性格が悪い」

「まあ、佳織は置いておいて。多分お前途中でテンパって悠希が帰るのがオチだぞ？ 俺もけしかけておいてそれではバツが悪い。まあ、騙されたと思って今日は付けてみてくれ」

「お前がいいヒトぶる時は猛烈に怪しい……」

「……なんてヤツだ、人の好意を曲解するとは。ろくな大人になれんぞ」

「……というわけで、久はこれなくなつたの。って聞してる」

「えっ？ うわっ！」

気が付くと、悠希に覗き込まれるように見られていた。

「近い、近い！」

「あらっ、ごめんなさい」

ふわりと髪をかき上げて離れる。

彼女がすると、絵になつて鼻につかない仕草だ。

『見とれてる場合じゃないっつーの。せっかく接近したのに何言つてんだお前は！』

耳元で佳織ががなりたてる。

『いや、早すぎる。栄治の反応の仕方はよくなかったが、まずは距離を置くべきだった。結果的にはオツケーだ』

『何甘いコト言つてんだよ！ 隙あらばラッシュユだろーが！』

『焦るのはいかん、始めは距離を取って様子見だ』

『インファイト！』

…… 慶介と佳織の会話はまるでボクシングの解説だった。

「で、栄治。どこに行く予定だったの？」

悠希が尋ねる。

「ああ、えーっと……」

指示を仰ごうとしたが、未だ慶介と佳織は言い争っていた。

あ、あいつ等……本気で使えない。

と半ば諦めかけたときだった。

『あつ、栄治聞こえてる？ 佳織と慶介は取り込み中だから僕が指示出すけどいい？』

天啓のように久の声が聞こえる。

『あつ、ヒッサーテメエ。私のプロデュースだっつてんだろー！』

『まあまあ、佳織ちゃん、どうどう』

のぞみの声まで聞こえてきた。

あいつ等、一体何人で後付けて来てるんだ？

「食事つてのは、男のセンスが問われる」

「……センス？ ファミレスじゃダメなのか？」

「——という答えだが、記念すべき初デートにこんな男はいかがだ、佳織？」

「自殺しろ」

「ひいひい——！ 命は一つしかない！」

「とまあ、こんな評価になる」

「……じゃあ、ナイトクルージングしながら海上レストラン、とか？」

「どこのセレブだ貴様は。究極の理想だが、等身大を越えれば逆にひかれるぞ。財布も破滅だ」

「針木ウォーカーで探すのか？」

「ウォーカーを無条件に信じるのもまずい。こういうのは口コミなんかから隠れたお洒落空間を提供するのがベストだ」

「……なっ」

「野獣、コイツ何も思い浮かばないって顔してるぞ？」

「仕方ないな。ならば、この前久から聞いた隠れたパスタの名店を紹介してやろう。針木地下街にある」

「おいおい、お前のネタじゃねえのかよ。というかヒッサーはなん

で知ってんだよ」

「のぞみのせがまれたらしい。あの男はのぞみに甘すぎる」

「いやいや、慶介ものぞみに甘いだろう。この前も飯奢ってたじゃないか」

「何！　ちょい待て野獣。私は一度もお前に奢ってもらったことねえぞ！」

「そういえば……」

「そういえばってなんだ、えーじ。まさかお前も……」

「いや、お前は奢られるってキャラじゃないだろ。それにのぞみに一番奢ってるのは日向だ」

「待って野獣、全然納得いかねえ。可愛さが全てなのかよ！　私のほうが金ねえぞ！」

「……それは判断材料じゃない。それは置いておいてだ、ひとまず何が食べたいかを尋ねろ。そして指定されたジャンルの中から当日俺がセレクトしてやろう」

「とりあえず、丁度いい時間だからお昼行かない？」

「ええ、いいわよ」

「何が食べたい？」

慶介の指示通り尋ねてみる。

「そうね……、まかせるわ」

悠希らしい答えだと思った。

一歩引いて、彼女は自分の意見をあまり通そうとしない。

『だったら、楽じゃねえ？』

『甘いぞ佳織、これは逆に男のセンスに加えて観察力が試されている。言いかえれば、私が今何食べたいか察して、ということだ』

『いや、深読みしすぎだろ』

『いや、俺はそう深読みするが、いかがだろうか、ブリっ子腹黒女王のぞみよ』

『あはは、慶介くんお願いだから死んでください』

色々と同じくも難航しているようだった。

『ねえ、栄治』

久が口を開く。

『僕は栄治が考えるのが一番だと思うよ。栄治があーだこーだと頭を悩ませることが重要なんだよ。そうやって選んでくれた場所のほうに悠希も嬉しいと思う』

『甘い、甘いぞ久！ 現実そんなキャンディーのように甘くはない！』

『そうだヒッサー！ えーじなんか選ばせたらメイド喫茶とか行くのがオチだろ？ ドン引きだっつーの』

『それでいいんじゃないかな？ 僕ならお店の雰囲気がいいことよりも、相手が自分の為に必死に選んでくれたことの方が嬉しいな』
佳織め……滅茶苦茶いいやつて。

だが久の言うことは、的を得ているような気がした。

知識がないのは仕方がない。

だがそれを事前にどこかで補わなければいけなかったはずだ。

それを、全部他人に頼ってカンニングするようなことは、ずるくないだろうか？

成り行きとはいえ、デートに誘うということは、相手を楽しませるための時間をセッティングしてあげることではないだろうか？

そこまで深く考えることではないのかもしれない。

でも、このやり方には、誠意もプライドもない。

ゲーム感覚で遊んでるような、悠希にとっても失礼な気がした。

たとえ相手が、自分に気がなかったとしても、だ——。

「……」

俺は耳に手をやり、インカムを外した。

「じゃあ、上手いところ知ってるからそこに行こう。でも、そんなに洒落たようなところじゃないんだけど……」

これが、今の俺の精一杯だ。

悠希は少し笑い、自分の襟元を指差した。

口だけを動かす。

マ・イ・ク・は――？

「……すごいな」

どこで気づいたのだろうか？

始めから、何かおかしいと思ってたのかもしれない。

俺は、マイクも外した。

「ずるは止めるの？」

茶化すように、彼女が問いかけるのも珍しい。

「等身大が大切だと、親友が言ってたもので」

「私もそう思うわ」

彼女は同意して頷いた。

事件 ― 昴栄治

悠希とのデートはつつがなく終わった。

デートと言うには、日常的だった。

いつも通り、彼女は一步引いたスタンス。

服や装飾品にも興味を示さない。

なのに、ブランド品なんか細かい知識は豊富。

最後に彼女は、こっそりと付いてきてた久を苛めると明言した。
すまん、久。お前に待っているのは氷点下の未来だ。南無。
もし久が生きてたら、今度学食を奢ろうと思った。

*

岐路に着く。

帰り道、セントラル街から外れた公園にさしかかる。

カップルでにぎわう公園を横切るのは憂鬱だ。

「？」

だが、この日は少しだけ様子が違った。

公園はパトカーの赤いライトに彩られていた。

公園の中心には時計台がある。

その周りを取り囲むように野次馬たちが集まっていた。

一体、何が？

俺も野次馬に混じり、周りの話に聞き耳を立てる。

――デートスポットの時計台？

――業務用入り口から首吊り自殺だって。

――猟奇殺人？

――中年の男、このあたりの清掃員らしいよ。

猟奇殺人とか、物騒な言葉が聞こえてくる。

思わず顔を顰めてしまう。

ブラウン管の向こうでは、毎日のように誰かが死んだことが告げられる。

でも、それが現実として身近で起こると、不快感が沸き起こる。まるで、平凡な日常が犯されたように。

「あれ？」

野次馬に混ざる佳織の姿を見つけた。

近づき肩を叩こうとした。

「……間違いない。アイツだ——」

彼女の呟いた言葉に、肩を叩こうとした手が止まる。

「アイツ？」

代わりに口が動いた。

「えっ……栄治？」

珍しく、驚いたように目を見開く。

「誰だよアイツって」

「……えっ、何が？」

佳織はシラをきる。

「いや、今言っただろ？」

「さあ……覚えてねえや」

彼女はそっぽ向いた。

——暗黙の了解、という言葉が俺たちの仲にはある。

絶対のルールとして、ソイツは存在する。

全ての始まりは十年前、ブラック・マンデーと呼ばれる一連の事件。

目を閉じれば、その光景はまざまざと思い出せる。

立ち並ぶ家が燃えていた。

大人たちが血走った目で鈍器を振るっていた。

刃物も振るっていた。

公開処刑が、燃える街の中で当たり前のように行われていた。

原子力発電実験施設のメルトダウン。

それが、想像を絶する大惨事を招いた。

施設の研究者たちは安全管理を怠ったとか。

実は危険が発覚していたのに、実験を続けたとか。

果ては、あの施設では核兵器の開発が行われていたとか。

大人たちは色々なことを口走っていた。

施設に関わっていた研究者、労働者の家族さえも、市民たちは許さなかった。

異常な空気だった。

伝染病のように狂気が感染して、皆おかしくなっていた。

そんな人々から逃げるように、俺たちは街を走った。

これは、俺の体験。

久は久の、慶介は慶介の、それぞれがそれぞれの悪夢を見たのだらう。

悪夢の形は様々だから、傷の形も様々。

ブラック・マンデーのニュースに過剰に反応する慶介も。

ごく稀に、人が変わったかのように軽薄な笑みを見せる久も。

上の空でボーっとすることがある日向も。

俺だってそうだ。

人が怖い。

どこかでスイッチが入ると、人間は狂ってしまうのだと警戒するようになった。

俺たちは、互いの傷に踏み込むことを躊躇った。

下手に触れればそれは——簡単に壊れてしまうと知っていたから。

では。

佳織の抱えている傷とは、俺と同じなのだろうか？

同じ風景を見ながら、俺たちはどこか異なった傷を抱えているよ

うに思えた。

「……塚本一族毒殺事件」

彼女は、小さく呟いた。

「えっ？」

聞こえていたのに、俺は聞き返していた。

「なあ、栄治は七人でいたいと思う？」

話が強引に変えられる。

「七人って……」

「久いのぞみん。野獣と日向に悠希。んで、アンタと私」

南一家。

「当たり前だろ」

心からそう思う。

「そっか、……なら、大丈夫」

佳織は、寂しそうに笑った。

「大丈夫って……」

「私たちは、同じ方向を向いているよ」

まるで俺の心を読んだかのように。

彼女は俺とどこか違うんじゃないか、という不安に答えるかのよう
に。

でも。

……同じ方向なのだろうか。

本当にそうなのだろうか。

「じゃあ、俺たちはどこに向かっているんだろうなあ……？」

「楽しい未来だよ」

後ろを振り向かないように。

みんな、後ろを振り向かないように。

漠然とした不安。

過去は存在しない。

過去には戻れないという。

でも、過去は存在する。

過去だった現在が存在する。

ならば、過去の存在を誰が否定できる。

少しずつソレは、足元から浸水してくる。

コポコポと音を立てて。

排水溝が泡立つように。

染み渡り、何かを犯していくような不安。

そして、その不安の中心に、佳織がいる――。

そして、沙耶悠希――。

彼女だけは、その傷をけして俺たちには見せない。

エヴァ3 ―幕間―

「人を傷つけなくとも、のら犬は捕らえられる」

足長おじさんは、エヴァとノヴァにそう言った。

エヴァのノヴァの二人だけの世界に変化が訪れた。

「なぜ捕らえられる？」

彼は優しい口調でそう問いかける。

「・・・・・・」

ノヴァは答えることが出来なかった。

うつーん、と唸るばかりだ。

「保健所で処分される為」

エヴァは答えた。

「ほけんじょ？」

ノヴァは問い返す。

「そうだ。薄暗い檻の中で、その犬は殺される。よく保健所なんて知ってたね」

ろくな教育も受けていないのに、と続けたかったのだろう。

ファウラウェイ・プロジェクトの話の続きをしよう。

脳に人格を移し変える実験の失敗となったのは、非検体の少年の一人が暴走してしまったからだ。

脳波が増幅し、それは電気となって研究所内に広がった。

だが、微弱な電波であったために、実験をモニター越しに観察していた研究者たちは気分が悪くなる程度だったが、非検体として外部から人格情報を受け取るようにプログラムされた彼らには甚大な被害だった。

一人の非検体が昏睡状態に陥り、人格矯正のプログラムが施される結果となった。

それは、許容量を超えた恐怖や痛みから人格の崩壊を守る、というものではない。

人格を崩壊させ、脳自体を破損させようとする防衛機能から守るために、オリジナルの人格をプログラムの人格が殺してしまうことだった。

インナー・マードーと名づけられたプログラムだった。

そもそもが、ドナーの脳情報をまっさらにする為に作られたプログラムだった。

そのプログラムを、ファウラといった。

「ウェイは、誰かを傷つけた？」

エヴァは尋ねた。

「傷つけてないな」

「それはフォウの暴走じゃなかったの？」

暴走した非検体のモルモット名だった。

「悪くないのに、ウェイは殺されるの？」

「たとえ傷つけなかったとしても、これから傷つけないという保障はどこにもないのだよ」

彼は痛ましそうに答える。

「理不尽」

「難しい言葉を知っているな」

「茶化さないで」

エヴァが彼に詰め寄る。

「エヴァ——」

たしなめる様にノヴァがエヴァの肩に手を置いた。

「——ごめんなさい」

エヴァは俯く。

「ウェイは友達だったのか？」

「うん、友達」

エヴァの代わりにノヴァが答える。

「そうか、友達なら悲しかったね。では、暴走した彼はとうだった？」

足長おじさんは、そう言つてエメラルドの柱の一つを指差す。
他の光の柱と違い、そこには一人の少年が眠るように培養液をたゆたっていた。

「アレは嫌い……乱暴だった」

憎憎しげにエヴァは答えた。

「そうか……、だが、ウェイの心配は無用だ。彼は特殊なプログラムチルドレンで、彼の人格にはロックがかけている」
ウェイという非検体は実験用だった。

人間の脳にインストールされた人格が定着するための非検体だ。
だから実験が失敗していなければ、彼がインナー・マードーによりデリートされることはない。

「どうということ？」

ノヴァは首を傾げる。

「ウェイは大丈夫ってことだよ」

エヴァが答える。

「そっか、エヴァはよく分かったね。頭いいなあ」

「ノヴァは右脳に忠実すぎるの」

「右脳？」

また首を傾げる。

エヴァは仕方ないなあ、と呟いた。

「なんでもないよ、ノヴァは私に出来ないことが出来るってこと」

「そっかあ」

そう言つてノヴァは笑った。

「……君たちは、仲がいいなあ」

足長おじさんはぽつりと呟く。

「当然！」

ノヴァは胸を張つて言つた。

エヴァはもう一度、仕方ないなあ、と呟いた。

「さて、では野良犬の話に戻ろうか」

足長おじさんは言った。

「野良犬は人を傷つける可能性があるから処分される。だがそれは人だって同じだと思わないか？」

「同じ？」

珍しくエヴァが首を傾げる。

「疑わしい者は排除しなければ安心することが出来ない、ということだ」

「なんで疑うの？」

ノヴァが質問する。

「その人のことをよく知らないからだ」

「でも、私はみんなのことを良く知らない……。知らない人ばかりだよ」

「そうだ、知っている人よりも知らない人の方が世界には圧倒的に多い」

満足そうに頷いて、彼は続けた。

「疑い出せばきりがなく、結局のところ世界は自分の知っている限界まで縮小されていく」

「世界は、小さくなるの？」

残念そうにエヴァは呟いた。

無機質で小さい二人だけの世界が、さらに小さくなるとどうなるのだろうか、と。

「そうだ。でも、それは仕方のないことだ」

足長おじさんの目は細くなる。

「誰だって他人が痛むのは良くとも、自分が痛むのは我慢ならないから。だから人を傷つけるものは処分しなければならない。傷つけるかもしれない危険なものは遠ざけたい」

「……………」

「だから人間は、ルールを作ったんだ」

「ルール」

「そう、ルールだ。ルールというのは至るところに存在する。憲法や法律のように、明確に定められた物が全てではない。むしろ、明確に定められたものの方が少ないのだ」

憲法に法律、条令。

道徳や倫理という価値観もルールブックに含まれる。

それをどれほど破るかという暗黙の了解も――。

至るところにルールは張り巡らされ、時としてそれらは重なり合い、矛盾する。

エヴァとノヴァは、白い大人の目を盗んで、足長おじさんから世界を学んでいった。

蜜月の刻。

世界がまだ、エヴァとノヴァの二人だった時の話――。

塚本一族毒殺事件概要

塚本一族毒殺事件について――。

その事件は『ブラック・マンデー』と呼ばれる、旧御座市における原子力発電所融解事故から始まる一連の事件の皮切りとして認識される。

事件は原発事故から一カ月後、一連の事後処理についての案件を話し合う為に、非公式で塚本研究所の上層部が集まった場、塚本の屋敷で起こった。

毒物として使用されたのは数年前に社会現象となった除草剤の液剤だった。

これは致死性が非常に高く、一口飲めば確実に死に至る毒物。解毒剤もないために、服毒してからどれだけ早く胃洗浄を行えるかどうかが助ける為の手段となる。

警察への通報は、重役たちと突然連絡が取れなくなり、現場に赴いた塚本技研の社員によって行われた。社員が屋敷へと足を踏み入れたとき、食堂にて彼らは既に息を引き取っていたという。

犠牲者三十名以上。

塚本一族、塚本佳織を除く全員と、塚本研究所部次長以上の役職者、屋敷で働く給士者たちは例外なく命を落とした。

過去あまり類を見ない大量虐殺事件だったが、警察は原発融解事故の捜査もあり、大規模な捜査班を組むことが出来なかった。

そして、事件の残虐性とは裏腹に、事件に対する大衆の反応は予測し得ないものだった。

天誅――と。

テレビや新聞における一部の報道機関が述べる、原発溶解事故の復讐である、という見解が御座市の市民達の中で大反響となる。

結果的にこの事件は過激な市民運動が行われるきっかけとなった。だが、この事件に関しては不明瞭な点が多く、一部警察の見解で

は内部犯の疑い、集団自殺の見解さえも持たれている。

一点目に凶器となった毒物について。

毒物は前述したとおり除草剤であり、ドリンク剤への無差別混入事件なども発生させた毒性の高い薬物である。

それにより社会問題化した経緯もあり、現在では毒素となる塩素塩の高い錠剤は製造・販売が中止されている。

使用された毒物は現行の基準を明らかに超えたものだった。

一般的には販売できないものである。

それ故に、薬物開発を行っていた塚本研究所の内部犯である可能性が示唆されていた。

二点目に、塚本研究所原子力発電のチームではなく、ファラウェイプロジェクトに関する者がターゲットとして狙われたこと。もちろんファラウェイ・プロジェクトは極秘扱いであり、警察の認識は『塚本財閥、研究所の上層部』となっている。

確かに出資者は同じで密接な関係が持たれているが、原発事故に対する報復とするならば原子力発電所チームが狙われるはずである。

事実、第二、第三の事件については当事者である高辻市長、箕正樹、井端紫音が狙われて、命を落とした。

確かに塚本とはブラック・マンデーにおける象徴的な名前ではあるが、直接的に関係のない、ましてや極秘裏に研究されていたファラウェイ・プロジェクトが狙われたことは腑に落ちない事実である。

当事件に関しては、未だ犯人の検挙には至っておらず、現在針木署が捜査中となっている。

刑事 ― 昴栄治

時々、分からなくなる。

あれは悪夢だったのか。

それとも救いだっただのか。

ざざざと。

深夜の放送の終わった後の砂嵐のように。

それに混ざるサブミナル効果が一瞬だけはっきりと見えて、気分が悪くなる。

「殺せ――殺せ――」

「逃がすな――逃がすな――」

救い、だと――？

嫌になる。

あれは、悪夢以外何物でもない。

頭を横に振って忘れることにした。

額に浮かんだ汗も飛び散る。

「あつい……」

目を開けば、アスファルトから立ち込める熱気が視界の先を歪ませる。

蜃気楼のように、針木の街を歪めている。

見知った街が、まるで知らない街を訪れたかのように現実味を帯びない。

目的もなく歩いているわけではなかった。

立ち止まり見上げる。

物々しく、威圧するように立っているレンガの建物の入り口には

こう書かれていた。

『針木警察署』

一介の学生が訪れるのはなんとも違和感のある絵である。

「どうも、非行少年です」

ぼそつと呟いてみた。

「ほう、そうかい。じゃあ補導せねばならんね」

「大丈夫、軽犯罪ですんで」

「軽くとも、犯罪は犯罪だろうに」

振り向いた先には上着を片手に抱えた壮年の刑事がにこやかに手を振った。

「栄治くん、久しぶりだね。突然、連絡してすまなかった」

「中野刑事、お久しぶりです」

彼の名前は中野誠刑事、現在は特殊犯罪、誘拐や無差別テロなどを担当する刑事だった。

俺は中野さんと個人的に面識がある。

ブラック・マンデーを境に、交流を持つことになった。

「栄治くん黒いねえ、海にでも行った？ それとも部活？」

「いや、元々地黒なんで。海にも行ってないし帰宅部です」

「ダメだなあ、青春してないじゃないか。気付いたら歳なんて簡単にとっちゃうよ？ この歳になったらホント後悔しか出来ないんだから」

そう言って豪快に笑う。

「ここで立ち話もなんだ。涼しいところにも行こうか？」

「お仕事は大丈夫なんですか？」

「子供が大人の仕事の心配なんてしなくていいんだよ」

「そんな理解のある大人、久しぶりに見ました」

「そう言ってくれるのは君だけだ。同じ事を娘に言っても煙たがられるだけだよ」

「娘さんが小さい時は、ほとんど家に帰らなかったからでしょ？」

愛想つかされたんじゃないですか？」

軽口を叩いたつもりだったかが、中野さんの表情は曇った。

「……そうだね、もうかれこれ十年くらいになるのかな」

懐かしむように、中野さんは空を見上げる。
つられて俺も空を見上げる。

「熱いですね」

「こんなに熱くはなかったかな」

「でも丁度、こんな風に晴れていたんですよ。雲ひとつない空を佳
織と見上げていたんです」

「青春、だねえ……」

会話はなくなる。

沈黙のまま、よく晴れ渡った秋の空を見上げていた。

やがて、中野さんが口を開く。

「なあ……、栄治くん」

「はい？」

「通院、せんのかね？」

「……」

呼び出されたときに、なんとなく用件には気づいていた。

「病気じゃないですよ」

なんでもない、と笑うように。

「異常な状態が日常化しているだけだよ」

「……俺の記憶が戻れば、捜査が進展するかもしれない？」
意地の悪い笑みを浮かべてみせる。

「……」

「すみません……冗談です」

自虐のつもりだったが、最高に笑えない。

「……すまないね」

本当にすまなさそうに。

「そう思っているのも事実だよ」

刑事の立場として告げる。

「それが仕事ですからね……」

そう理解していながら、軽い失望を覚える。

他人の親切に理由があるのは、当たり前であり、悲しいことだ。

「……………考えておきますよ」

曖昧な答えで会話を締めくくった。

「ところで今日はどうしたんだね？」

中野さんが尋ねる。

「あの事件……塚本一族毒殺事件。犯人はまだ検挙されてないんですよね？」

「ああ……」

中野さんは胸のポケットからタバコを取り出して火をつける。大きく息を吸い込み、煙をゆっくりと、長く吐き出して。

「時効まで、あと八年だ」
そう呟いた。

記憶3 逃避行 ― 昴栄治

どこまで歩いてきたのだろうか。炎に囲まれた街を出て、車が脇に捨てられた国道を辿った。手を繋いで、二人で歩き続けた。息が切れても、歩くのを止めなかった。幼い子供の足で、一体どこまで歩くことができたのだろうか。踏みしめた衝撃が、腿の筋肉を痛めつける。足の裏がビリビリとする。脳が熱を発しているみたいで、考えることが億劫になる。喉が渴いて仕方がなかった。

「ねえ……」

どこまでいくの？

少女にそう問いかけた。少女は決まってこう言う。

「今止まったら、二度と動けなくなる……」

彼女の声も掠れている。会話はない。ただ、どこまでも続く国道を歩き続けた。

すぐに、限界は訪れる。足が絡まった。思い通りに動かなかったのだ。俺は地面へと倒れこんだ。引っぱられるように、彼女も倒れた。ひゅー、ひゅー、と喉から奇妙な音が漏れていた。彼女の言った通りだった。一度止まると、何かが折れた。これまで身体を支えてきたものが折れて、動けなくなった。

「えーじ……」

彼女は、俺のことをそう呼んだ。

「エヴァ……」

彼女の名前を呼ぶ。もう立ち上がることも出来ない。でも、繋いだ手だけは離さなかった。

「……生きよう」

そう言って、彼女は笑う。

「うん……」

俺は頷いた。

意識は落ちた。

……。

「……い、聞こえているか？」

どのくらい、眠っていたのだろうか。

「君たち——！」

強く肩を揺すられて、吐きそうになった。

「すぐに救急隊員を！ 男の子の方は意識があるぞ！」

視点が焦点を結ぶ。中年の、カッターシャツにネクタイをした男性だった。

「君、大丈夫か？」

「気分が悪いとか、頭が痛いとかはないか？」

次々と質問を浴びせられる。

「——両方」

そう答えた。体が冷たいことに気づいた。寒い。全身が寒い。手がかじかむ。

手？

冷たいものを握っていた。背筋が冷たくなる。恐る恐る、顔を横に向けた。

「……」

彼女は、目を閉じたまま動かなかった。

「……あああ」

声になっていたのかは分からない。ただ、酷く心が締め付けられた。ほんの三日前から始まった記憶。ほんの三日前に出会った少女。その少女が、目を閉じたまま動かない。酷く心が乱されていく。

——塚本佳織。

それは、俺の半身の名前。たったの三日間運命を共にしただけの俺の半身。

かけがえのない半身だった。

エヴァ4 ―幕間―

「彼女たちは、高い知能指数を示している。よって、プラン・ビーの実験に使用するのとはどちらか一体とし、もう一体はその頭脳を買って、研究者として他部署へと移します」

ノヴァが足長おじさんと呼んだ男。

エヴァの直感は当たっていた。

「……なんの権利があつて、あなたは」

「取締役権限です」

研究者たちはうるたえる。

「なっ……!!」

「春賀建設が保有する持株率が三十五パーセント、筆頭株主権限によりこの度塚本技研の代表取締役就任しました塚本泰三です」

足長おじさんは、薄く笑う。

その目には、爬虫類のような鋭さと獐犢さが隠れていた。

優しい笑みを向けていたおじさんはもういない。

そこにいたのは、研究者達を虫けらのように見下す軽薄な男だった。

「ば・馬鹿な……『塚本泰三』は……」

「ええ、ようやく刑期を終えて出所したのですよ」

「……」

「研究所所長、廣田健三さん——お会いするのは初めてでしたね？」
白衣を着た初老の男性。

つい最近まで神の様に振舞っていた男の額から、冷や汗が落ちる。
「貴方には、本当にお世話になりました」

——塚本泰三。

御座市の一大財閥『塚本』。

土地、電気、ガス、水道、『住』に関するあらゆる事項を取り扱

う塚本財閥であるが、意外なことに塚本財閥の歴史は浅い。塚本泰三という非凡な男の才能からその歴史は始まった。

彼はまず、針木市とその周辺の土地に目を付けた。

そもそも針木市に人が集まったのは、周辺に大きな都市がないからだ。

針木市と複数の地方自治圏、それがこの地域であった。

当時の針木市の土地は狭く、面積は現在の二分の一。

土地代は高く、ベッドタウンを作る為の周辺の土地は古くからの地主達が高価格を提示するために難しい状況だった。

彼の目的は、「都市」をつくることだった。

街をつくり、産業を興して、人を集める。

人はどうやって集めるのか。

家族という集団を集めるには、その長となる家長の仕事がこの街で行わせることだった。

家族が住む為には、交通、買い物、その他社会生活の利便性も求められる。

必要なのは土地と資金だった。

では、地主達はなぜ土地代の相場を上げることができたのか。

針木市にとって利便性の高い土地であることも理由の一つである。そしてもう一点が、「唐風」と呼ばれるこの地方で幅を利かせていた広域暴力団の影があった。

彼らは、当時の針木市都市開発を担当する政治家の後ろ盾として存在した。

針木市は相場を上回る土地代を少しずつ地主より購入していく。

そのキックバックが政治家の懐に流れる。すなわち街ぐるみの癒着システムが、この街の根底に存在していた。

その為に針木市は大々的に土地を買い取ることが出来ずに都市の発展は遅れる。

それどころか、都市の発展が住民の需要に追いついてしまえば土地代は下落する。

それ故に、彼らは都市の発展に、本質的には後ろ向きな姿勢を示していた。

住民が住む土地を選ぶ時代とはいえ、地元企業で働く者たちにとっての住む場所は針木市以外に選ぶ選択肢がなかった。

政治家、唐風、地主達に税金が分配されるシステムが、この地方を支配していた。

塚本泰三はまず彼らを、彼らの癒着を維持するシステムを観察した。

目的は、彼らの癒着システムに不満を持つ者たち。

利権にあやかることが出来ず、さらに義憤に駆り立てられる者たちが好ましい。

目をつけたのは、唐風の若い衆と当時癒着を大々的に行う政治家の第二秘書、森野勇次だった。

癒着に塗れた地方政治の中で、国民の生活水準の向上を掲げる森野勇次は浮いた存在だったのだ。

そして、針木市における政界のスキャンダルが発生する。

野党議員による州議会での告発。

不正の告発は、党にとっても、その政治家にとってもプラスになる。

森野勇次はその証拠を野党議員へとリークすると共に自身も野党へと移籍した。

その後、針木市知事の辞任表明。

新たな知事には、告発を行った政治家の党から輩出された。

新たなパイプを繋ぐと唐風のトップ達は動いた。

だが、「話し合い」を持ちかけられたとして、党は彼らを警察へ売った。

トップを失った唐風をまとめ上げたのは、塚本泰三にそそのかされた者達だった。

都市発展の為に、と。

彼らを言葉で酔わせた。正義は我にありと、その言葉こそが組織

への反旗と、それに付随する犯罪行為を彼らに許容させた。

唐風組の中で力を失った古き者たちは、義憤に溢れた若者達にその座を追われていった。

いつしか、地主の後ろ盾だった唐風組は逆に地主達を追い込む存在となった。

その力で塚本泰三は、地主達の土地をこれまでの相場を遥かに下回る数値で買い取った。

そうして、人を集める為の手段と、魅力的な街づくり。

主に中流一般家庭を狙い、各企業に格安で土地のリースを行い、人を集めた。

同時に学園都市、産業都市という街づくりと、水道・光熱費の低価格プランを提示。

わずか二十年で御座市を政令指定都市までのし上げた。

塚本を一代でのし上げた稀代の天才。

春賀晃、森野勇次、高辻洋平の師にあたる人間。

だが、その才能ゆえに塚本を追われた。

塚本グループは更なる都市の発展として、一般家庭の生活水準の向上を目的とした。

公務員の職務、作業システムの見直しと改善による人件費削減、それによる税金の削減を御座市市長高辻洋平、針木市市長森野勇次は提案し続けた。森野勇次は後に、その政策に対して恨みを持つものに狙われることになったが、市全体としては税金の値下げとそれによる景気回復の根本的な対策として大きな成果を挙げた。

それも偏に、塚本泰三の影響である。

塚本は、市民の生活を取り巻く費用の削減、という視点からアップローチを行った。

電気・ガス・水道、交通機関のローコスト化による値下げである。正味現在価値法に基づき、予想される成果がもたらす利益が投資額

に対して妥当であるかの判断をし、『仕組み』の変革を行ってきた。その研究の一環として、原子力発電に目をつけた。

熱効率性を大幅に高めて、原価を抑える新型原子炉の実験施設の設置を提案。

安全面で難色を示す高辻の説得には、森野勇次を使った。

この時点で街は未だ発展途上であるが、彼はすでに目的を達成していたと言える。

御座市という政令指定都市が生まれた。

田畑と山、寂れた漁村の風景は、僅か二十年で百万都市と化した。彼は何もない場所から街を作り上げたのだ。

そして、塚本泰三は目的を失った。

一つ言うならば、塚本泰三は決して人道的な思考ではない。人生という「暇つぶし」をいかに消化するか。

彼は、そう考えていたと語ったらしい。

そんな中、彼は一人の男と出会う。

箕正樹――。

ファラウェイプロジェクトの元となる「箕理論」を発表した男である。

人間の思考のデータ化。

簡単に言えば、人間の脳から発せられる電気信号を再現し、他人の脳に移し変えるという内容だった。

サイエンス・フィクションのような話だ。

だが、塚本泰三は興味を示した。

意識を移し変えていくことで、人は永遠に生き続けることが出来る。

多くの狂人たちが夢見てきた不老不死の夢。

神の所業。

塚本泰三は考えた。

この男が、神になれるか否か――、見届けるのも一興、と。

塚本グループが出資者となり、原子炉開発の傍ら研究は始まる。

実験は、人道を大きく逸脱するものだった。

体外受精、遺伝子操作により生まれてきたモルモット達。道具を使い捨てるように、笈正樹は彼らの脳を取り出し、培養液に浸して実験を行った。

世間に研究の内容が知られてしまえば、批判は免れない。それ故に、笈正樹は表向き原子炉の研究者という肩書きだった。

だが、問題が発生した。

コスト面で実益を期待される原子炉の発明に対し、秘密裏に行われる悪趣味な実験にこれ以上費用は割けないという判断が下された。要は、利益の望めない赤字部門ということだ。

それに追いつきをかけるように、笈正樹が行方不明となった。研究者たちは、それでも研究を続けようとした。

だが、暇つぶしはこれで終わり。彼は引き際を知っていた。

塚本泰三は、フアラウェイプロジェクトを凍結することを決めた。

そして、事件は起こる。

塚本泰三は逮捕された。

容疑は脅迫。

広域暴力団を使い、地主達を脅して、土地を相場を大きく下回る価格で買い取っていたことが内部より告発された。

皮肉なことに、過去自分が森野勇次に命じた同じことを、今度は自分へと返されたのだ。

塚本グループの上層部にも、狂気に取りつかれた男たちはいたのだ。

永遠の命、不老不死の夢。

そんな世迷い言に踊らされている輩が、フアラウェイプロジェクトを凍結させようとした塚本泰三からその権限を剥奪した。

塚本泰三は投獄され、全ての地位と名誉を失う。

失いながら彼が思ったことは、極めてシンプルだった。

失うのは、あっという間だ。

築くのは時間がかかり、崩すのは一瞬。

……。

ああ……そうか。

作り終えたならば、次は崩せばよかったのか。

これでまた退屈せずに済む。

一時休憩だ。

そこに、貶められた憎しみはなかった。

極めてシンプルに、歪んでいた。

「皆さんにも、本当にお世話になりました。この研究所の予算を引っ張るために、私を嵌めるのに一役買ってくれたのでしょうか？」

軽薄に笑う。

「……代表取締役は？」

廣田の声は震えている。

「求心力のない男は、アピールの仕方が下手か、それとも本当に能力がないのか。彼は後者でした。原子炉の開発に資金を回せなければ研究は進まず、無駄な出費もかさむ。塚本グループの経常利益は私が入獄してから下がり続けました。なので、春賀晃を使って株を集めました。彼はシンプルで優秀な男だ、利益、数字でのみ稼動する。よって、私の提示するリターンに乗ることは分かっていました。後は株式の大量保有報告書を春賀晃に提出させ、新たな取締役にな私を選ばせました。塚本財閥前社長は無能な男ですが、地位と名誉と無駄なプライドだけはあった。なので、後腐れがないよう『行方不明』になって頂きました。当然の結末です。自らの私利私欲を貪れば、唐風の反感を買うことは目に見えていましたからね。『親方』を説得するのも簡単でした」

「はははっ……」

廣田は笑うしかなかった。

「何が、可笑しいのですか——？」

「ひっ——！」

廣田の肩が、びくりと跳ね上がる。

「怯える必要ありません」

一転して、優しい口調で。

「私は、私に媚びる者に対しては非常に優しい」
にこり、と笑う。

「そしてあなた方は、強きになびき、弱きを挫く人種です。ならば、私はあなた方を優遇しましょう」

「なに、を……」

「廣田さん——あなたも、過去のことを後悔する必要はありません」
理解ができない、という表情。

「私を嵌めたその狡猾さを、私の為に使ってください。今度は、私が絶対的な強者です」

「……」

「返事は——？」

「わ、分かりました——！」

「さて」

足長おじさんは、振り返る。

その先には、エヴァとノヴァ。

「……」

ノヴァが後ずさる。

それを庇うように、エヴァが前に出た。

別人だった。

彼女たちと話していた時の優しい面影は微塵もない。

逆光で影となり、獰猛な捕食者の目だけが剝りぬかれていた。

「エヴァ、ノヴァ——。今日は、人間についてだ」

「……」

エヴァは、両手を広げる。

「エ・エヴァ……」

か細いノヴァの声が背中から聞こえた。

「エヴァ……、君についてだ。君が人間になるための試練だ」

「……人間？」

エヴァは顔を顰める。

「プラン・エーの資料を二部」

足長おじさんは右手を軽く上げる。

「は、はい——」

若い研究者が、慌ててその手に資料を渡す。

資料には、『ファウラ』という文字が書かれている。

インナー・マードアの資料。

「エヴァ、君にはここに書かれている内容が手に取るように分かるはずだ」

「……分からない」

嘘だった。

足長おじさんの言うとおり、エヴァには書類の内容が分かった。

だが、直感的にそれを言うてはいけなさと悟った。

「この『算理論』を理解した者を研究者に、そして残った方をモルモットとしてプラン・ビーのドナーとする」

「馬鹿な……そんなモルモットに理解できるはずが……」

「出来ますよ、廣田さん」

「なっ——」

廣田は言葉を失う。

「お言葉ですが、算理論は狂人の空想理論。私でも理解が……」

「私はね、少女は貴方よりも頭がいいと言ったのですよ」

「何を——」

ちっぽけな自尊心を傷付けられ、廣田の口調に苛立ちが混ざった。「狂人の空想？ 自分の認知できない事項に対して否定することしか出来ない貴方では、到底エヴァには及びません。……まあ、そんな愚かで矮小な貴方だからこそ、私は貴方を優遇する。あの時はどうでも良かったので野放しにしましたが、今度は裏切れないようにします。私にも、楽しみなものが出来たのでね」

「う、裏切れない……？」

「簡単なことです」

塚本泰三は懷から小さな箱を取り出して、廣田へと差し出した。

「？」

「開けてみてください」

箱を持ったまま廣田は立ちすくむ。

蓋を持ち上げようとする手が震えていた。

開けようとして何度も躊躇う。

だが、意を決したのか、唾を飲み込み、一気にその蓋を開いた。

「…… ああっつ」

言葉が失われる。

「私を嵌める為に動いたのは、副社長、顧問弁護士、研究室室長、そして貴方の四名でしたね」

入っていたのは、ごつごつとした、三本の小指だった。

「——命は、大切にしなさい」

子供を諭すように、廣田の耳元に優しく語りかける。

廣田は、箱を手にしたまま崩れ落ちた。

それっきり、塚本は廣田への興味を失う。

再びエヴァとノヴァを見据えた。

「エヴァ、頭のいい君ならば分かるはずだな？ 君には選択肢が提示された。人間になるか、それとも脳をくり貫かれて死ぬか、二つに一つだ」

その言葉が意味するもの、それは……。

「そして人間になることを選ぶならば、君にはキミの一番大切にしているものを差し出してもらおう——」

背中に隠れるノヴァと手が震えた。

「助かりたければ、出来損ないを切り捨てろ——」

「ひっ——」

ノヴァがエヴァの服のすそをぎゅっと握り締める。

「黙れ」

エヴァは塚本泰三を睨みつけた。

「その目は、人間ではない」

その姿を見て、彼は満足そうに笑うばかりだった。

「大切なものがある。その為ならば反社会的な行動も辞さない——
そんな怪物の目だ」

怪物は、そう告げた。

記憶4 - 1 病院 — 昴栄治

御座市と針木市の県境付近で倒れていた二人の子供。次に目を覚ましたのは、針木市の病院だった。

丸三日ほど意識を失っていたらしい。

始めに横たわった自分の体が視界に入る。

デジャヴだ。

つい最近も俺は、こんな風に目を覚ました。

だが、今度は医療機器が少ない。

チューブも、腕に取り付けられた点滴だけだった。

「……気分はどうかね？」

壮年の白衣の医師が、優しい笑みでたずねる。

「昴栄治くん——」

「昴？」

聞きなれない名前で呼ばれる。

「……違うのかね？」

「かもしれない」

「かもしれない、と？」

「……そう名乗れと、言われました」

医師は怪訝な表情を浮かべた。

「そう名乗れ、とはおかしい言い方だね。誰にだい？」

「エヴァ」

「エヴァ？ それは誰だい？」

「……誰？」

エヴァとは、一体誰のことだったか。

俺の手を引いてくれた少女、俺に昴栄治と名乗るよう懇願した少女。

俺が目覚めてからたった六日の世界で、俺の半身だった少女。そう伝えた。

「塚本佳織ちゃんのことかい？」

「塚本、佳織？」

「その名前に、記憶がないかね」

難しい顔をしながら、医師はカルテに何かを書き込んでいる。

「……エヴァは、どこに？」

尋ねてみると、医師はカーテンで区切られた隣のスペースに目をやった。

傍らに控えていた看護師に頷くと、看護師はゆっくりとカーテンを開いた。

窓から暖かな陽が差し込んでいた。

きらきらと輝いた、まるで樂園幻想のような光だと思った。

エヴァはその真ん中で、静かに寝息を立てていた。

「君が意識を取り戻す数時間前に目覚めたのだから、再び眠ってしまったよ」

「……」

その姿が綺麗で、言葉を失った。

目から涙が溢れた。

どうしてだろうか？

自分でも分からない。

「彼女も、あの騒動で酷い目にあつたみたいだ」

「あの騒動？」

思い出した。

真っ黒な雨。

立ち並ぶ家が燃えていた。

喧騒と怒号が響いていた。

当たり前のように人が人を殺して、炎に吞まれて踊る人々。

「覚えているのかね？」

医師は俺の顔を覗き込んだ。

「……はい」

頷いた。

「何を覚えているか、話せるかね？」

正直に話した。

白い部屋で目を覚ましたこと。

そこから、彼女に手を引かれて逃げ出したこと。

街が燃えていたこと。

人が殺されていたこと。

黒い雨が降っていたこと。

大きな破裂音が聞こえたこと。

世界の色が、赤と黒しかなかったこと。

エヴァとの会話。

唯一覚えていたのは彼女の名前。

なぜかは分からないけど、彼女の顔を見たとき、その名前だけを思い出した。

そして、歩けるだけ歩いて、その果てで力尽きたこと。

つかえながら、なんとか最後まで話した。

その後簡単な診断をして、医師と看護師は去った。

ドアの閉まる音と同時に。

「……大人と話しちゃいけない」

声の方向に視線を向けると、エヴァが目を開いていた。

「起きてたの？」

「ここにいたら……また自由を奪われる」

エヴァは、俺の質問に答えない。

「早く抜け出さなくちゃ、戻される……」

うわ言のようにボソボソと話し続ける。

「エヴァ？」

身体に触れようとして、伸ばした手首を掴まれた。

「君のことを、なんて呼べばいい？」

「君は、昴栄治と名乗れと言った」

「君は私を裏切る？」

「ワケが分からない。」

「裏切る気なんてないよ」

それは、本心だった。

「だったら君はも行こう」

彼女の言うことは、不安定な感じだった。

先ほどの医師との会話を思い出して、尋ねてみる。

「昴栄治って、俺の名前——？」

「そう、えーじ！」

「っ——」

手首を掴んだ手に力を込められる。

「私たちは、自由なんだ。人間になつたんだ！」

「人間に、なつた？」

「だから大人の言いなりになる必要なんてない！」

勢いよく彼女は上体を起こした。

「こんなところにいる必要なんてない。行こ、えーじ！ 大人の言

いなりになんてなる必要がない、大人のいない場所に！ 優しい大

人のいない場所！」

そのまま彼女はベッドから起き上がるうとして。

「あっ」

俺たちはもつれ合い、ベッドから転げ落ちた。

「いつっ……」

強かに腰を打ちつけた。

だが、それに気を割く時間もなかった。

俺に覆いかぶさった彼女はもぞもぞと動き始める。

「……急がなくなちゃ、急がなくなちゃ」

取り付かれたように、彼女は這いながら進もうとする。

「ちょ、ちよつと——」

明らかにお互い疲弊している。

止めようとして、今度は俺が彼女の手首を掴んだ。

「……は、なせ——」

「待つて——」

止めようとしたが、腕に力が入らなかった。

身体は未だ疲弊していたのだ。

そのまま俺も引きづられそうになる。

まずい、と思った。

その時、たまたまベッドから一緒に落ちて、垂れ下がったボタンが目についた。

さっき医師が、何か困ったことがあった時に押すように言ったものだ。

空いた手を伸ばし、ボタンを押した。

「どうされ……」

先ほどの看護師がすぐに現れて、床を這う彼女と俺の姿を発見する。

「何をしているの——！」

その声と共に、何人かの看護師が駆けつけ、彼女は取り押さえられた。

「離せ——！ 離せ——！ 私に障るな！」

彼女はもがき続ける。

「落ち着きなさい、塚本さん！」

「楽しいかよ！ そんなに私を縛るのが楽しいのかよおおおお——！」

そうして暴れる彼女はベッドの上に戻されて、取り押さえられ、注射を打たれる。

「あつ——」

カクン、と彼女の動きが止まった。

「助かったわ、昂くん」

看護師の一人が、俺に向かって礼を告げた。

「いえ……」

「でも、君も万全じゃないからね？ けして無理はしないでね」

細いフレームの眼鏡をかけた、中年の女性だった。

厳しそうだが、けして悪い人には見えない。

なのにエヴァは、まるで危害を加えられたかのように暴れた。

「……」

分からなかった。

彼女は、何に怯えていたのだろうか。

……。

それは、十年経った今なお分からないのだ。
彼女の傷が、俺には見えない――。

記憶4-2 訪問 ― 昴栄治

「昴、栄治くんと塚本佳織ちゃんかね？」

面会と言われて、訪ねてきた男は単刀直入にそう言った。

働き盛りを過ぎたくらいの歳、なのに目の輝きは鋭い。

中野刑事との出会いだった。

懐から手帳を取り出す。

ドラマでしか見られないような身分証明書。

実際に突きつけられると、悪いことをしていないというのに威圧される。

「昴栄治くん、塚本佳織ちゃん。二・三、聞きたいことがある」

「帰れ――」

短く、明確に佳織は拒絶した。

「……」

面を食らったように、言葉を失う。

「塚本佳織ちゃん、私は味方だ。私は――塚本一族毒殺事件を捜査している」

「塚本一族、毒殺事件？」

俺は、首をかしげた。

――毒？

――『塚本』一族？

彼女の名前、『塚本佳織』――。

それはピンとこない感じだった。

慣れていない。

俺の中で、彼女はエヴァという少女だったから。

「昴栄治くん、君は記憶を無くしているのだったね？」

そして、『昴栄治』という自分の名前も。

刑事と名乗ったこの男ならば、何を知っているのだろうか？

「中野、さん……。あなたは、俺を知ってますか――？」

「栄治——っ！」

「えっ」

エヴァ、塚本佳織は大声で遮る。

「大人は……敵だ。味方だと告げるなら、間違いなくクロだ」

「……」

沈黙。

そして、中野刑事は睨む少女に困ったように苦笑してみせた。

「昂くん、君たちは唯一の生き残りなんだよ」

「生き残り？」

「そう、塚本一族毒殺事件」

塚本一族毒殺事件——。

彼は端的に、要点をまとめて説明した。

その事件は塚本邸、塚本が出資していた原子炉の研究所の始末について、そして責任について話し合う場で起こったという。

死因は毒殺、水溶液とすることで致死性が非常に高くなる除草剤として使われたものが凶器として挙げられている。犠牲者は、塚本グループの重役、塚本邸で働く従者、合わせて三十五名。

生き残ったのは、たったの二名。

塚本邸の一人娘、塚本佳織。

そして、従者の息子、昂栄治。

その二名の遺体は確認できていない。

現場は割れたワイングラスで散乱しており、そこから該当する毒物が検出された。

ワインのコルクに小さな穴が確認されている。

犯人は、注射器を使い、未封のワインに毒物を混入したという見解だった。

だが、使用された毒物は現在製造・販売されていないこと。

塚本技研の研究所から該当する毒物は発見されなかったこと。

当日、普段立ち入りしない人間を見てないか、中野は佳織に質問した。

だが――。

「死んで当然の人間が死んだ、その何が悪い？」

――佳織は、当たり前のようにそう言った。

「君が殺した、という風にも聞こえる」

中野が睨むものにも、佳織は動じない。

「彼らを殺したい動機のある人間は、八十万人いた」

彼女は、窓を眺めながらそう呟いた。

その後の話は、進まなかった。

「私は、ただのぞんだ。彼らの死をのぞんだ」

「……」

中野刑事が去った後、彼女は俺にそう言った。

自白のようであり、容疑を否認するようにも聞こえる。

「裏切り者は、裏切られることも考えるべき」

「それはどういう意味？」

「そう、その殺人鬼は裏切り者」

――裏切り者。

かつて、あの燃え上がる御座市で彼女が言ったこと。

「……殺人鬼の名前は、ノヴァ？」

彼女は笑う。

俺にはそれが、肯定の笑いだと分かった。
なら。

「じゃあ君は、ノヴァをどうするの？」

彼女は笑ったままだ。

今度は、肯定なのか否定なのか分からない。

「……私にノヴァは裏切れない」

彼女はハッキリと告げた。

「だって……ノヴァは私の半身なんだから」

塚本プロデュース 前編 — 昴栄治

「よりスリリングな遊びを想像する、塚本プロデュース——！」
佳織は凜として告げる。

「……………」

皆言葉もない。

「誰か、翻訳しろ……………」

慶介が呟いた。

「佳織ちゃん、突然すぎてワケわからないよ」

のぞみも苦笑い。

「ああ、お前らが理解する必要はなし。私、世界。お前らシット。
オーケー？」

「……………」

どうやら絶好調のようだ。

「というわけで三日間耐久鬼ごっこを提案します」

「帰っていいかしら」

「ちよつと待てって悠希。まだ何も説明してないだろ？」

「タイトルだけでやる気を無くしたわ」

「食わず嫌いだって。人類で初めてナマコを食べた人を見習えよ！

見た目だけだと汚物っぽいけど、食べてみると上手いんだって知
ることが出来た。そういうのがハピネス。オーケー？」

「……………分かるようなワカらないような」

「のぞみ、無理して同意しなくてもいいんだ」

フォローしようとするのぞみに告げた。

「おい、ガングロ。それじゃアタシが滅茶苦茶言ってるみたいじゃ
ん！」

「……………自覚がないの？」

日向は脱力する。

「で、佳織。ルールは？」

「おい、久——」

「いいじゃん慶介、退屈な日常に刺激を」

久は無邪気に笑う。

「ねえ、久。刺激は強すぎると劇物に認定されるのよ」

日向まで非難の視線を久に向ける。

「まあそこは佳織の匙加減次第ということだ」

「ヒッサー話分かるねえ。まかせといて、劇物通り越して毒物に認定されるから」

「ポイズン……」

日向は呟いた。

言いたいことも言えないこんな世の中だ。

「久よ、お前はこの事件の責任を取れるのか？」

「まあ、全責任は幼馴染に」

「丸投げかよ……」

しかも俺に丸投げかよ。

「……時に栄治プロ」

真剣な口調で慶介は呟く。

「何だ？ あらたまつて……」

「プロであるお前に問おう」

「……何言ってるのよアンタ」

日向が呆れ気味に問いかける。

「お題、『鬼ごっこで捕まった』——」

「！」

……なるほど。

これは……俺に対する挑戦だ。

言うなれば庄治慶介から昴栄治への挑戦状ではない。

三次元世界から二次元世界への挑戦状だ！

「どうだ？」

「指定は？」

ハードボイルドに問い返すと、慶介はニヒルに笑った。

「アール十八だ」

子供の遊びではない、か。

「……よからう、命を燃やす尽くす時が来たようだ」

「あー……嫌な予感しかない」

日向は頭を抑えていた。

そう、真つ暗な煉瓦造りの密室だった。

冷たい地面に顔をつけて、オレは横たわっていた。

身体を動かそうとして、じゅらりという金属音が響いた。

「て、手錠……？」

混乱するしかなかった。

「お目覚めのようだね」

窓から差し込む月の明かりだけを頼りに、声の主を探す。

踵の高いハイヒール。

そこから伸びる、細く、しかしながら引き締まったふくらはぎは

黒い網タイツに覆われていた。

ガーターベルトに黒の下着姿。

「えっ？」

背筋が凍った。

オレは、逃げそこなったのだ。

「どうしたの？ もう逃げないのかい」

その言葉に火がついた。

素早く立ち上がり、距離を置こうとするが。

「ぐっ」

窒息しそうな力と共に、引き戻される。

何が、起こった？

恐る恐る首元を触ってみると、革のベルトの感触がした。

「く、首輪……」

そこからリールが伸び、彼女の手まで続いている。

彼女の名前は夢子。

経理課の眼鏡をかけた目立たない女性だった。

「社会人設定なんだ……」

「まあ待て久、質問は最後にプロが受け付けてくれる。続きを聞こうじゃないか」

「……帰っていいかしら」

「ていうか、話進まねえよ」

そう、三ヶ月前から異変は始まっていた。会社から退勤する途中にその視線に気づいた。初めは気のせいだと思った。だが、家の鍵を回した瞬間に違和感の正体が気のせいではないのではないか、そう思った。回したはずなのに、玄関には鍵がかかっていた。もちろん鍵をかけ忘れた可能性もある。空き巣かもしれない。だが、俺は疑心暗鬼に陥っていた。もしかしたら、俺の周りに俺を付けているヤツがいるのかもしれない。

それが確信に変わったのはある晩、パソコンの電源をつけた時だった。届けられた一通のメールにはこう書かれていた。

——私はいつも、あなたのことを見てます。

「……ありがとう」

「べたべただね」

日向とのぞみの反論はスルーさせていただいた。

ストーカーの存在、他人の話では本当にそんな人間がいるのかと実感が沸かなかったが、現実となって初めて背筋が凍る思いがした。それは誰だ？ どこから見ている？ 気が気ではなかった。まるで試合の途中経過のように、彼女の観察記録は俺のメールに送られてきた。——今日の昼食はパスタでしたね。——トイレ長かったですね、体調が思わしくないのですか？ 発狂しそうだった。食事は喉を通らなくなった。——あの、大丈夫ですか？ 声をかけられたの

は、そんな精神状態のときだった。

「おっ、犯人登場」

「……佳織、ネタバレは止めてやれ、アイツ一瞬すごい悲しい顔をしたぞ」

そのこの名前は夢子といった。経理課の目立たない感じの女性、特別綺麗というわけではない。心配そうに俺を見つめてくれた。本当に心配そうな表情に、俺は疑うなどと微塵も思わなかった。それから度々廊下で会ったびに会釈するようになった。遠くはないが近くはない。そんな微妙な距離だったのだ。

だが、俺の心配事は消えたわけではない。ストーカーからのメールも日を追うごとにエスカレートしていった。観察記録は家の中の行動まで及んだ。そんなやつれていく俺を思ってくれてか、友人たちは俺を合コンに連れて行ってくれた。

「……なあ、久よ。これは遠まわしな俺たちへの要求なのか？」

「ははは……妄想中の栄治にそんな器用なことは出来ないよ、多分……」

「それより、そろそろ栄治の妄想が佳境だから席を移動したほうがいいわよ」

そこに来ていた銀行員のオフィスレディーと親しくなった。酒を飲みながら意気統合し、そのまま一夜を共にした。やがてそのまま俺たちは付き合うようになった。それにショックを受けたのか、それ以来メールは来なくなり、俺は安心した。だが、それが悲劇の始まりだったのだ。女性と俺は同棲するようになった。そんな幸せな日々、ある日、会社からの帰宅道で夢子さんは立っていた。逆光で表情は分らない。どうしたの、と聞こうとしてその異質さに気づいた。包丁を持っていた。しかもそれは、我が家にあったものだ。

冷や汗が落ちた。どうしましたか、と彼女は楽しそうに笑う。俺は、叫びながら走った。玄関へと駆け込み、鍵をかける。念には念を入れて、チェーンもかけた。息を整えながら心を落ち着かせていると、ふと異臭に気づいた。ふらりと、それに誘われるようにふらふらと足取りを進めた。そしてリビングへとたどり着いた時――、そこには……。

――捕まえた。

夢子さんが、後ろから耳元で囁いた。

「あああああ――つつつて、あれ？」

いつも通りのファミレスの風景だ。

「………そんな、妄想？」

というか、そう言えばそう言う流れだった。

夢子さん・イズ・フィクション。

その名の通り、俺の夢の中の存在だ。

ならば俺は一体何をしたというのだ？

妄想の赴くままに夢子さん、ああ夢子さんと叫び続け、一人身悶えていたのではないか！

その醜態をまさか……十年来友人たちの前で御披露宴してしまったということなのか！

「………」

恐る恐る周りを見渡してみる。

「………あのー」

七人が座ることの出来る席には、なぜか俺一人しかいなかった。まさか、ファミレスで仲間と集まっていたというのも俺の妄想なのか？

どこまでがフィクションで、どこからが現実なのか、その境界線はどこなのか。

「ああ！」

少し離れた席に六人は腰かけているではないか、余りにも他人行儀だったので分からなかったくらいだ。

「なんだよ、新手の放置プレイか。これはこれでドキドキするじゃないか、興奮した！」

「……どちらサマですか？」

六人はハモった。

・・・・・・。
・・・・・・。

俺は慶介の部屋の隅で小さくなっていた。

「とまあ、発情期のオスのせいでファミレスに居られなくなったけど、説明を再開すんね」

「面目ない・・・・・・」

さらに小さくなる。

「まあまあ、男ならきつと叫びたくなるくらい発情しちゃうんだよ」

「ないよ」

「ねえよ」

のぞみのフォローを久と慶介は間髪入れずに否定した。

「だったら慶介なんて毎日叫んでるでしょ？」

「おい、日向。どういう意味だ？」

「あーなるほど」

「のぞみも納得すんじゃない！」

慶介がのぞみの頭を抑えようと手を伸ばす。

「うわわっ、犯されるよぉー」

のぞみは久の後ろに隠れる。

「貴様――」

「よしよし」

久がのぞみの頭を撫でる。

「えへへ」

「ちょっと待て。俺がしようとしていたことも対して変わらなかったはずだ」

「野獣、レイプよくない」

「し・な・い――！」

「慶介、花遊びは法の範疇でね」

「なぜ俺のパーソナルは性行為・性犯罪に直結なんだ．．．．．」

「日頃の行い．．．．．」

日向が溜め息をつく。

「改めんぞ」

「改めろよ」

「低俗な会話だこと．．．．．」

悠希が溜め息をつくのもいつもの光景だ。

「んで、ルールね。ルールは慶介の部屋を出てからスタート。範囲

は針木市中央区。要は一番長い時間鬼になっていた人が負け」

「時間はどうやって計るんだ？」

「それはねえ」

佳織は鞆からストラップをつけた日記帳のようなものを出す。

「これに手帳を受け渡した時間を記入すんの。捕まえる人と捕まえられた人の二人の承認サインで鬼の交代が成立。ちなみにタッチした鬼にタッチし返すのはダメ。いたちごっこになるから」

「佳織にしては面白そうだね」

「佳織にしては、ってなんだよヒッサー」

「夜はどうするの？ それに家の中に入れば安全ってこと？」

「ふふふ、これですわ」

そう言ってまた鞆の中から出されたのは七つの南京錠。

「家の鍵はポストに入れてポストにこれかけとくの。家にいない時は別に鍵は入れとかなくて大丈夫。んで全員が南京錠の鍵を所持」

「家を襲撃されたらアウト、か．．．．．」

「せめて十二時以降はナシにしてよ。安眠できないわ」

「戦争中に安眠とは甘いことを」

「慶介一人で戦争してなさい」

「ふっ、独りファシズムだな」

よく分らないが、慶介はニヒルに笑っていた。

「慶介の思考が分からない．．．．．」

日向が額を押さえる。

「んじゃ、十二時以降部屋への襲撃は禁止ね。あとバイト中の襲撃も禁止。あとなんか決めとくことある？」

「入浴中は？」

「警察呼べ」

「…………洒落にならないよ」

「ラブコメな展開に二人の仲を祝福します」

「慶介くんだったら妊娠しちゃうよ」

「おい、のぞみ——！ いい加減俺をレイプ魔扱いするのは止めろ！ 冤罪だ」

「ダメだよのぞみ」

「久がのぞみを嗜める。」

「まだ未遂だからね？ 慶介が現れたら落ちついて110だ。そして現行犯でしょっぴけるから」

「おい——」

「まあそんな時はチエーンかけたらいつか
大体ルールは決まってるわ」

「なあ、佳織？」

「なに夢子さん？ 発情期終わった？」

「反省してるから許してくれよ…………、んでそれってやつは
罰ゲームかなんかあるの？」

「これに三日かけるからね。極上の罰ゲームを用意ちまちたー」

「でた、赤ちゃん言葉」

「久がつっこむ。」

「佳織の知能レベルを表してるわ」

「日向が馬鹿にしたように。」

「はい、日向はアソコにバイブ突っ込んで裸でメインストリート闊
歩」

「で・き・る・か——！」

「律儀に怒る辺りが日向らしいと思う。」

「ストリップクイーンも真っ青だ、さすが日向」

「遊びでも手を抜かない、さすが日向だよ」

「えっ、なんで慶介はともかく今までその方向で持っていこうとしてんの？ 常識で考えてよ！」

「さすが淫乱クイーン。人の三倍の赤いひなとりすは伊達じゃない」「クロス……、コンクリートに詰めて沈める……」

「……うわぁ、本気っぽい」
久が苦笑する。

「日向ちゃん、殺人を犯すくらいなら裸で歩くほうを選ぶべきだよ人として」

「のぞみ、その答えはおかしい……」

「……」

先程から悠希は沈黙を貫いている。

「……佳織、そろそろ話進めようか。悠希の口数がゼロだよ」

「……ああ、大奥もしかしてお怒り？」

「別に」

棒読みで一言だけ。

「アナタの低俗な会話のせいよ」

「んじゃ、罰ゲーム発表しまーす」

きつとろくなものじゃない。

全員が確信していた。

……。

「……制服と、スクール水着？」

恐る恐る尋ねる。

「……女子校潜入キット」

佳織はにやりと笑う。

「ただ女だかつまんないから、スクール水着で登校ね」

「……本気なの？」

日向が恐る恐る尋ねる。

「本気サア……！」

佳織さん、ノリノリ。

「……久くんに着せてみたい」

「そうね……」

のぞみと悠希の目が本気と書いてマジだ。

「日向に着せてみたら面白えなあ」

「慶介っ——！」

「賛成四人、他はどうだろうか？」

「反対に決まってるでしょ！」

日向が叫ぶが。

「じゃあさ、久と栄治はどう？」

「慶介が負けたら、間違いなく警察沙汰だよな」

「へっ、上等だ久。警察が怖くて無茶が出来るかよ」

それは負けるという前提じゃないだろうか。

「まあ、負けるのはイヤだけど、俺はいいかな」

「ちよつと、二人とも！」

日向が焦る。

「というわけだけど、どうするかね、空気読めないひなとりす？」

「くっ、やればいいんでしょ、やれば！ 佳織、いい加減アナタには痛い目を見てもらうわ！」

佳織を指差して日向は立ち上がった。

「……んで、時に質問だが佳織よ」

「なんだ野獣？」

「日向が負けた時には当然スクール水着でアソコにパイプ突っ込んでやるんだろ？」

慶介は日向に鈍器のようなもので殴られた。

とりあえず俺は、マニアック・羞恥プレイ、と叫んでブリッジをした。

リアクションは大切だ。

鬼ごっこ1 ― 昴栄治

三日間耐久鬼ごっこスタート。負けられない戦いの火蓋が切って落とされた。負ければ間違いなく警察沙汰だ。悪ふざけの域を超えている。

まず鬼はじゃんけんで負けた悠希だった。意外な鬼だ。最初の鬼というのは大変だろう。もしも始めに躓いてしまったら、そのままずるずると負けてしまいかもしれない。上手く誰かを見つけれなければこのまま一日誰も捕まらないということもあり得る。なんせ範囲は針木市中央区だ。あまりに広すぎる。

とりあえずゲームの趣旨を考えれば、家に籠るのは得策ではない。襲撃されれば逃げ場はないからだ。そして搜索範囲が広いために、確実に相手を捕らえられる場所は限られている。

というわけでセントラル街をふらふらと歩いていた。人が溢れている場所ならば見つけづらだろう――。

「――と思ってるそのアナタ」

「えっ？」

「タッチ」

振り返ると同時に久にタッチされた。

……馬鹿な、開始してまだ一時間もたっていないじゃないか！

「はい」

久は手帳のほかに、何やら変な機械を差し出してきた。

「……これは？」

「この三日間をスリリングに過ごすためのアイテムだよ」
画面になにやら二つの光の点が点滅している。

「悠希特製、携帯電話のGPS機能を利用したお手製レーダーだよ」

「……馬鹿な、コレを一時間で」

「とりあえず画面には光しか点滅されないんだ。それで自分のGPS情報を選ぶと自分から範囲五百メートルの七人のGPSが表示さ

れる。周りに誰もいなければ、真ん中の自分以外は表示されない。ちなみに他の人のGPSで表示しても地図まで表示されないからどこにいるか分からないようになってるんだ。まあ、誰と誰が一緒にいるか、位は分かるけどね」

「よく出来てるな、これならこのゲームに合っている」

「というわけで頑張ってるね」

手を振りながら久の姿は雑踏に紛れる。

さて、まずい事態となったわけだ。一刻も早く次の生贄を探さなければならぬ。

「五百メートルか……」

広いようで狭い。久の光点は徐々に遠ざかりフレームアウトした。手帳を開いてみると、スタートが十八時、久に代わったのが十八時五十分、そして今十九時。さて、久はどこに向かおうとしていたのだろうか？ あの男が闇雲に誰かを探すなんて手を使うとは思えない。恐らくは、誰かを狙おうとする途中に俺をたまたま発見したはずだ。さて、六人の生活スケジュールを考えてみると……。

慶介——恐らくアイツは毎日バイト。襲撃には強いが、逆に鬼になると負けてしまうパターン。

日向——バイトは週二・三日、規則正しい生活リズムから場所は特定しやすい。あと、部活中はダメって言ってなかったよな。

佳織——アイツは全く読めない。何をしているかも不明だ。

久——バイトはしていなかったが、たまにのぞみの病院の付き添いや親父さんのところに顔を見せに行っている。

のぞみ——バイトはしていない、がたまに通院している。色々な後遺症の定期健診らしい。さすがに病院に襲撃は不謹慎だな。

悠希——久よりも頻繁に親父さんのところに顔を出しているらしい。詳細は不明だ。

このゲームって、結構日向に不利なように出来ているよな……と歩いていると、画面に一つ光点が点滅する。動いていない。近づいていくと、日向のバイト先へと辿りつく。……残念なことにバイト

中のような。

……待て、今日は何曜日だ？　そして、日向のバイトの日は何曜日だった？　ディスカウントストアに入るが、日向の姿はない。

「働いているのに光が動かないのはおかしい。携帯電話を鞆に入れたままという可能性もあるが……」

バイト先だと襲撃はない。それ故に、バイト先に罠ということ。広い多層階のディスカウントストア、確か三階はフードコートになっている。

エスカレーターで三階へと向かった。そこには――。

「のぞみ……」

なんて強かな。なるほど、他の人間のバイト中にバイト先に潜伏するとはよく考えた。だが策を巡らせすぎたようだな。

「はい、タッチ」

「えっ？」

何とか一回目の鬼は無難に終わることが出来た。

記憶5 南——昴栄治

「身元引受人——？」

話は十年前に遡る。

俺とエヴァ、塚本佳織の容態は順調に回復へと向かっていた。となれば、当然これからの話にもなる。

「そんなものはいらない」

彼女は未だ、大人を頑なに拒んでいた。

「たとえ貴方が拒んでも、子供だけで生きていけるような世の中ではありません」

優しく諭すように、その大人は語りかける。

「アンタは何が目的だ？ ロリコンか？ それともシヨタか？」

エヴァは、挑発的に笑う。

「貴方がたの自立です」

南悦史——。黒い服に身を包んだ、今よりも少しだけ若い南さんだが、昔も彼の言うことは変わらない。

「だったら自由にさせるよ！」

「今はまだ不十分です」

「不十分？ 何が足りないって言うんだよ」

「住む場所は？」

「屋根のあるところなんていくらでもあるだろ」

「食事は？」

「食いつきに万引き、いくらでもやりようがある」

この頃の佳織には、道徳が欠落していたように思う。

「お金は？」

「いくらでもやりようがあるつつただろ？ 何ならその辺に歩いてるヤツを殺して——」

頬を叩く音が、小さな病室に響いた。

「……なっ」

叩かれた頬を、彼女は呆然と触れていた。

「貴方には……」

南さんは、酷く悲しそうな顔をしていた。

「貴方にはこれまでに、叱ってくれる大人はいましたか？」

「叱る？」

「本気で怒られたことはありませんか？」

「はははっ……」

渴いた笑い。

「本性現したじゃん？ 大人は……力で従わせるのが好きだからね
そうして、南さんを睨む。

俺は、そのやり取りに息を呑むばかりだった。

「貴方は先ほどからよく、『大人』と口にしますね」

「それがなんだよ」

「貴方の言う『大人』とは、一体何のことを指しているのですか？」

「お前のことだよ、児童虐待者」

「大人とは、児童虐待者のことなのですか？ 子供に手を上げない者は、すべからず大人ではないと？」

「お前のように上から物を言う偉そうなヤツのことだよ！ つまんねえ説教垂れやがって！ 子供を見下して悦に入って、何が偉いんだお前は！ お前のほうが、子供よりずっと矮小じゃねえか！」

彼女は南さんにまくし立てる。

「叩いた事については謝ります。間違ったことを叱って正すべきだったと考えたのですが、どうやら軽率だったようです。しかし私は貴方を見下した発言はしていませんよ？」

「はっ——、心の中は見えないからね。口先でお前が何言っただって信じれるかよ」

鼻で笑う。

「『大人』を見下したいのは、貴方のほうではないのですか？」

「——なんだと？」

「『大人』は最低だ。子供を『見下して』いる。何度も繰り返すのは、貴方の方こそそれに囚われているからです」

「……私達を、人間として扱わないくせに」

「——辛かったでしょうね、そんな風にしか接してもらえなかったのは」

「……大人のいいように操られるくらいなら、泥水をすすった方がましだ」

「しかし、そこに自由はありません」
ハツとした。

その単語は、彼女と共にあの地獄を抜け出したとき、彼女が叫んだ言葉。

——私たちは自由だ、と。

「——私たちは、自由だ！」

そして、同じ言葉を彼女は叫んだ。

「いいえ」

彼は首を振る。

「それはまだ、あまりにも狭い……自由とは範囲です。自分に許された選択肢の範囲。選んだ瞬間にそれは固定されていきます」

全く新しい自由の概念だと思った。

「貴方の今行おうとする選択は、それを確実に狭めてしまう。佳織

——、貴方が大人に扱われたというのなら、今度は大人を利用しないさい」

南さんは、欺瞞に溢れた綺麗な言葉をけして使おうとはしない。

今も、昔もずっと。

「私を利用して、自由を広げていけばいい。子供は、大人を利用すればいいんですよ」

時にそれは、不謹慎だとか、冷淡な印象を与えるかもしれない。

だが、彼が言うのと、なんと柔らかな言葉だろうか——。

「受け止めましょう。だからこそ大人は、子供の時よりも大きくなる。そうは思いませんか？」

気障な言い回しのクセに、鼻につかない。

「そんな大人になって、私から自立して欲しい。今の貴方を救えるような、そんな大人になって欲しい……」

ねえ、エヴァ——。

大人と言うのは、そんなに信じられないものだろうか？

君の見てきた大人たちは、狡猾で薄汚れた大人たちだったのかも
しれない。

でも、目の前にいるこの人は、そんな大人と同じだったのだろうか？

自由と言う言葉を、けして綺麗な理想論で語ろうとはしない。

同じ目線に立って、深く考えて、肯定、否定といった安易な答え
を良しとはしなかったじゃないか。

「……っ」

突然、視界がぶれた。

少女に、胸倉を強く掴まれたのだ。

「なあ……、栄治は、南さんのこと信じてんの？」

「えっ……？」

震える声で。

それは、思いもよらぬ質問だった。

彼女は、俺のことを『栄治』と呼んだ。

「佳織は、南さんのことを信じてないのか？」

だから俺も、彼女のことを『佳織』と呼んだ。

「信じたいね……信じたいに決まってる。誰が……汚いものしか
ないなんて信じたいかよ」

だったら、と続く言葉を思わず飲み込んだ。佳織は自虐的に笑っ
ていた。

「感情だけで人を信じれるほど、無邪気じゃなくなっただろ？」

「南さんが、俺たちを裏切るとは思えない。だったら、どうしてあ

の人は俺たちを引き取ろうとしてるんだよ。親の記憶なんて俺には分からないけどさ、きっと父親ってあんな感じなんだろうなって俺思ったよ」

「私も同じだよ。家族よりもずっと家族らしく接してくれるって……あの人を信じたいよ」

彼女は泣きそうな顔だった。

こんなに弱い佳織は見たことがなかった。

「人を好きになるのに理由は要らなくても、人を信じるには理由が要るってコト。誰だって、裏切られるのはキツいからね」

「理由が、好きだからってことじゃダメなのかよ？」

「ダメダメだね」

困ったように苦笑する。

「どうして？」

「栄治は、人のことが好きだって誰かに完璧に証明できる？」

「それは、証明することなど出来ません——」

問いに答えたのは、南さんだった。

「手を、離してあげませんか？」

「……あ」

佳織は、南さんの顔を見据えていた。

そのまま、胸倉を掴む力は抜けた。

「……でも、もう裏切られるのは沢山だ」

力なく、彼女は呟く。

「努力しよう」

南さんは、そんな簡単な答えを言った。

「努力？」

佳織が問い返す。

「あなたが私を少しでも信じてくれるよう、あなたたちと日常を積み重ねていきたい。たとえ、それがあなたの信用を勝ち取れなかったとしても、私はそれで構わない。私はあなたに信じることを強要しません」

「……なんだよ、それ」

表情が、理解できない、と言っていた。

「見返りを求めないという、欺瞞だらけの虚偽に満ちた愛情でも、人と傷を舐めあうには十分です」

神父は罰当たりな説教をする。

「手を、繋いでくれるだけでいい——」
「あつ——」

——手を繋ごう、輪を描こう。

——絆を繋ごう、和を描こう。

彼女は知っていた。

その言葉を、知っていた——。

エヴァ 5 ―幕間―

観察される、というのは非常に恐ろしい行為だ。
思考というのは、時にナイフや銃よりも有能な武器である。
但し、攻撃するのは物体ではなく概念。
身体ではなく心を壊す爆弾となる。

――エヴァとノヴァの話しよう。

「下らない――」

エヴァは塚本を睨む。

答えは決まっている。

「お前は、どちらも手に入れることは出来ない」

大人の言いなりだったはずの人形はそう告げる。

「エヴァ……」

ノヴァの声は震えている。

「貴様ら、な、何を言っている！」

廣田が血相を変えて怒鳴り散らした。

「こ、この役立たずのポンコツ共が！ 素直に頷くんだよ！」

「……」

「貴様らが頷かないとっ！」

「――黙れ」

部屋の温度が下がった気がした。

口を開けて、廣田は止まる。

恫喝も、憤怒もない冷淡な口調で告げる。

機械的なそれは、何よりも恐ろしい。

そこには、躊躇も情状酌量もないからだ。

彼の期待を逸脱してしまえば、どうなるか。

決まっている、小指の主たちと同じ道を歩むことになる。

廣田は震えるしかなかった。

逆らうな、この人間には逆らうな、とうわ言のように何度も呟き、自らに言い聞かせる。

だがそんな廣田も、すでに塚本の目には入っていなかった。

「期限は、十日だ」

淡々と告げる。

「十日後に、二人とも殺す。以上だ」

「待つて——」

声を発したのは、エヴァの後ろで震えていたノヴァだった。

「どうして……殺すの？」

ノヴァは信じようとしなかった。

唯一の味方だった大人、足長おじさん。

二人に数々のことを教えてくれた穏やかな笑顔。

「そんなの……ウソだよね？」

思い出に縋る。

「ふっ……」

塚本泰三は一息ついて、そして穏やかに笑って見せた。

彼女の思い出のままの表情。

「あっ……」

ノヴァはそれだけで、安堵の表情を洩らす。

だが——。

「何なら、君でもいい」

「えっ？」

「必死に問題を解いて、君が縋りついているそれを切り捨てればいい。君の代わりにエヴァが死ねば、君は助かる」

「貴様——！」

「どうした？ 叫ばなくとも聞こえているぞ」

穏やかな笑みは瞬時に崩れる。

唇は歪に吊り上る。

「殺してやる——っ」

エヴァが感情的になったのは、これが初めてだったかもしれない。荒ぶる獣のように、怒りのままに塚本泰三を睨んだ。

「ならば考える。その子を守る方法を考える」

彼は、踵を返す。

「常に考え続ける」

そして、塚本泰三は去った。

後を追うように、研究者たちも退散していく。

残されたのは二人の少女と、ファウラウェイ・プロジェクトの内容が書かれた資料だけだった。

「……」

エヴァの服を掴む手が震えていた。

ノヴァは、声を殺して泣いていた。

真っ白な壁に囲まれた、何もない二人の世界。

「ノヴァ……」

エヴァは震えるノヴァを抱きしめる。

「心配要らない」

「エヴァ……」

ノヴァは縋りつくばかり。

あまりにも幼く、そして弱い。

「ノヴァの味方は私。私がなんとかする」

守らなくちゃいけない、そう思った。

矮小な世界を、大人たちから守らなければいけない。

エヴァとノヴァ——、互いが互いの半身、二人で一人。

世界はまだ、蜜月の中にある——。

ところで、人を守るものとは何か。

人を守るというのはどのような行為か。

力も手段も、その時々によって異なる。

相手を思うことが何よりも強い力になることもあれば。

——何の役にも立たないことだってある。

「……何をしているんだ貴様は。とっとと答えるんだ！ 貴様には分かってるんだろ。狂人の言うことが理解できるって言うんだろうがっ！」

口の端にたまった唾の泡が不快だと思った。

期限は十日。

そう告げられてから、毎日のようにエヴァは大人たちから折檻を受けていた。

「このクソ餓鬼があ！ ……なんだ、その反抗的な目は」

廣田は必死だった。

塚本泰三の役に立たなければならぬ。無能だと判断されれば、自らも小指の主と同じ道を辿ることになる。

——なぜなら、塚本を内部告発したのは廣田自身に他ならないからだ。

廣田健三、一流大学を卒業し、能力はそこそこ。

ただ学歴と肩書きを持つ彼は、自分が特別な人間だと信じて疑わなかった。

非凡なのは、歪んだプライドだけだった。

大した根拠でもない自信。自らよりも低脳な者を見下し、小さな世界で神さまを気取った。

寛正樹の下の研究員の一員としてファウラウェイ・プロジェクトに参加する。

寛正樹の研究が成功すれば、人は脳情報を移し変え続け、永遠に行き続けることができる。

廣田は昂ぶっていた。

それは神の所業。

やはり自らは選ばれた優秀な人間に他ならないのだということ。だが、寛正樹の失踪後、塚本泰三の判断はファウラウェイプロジ

エクトの凍結だった。

その決定を聞いた時、廣田は突然闇に落とされたような絶望感を味わった。

順調に見えた研究は、算の不在という理由だけで断念させられる。評価されていたのは算一人であつたという事実が、廣田のプライドを深く傷付けた。

――ふざけるな。

――ふざけるな、ふざけるな、ふざけるな。

――ここまで研究を続けてきたのは誰だと思っている！

彼は決定を崩すために、塚本泰三を排除する手段を考えた。

塚本泰三は決してクリーンな方法で成り上がってきた訳ではない。塚本のグループの急成長の裏側には、法を逸脱したグレーゾーンの行為と、組織内部と彼との軋轢もあつた。

内部の軋轢、それは副社長である長兄と研究室室長である次兄との不和であつた。

副社長は、塚本一族の当主だった。

塚本泰三の長兄に当たる人物。

弟が陣頭を取りグループを発展させてきたのを快く思っていなかった人間である。

内部告発を成功させるには、社長への反対勢力の力を得て、群れを作る必要があつた。

原子力発電所の研究の結果を独占しようとしていた次兄とも利が一致した。

そうして顧問弁護士を抱え込み、塚本泰三を告発するに至る。

――だが結局は、長兄と次兄は、塚本泰三に遠く及ばなかった。

塚本泰三のいなくなった瞬間に、塚本グループの利益は大幅に低下を始める。利益を大幅に伸ばすことのみを考えて、人件費の削減、その他コストの低下に見向きもしないその姿勢は、すぐに企業全体に蔓延することになる。伸ばすことに人は躍起になれるが、コッコ

ツとした削減政策には消極的である。人は楽な方向にはすぐに流れていくことを彼らは理解していなかった。

塚本泰三はたしかに事業拡大において会社を飛躍的に成長をさせた。だが、彼の本当に凄いところは統制能力である。部下を牽制した徹底的なコストダウン。命令と叱責を繰り返すことで、社員の意識下にそれらの概念を刷り込んできた。常に頭を使わせて怠惰であることを許さない。

その枷を外してしまった塚本グループはたった数年で赤字を出すまでに営業不振に陥った。株価も下がり、春賀建設取締役、春賀晃による株式の買占めが行われた。そうして筆頭株主権限による取締役の首切り、唐風組による肅清の首切り、二重の意味の首切り。

文字通り、首を切られた。塚本泰三は、実の兄たちを殺したのだ。そこに復讐心はない。恐怖を植えつける為のパフォーマンスだった。塚本泰三はルールすら捻じ曲げる、逆らうことは許されない。そう思わせることで、塚本泰三の帰還は、部下たちに更なる恐怖と従順さを植えつけた。

「貴様らが塚本に反抗するから俺はあ！」

唇が切れて鉄の味が口内に広がる。

だが、廣田の暴力でエヴァの心を折ることは出来なかった。

——殺してみろ。

「なんだ、その目はと……聞いているだろうがあ！」

挑発的な目が、彼を見据える。

「ぐぐぐ……」

そうして再び鈍い音が室内に木霊する。エヴァは意識を失うまで殴られ続けた。彼女はいつも、意識を失うまで笑い続ける。無力な彼を嘲笑し続ける。

そして、塚本泰三——。私を殺せば、彼は優秀な人材を失い、何の得にもならない。ノヴァを殺せば、やはり私を失い、彼に得はない。結果彼は、私を生かすしかない。今までは人を恐怖で縛り付け

ていたようだが、この取引は始めから私の勝ちが決まっている。十日耐え切れば、彼は私たちを殺すと言った。だが十日後、彼は私たちを生かすしかなくなる。算正樹に匹敵する知識を持つのは、たった二人だけだからだ。

エヴァとノヴァ――。

彼が得をする為には、この無能な研究者たちの首を切り、私たちを優遇するより他ない。

あなたは――無駄が嫌いだろう？

だからあなたは、考えろ、と言ったのだろうか？

エヴァは、勝利を確信していた、一縷の不安だけを残して――。
世界はまだ、蜜月の中にある――。

「まるで自分が人を守っているような、自己犠牲と自己陶醉、滑稽だとは思わないか？」

「ああああ……」

「君たちは傷に慣れている。だが、それは身体的なものだ。だから、心が弱い」

ノヴァが壊れていくことを、彼女はまだ知らない。

事件2 ― 昴栄治

「・・・・・・・・」

耐久鬼ごっこは一日目を終えて二日目を迎えた。全員が登校する学校は正しく戦場だった。入れ替わり立ち変わる鬼。休み時間を鬼のまま終えてしまうと次の五十分は確実に鬼だ。それを考えてかは知らないが、悠希は病欠と見事にサボタージユ。のぞみはそうかその手が、と真剣に頷いていた。

放課後。

激戦地区の学校をダッシュで離脱して、息を切らせながら帰路を辿る。途中に偶然あった同級生たちは去った後にコソコソと何か話している。

「なあ、昴くんなんであんなに息切らしてたんだろ？」

「馬鹿、お前、決まってるだろ？ 昴くんのことだ、何かの抗争に巻き込まれてんだって。マジ昴くんホンモノだわ」

……いえ、俺堅気なんですが。

相変わらず昴栄治のイメージは暴力団と関わりを持つハードボイルドのようだ。曰く、この街の暴力団、唐風組の幹部の顔と名前が全て分かったか。いやいや、声優とクリエーターの名前なら大体言えるんですが……。

「ん？」

思考を止めて顔を上げると、人だかりが出来て騒々しい一角があった。

「なんだろう・・・・・・・・？」

あそこに何かあるのだろうか、と記憶を探ってみる。

だが、思い立って何かがあるような場所ではないはずだった。

古いビルの一 corner。

「いやだわ・・・・・・・・焼かれたんだって」

「辛い巻き込まれた人はいないみたい・・・・・・・・」

近づくと、会話の内容も、黒ずんだビルの壁もよく分かった。

「・・・・・・・・村田不動産」

ビルを見上げる。

地上五階建てくらい、この辺りでは低いほうだ。

「・・・・・・・・」

佳織が野次馬に混ざっていた。

「佳織？」

「・・・・・・・・」

警察の引いたテープを超えようとして、彼女は警察に抑えられた。

「お、おい——」

慌てて佳織の元へ向かう。

「どうしたんだよ」

追いついて肩に手を乗せる。

気がつくと、焼け跡が良く見える位置に立っていた。

「焼け跡？」

焼け跡、放火されたのか？

首を傾げる。

「離れなさい、事件現場ということは分かっているだろ」

制服を着た警官に厳重に注意を受ける。

その後方。

ちようど焼け跡の真ん中ほどに浮かび上がるラインテープで描かれた人の形。

「焼身——？」

「・・・・・・・・」

佳織は無言で焼け跡の、白くくり抜かれた人型を睨んでいた。

「栄治くん？」

「中野刑事——」

テープの内側より近づいてきたのは中野刑事だった。

「どうしたんだね？ こんなところで」

「ああ、いや、たまたま通りかかって・・・・・・・・」

「うーん、野次馬とは関心せんね。貴重な青春時代だ、もっと有益なことに時間を・・・・・・・・」

「焼身？」

佳織が遮るように口を開く。

「ん——、君は確か塚本研究所の・・・・・・・・」

「塚本佳織です。事件の際は俺と一緒に世話になった・・・・・・・・」

「ああ、あの女の子か。大きくなったもんだ」

中野は豪快に笑ってみせるが、それを再び遮るように。

「ねえ、焼身なの？」

佳織は真剣な口調で問いたです。

「・・・・・・・・どうして事件のことを知りたいんだね？」

「・・・・・・・・」

佳織は無言のままだった。

「殺人だったらかなりの怨恨ですよ。火をつけて殺すなんて」

「栄治くん、こんなことに興味を持つなんて健全とはいえない」

「あつ、すみません・・・・・・・・」

「いいさ、それよりもこんなところにおいても時間の無駄だろう。さつきも言ったように時間は貴重だ。もっと有益なことに使いなさい。あると思っただけでも、時間は急に奪われるかもしれない」

中野が言つと、それは説得力があった。

彼自身、家族と共に過ごすはずだった貴重な時間をブラックマンデーを巡る一連の事件に忙殺されてふいにしてしまったからだ。

「そうですね」

「・・・・・・・・」

だが、佳織は口を閉ざしたままだった。

「佳織、どうした？ いい加減移動しないか？」

「そうだな・・・・・・・・」

ぽつり、とそれだけ呟いた。

そうして事件現場を離れる。

「それにしても、びっくりするよな。街中で人が焼かれるなんてさ……燃えたまま殺されるなんてきついよな」

「……発見されたときには、ただの燃える死体だったってさ」

「死体遺棄？」

「……さあね」

興味なさそうに。

血に染まる夕暮れ——、人を燃やす炎のような夕暮れ。それはいつも見ている空なのに、あまりにも禍々しく映る。嫌な気分になり、顔をしかめた。

「栄治……空には何もねえよ」

佳織は、そんなことを呟く。

「どれもこれも、人以外のものはただそこにあるだけ。それを美しいだとか禍々しいだとか決め付けてんのは人間なんだよ。だから本当は、美しいも醜いもない」

珍しく、哲学的なことを言う。

「だから、人が燃えるのも人が死ぬのも、現象としてただそこにあるだけ。それを私たちが、残酷だとか狂ってるだとか、そう思う。」

私たちの意識の根底に刷り込まれた道徳とか、倫理観っていう価値観が、私たちにそう思わせる」

「つまり？」

「えーじは健全ってコト」

そう言って佳織は笑った。橙色に染められたその笑顔は、どこか儚い印象を植え付ける。

「じゃあ……」

だから、俺は尋ねたのかもしれない。

「佳織は……健全か？」

「……多分、そうなんじゃない？」

ひとつこのように彼女は答えた。

「ん？」

ポケットで携帯電話が振動する。

開いてみると、メールが一件。

「……慶介からだ」

「あつ？ 野獣なんて？」

「ファミレスで待つって。ちなみに今鬼は久らしいよ」

「畏かもしんねえだろ？ 第一、一箇所に止まったら鬼に丸分かりだろ、あの機械で」

なるほど、そういう使い方も出来る。

「まあ暇だし、それはそれで退屈しのぎになるんじゃない？」

「お前余裕だねえ……、私は昨日の十二時から朝の七時まで鬼だったから結構ヤバイんだけどなあ」

「やっぱり朝練の日向を狙ったの？」

「律儀な日向で助かったよ。是非これからも『正直者が馬鹿を見る高辻日向』でいて欲しいね」

「酷い発言だなあ……」

そんなことを言いながらファミレスへ。

ファミレスにつくと同時に。

「待て、入るんじゃない。鬼に狙い撃ちにされる」

ファミレスの前で佇む慶介に声をかけられた。

「お前こんなところで待ってたの？」

「いや、一箇所にいたらファミレスを狙われる可能性が高いから十分ほどあたりで時間を潰していた」

「大変だねえ」

「佳織、お前なぜ他人事だ？ お前の発案したゲームだろうが。しかもまだ最下位は貴様だぞ」

「まじで？」

「ああ、授業中暇だから全員の鬼の時間の計算をしていた。かく言う俺も中々にやばい。意外に久もやばい。栄治よ、貴様はうまいことやっているようだな」

「まあなあ……」

長時間鬼になったのは授業のひとコマ分だけだった。今のところ

結構運がいい。

連れだつて歩きながら話す。

「んで、今のところ順位みたいなのってどうなってるの？」

「罰ゲームから遠い順でいくと、一位はダントツで悠希だ。手段を選ばんし、余りにも狡猾だ。二位はのぞみ、アイツは学年が違ふところもあり狙われにくいからな」

「確かにあの二人は手段を選ばなさそうだからな。ゲームを楽しむより勝ちを狙ってるよな」

「三位は大きく開いて貴様だ栄治。のらりくらりとやっている方が逆にいいのかもしれん。ここからは接戦で、四位に俺、五位に久、六位に日向、そして佳織が最下位というのが六時限目までの結果だ。よって、放課後は真つ先に久と日向を狙った。勝つためには落ちそうなやつを徹底的に突き放さなければならん」

「なんで佳織を狙わなかったの？」

「放課後お前突然いなくなっただろ」

慶介は佳織に尋ねる。

「……そだっけ？」

「なぜ忘れている」

ふざけ合っているように聞こえるが、俺には佳織が何かを隠しているような気がした。

「そついえば慶介……さつき凄いの見てさ」

「なんだ栄治？ メイド服を着た集団がビラ配りでもしてたのか？」

「それは……さつきのよりも凄い光景だ。聖地じゃないか！」

聖地とはすなわち、首都圏の一都市を指す。

「おいおい……」

佳織は呆れていた。

先ほどの出来事を慶介に話してみると。

——被害者は不動産会社の社長。

——経営が苦しくなり、それを苦に自殺との見解。

——だが、なぜ焼身自殺を選んだのかは不明。

——他殺の可能性も考慮。

「だ、そうだ」

慶介はすらすらと事件の詳細を話し始める。

「殺人の可能性もある、ってこと？」

尋ねる。

「動機も遺書もある。可能性は薄いんだろう」

「ないと言い切れないわけだ」

「まあな」

「……さっき起こったことなのに、どこでそんな情報を？」

「まあ、知り合いに仲介屋っていう怪しい仕事をしているヤツがいる。さつきまでそのお怪しいオッサンと会ってた」

「……変な方面との交流は控えるよ？」

「うむ、俺も常々そう思っているのだが、オッサンが俺にゾッコンだ」

「後ろの処女は守れよ」

一応忠告しておいた。

「にしても、異常だよな」

「確かにな……」

慶介が同意する。

「自殺だとするとさ、苦しみから逃れるために自殺するのに、どうしてわざわざ苦しい方法を選んだんだろうな？」

「だから殺人、だと？」

慶介が問う。

「目立ちたかった、とか」

猟奇犯罪の線で考えてみる。

「栄治、その言い方だと少年犯罪みたいだ」

言ってから慶介は自分で首を傾げて――。

「いや、大人だって浅はかな人間だらけか……」

言い直す。何か考えることでもあったのだろうか。

「結局は、ここで議論していても真相は分からないってことだ」

慶介はそう言ってコンビニに立ち寄ろうとする。

「どうしたんだ？」

「ダブリュー・シー、世界王者決定戦に行ってくる」

「？」

「トイレのことだ」

「意味が分からん」

溜め息を付く。

「ダブリュー・シーだからな。タイトルマッチじゃないか」

「……………よくもまあ思いつくな」

そのまま会話が途切れる。

やけに静かだった。

それにしても、焼身自殺の可能性もある、か。

数分ほどで慶介は戻ってきた。

「なあ、慶介」

「何だ？」

「もしさ、殺人だとしたら生きたまま燃やしたってことだよな」

「……………そうだな」

想像するだけで沈鬱な情景だ。

「わざわざ苦しい方法を選ぶなんて、相当恨み辛みが溜まってたんだろうな」

慶介が言葉を付け加える。

「そこなんだよ」

俺は言葉を強調した。

「そこ？」

「遺書があったなら、自殺とは別に燃やした人間がいるってことは？」

「死体遺棄ってことか？ でも警察の見解は焼身自殺らしいぞ？」

まあ、と加えて。

「——焼身自殺、とは言ってなかったがな」

「言ってなかった？」

「警察が公式発表で自殺、死体は焼失していた、と発表するそうだが、そうしたら、メディアの多くは『焼身自殺』と報道する。聞いた奴らも焼身自殺、と思うだろうな」

「自殺ならさ、死体遺棄をする理由が分からない」
口を挟む。

「ああ、そうだな。それこそわけがわからん。恐らく焼身自殺で間違いはないだろう」

そうして沈黙。どうにも会話に歯切れの悪さを感じていた。

「・・・・・・・・」

「何か訝えんな」

慶介が漏らす。

「そだな」

同調する。

「ああ、そつか・・・・・・・・」

「どうした栄治？」

「やけに静かだと思ってたら……」

そう言っただけで慶介に視線で促した。

「ああ・・・・・・・・」

納得したように。

「佳織、今日は静かだ」

佳織はずっと地面を睨むように歩いていた。

就寝 ― 昴栄治

こうして、今日も一日が終わる。

電気を消して寝転がり、今日一日のことを思い返してみる。

学校は戦場のようなだった。逃げるために休み時間と同時に教室を飛び出して、廊下では本気ダッシュで学園中の視線を浴びていた気がする。なんとか安全圏にいるようだけど、まだまだ油断は出来ない。

そして放課後。慶介曰く、焼身自殺――。そして、佳織の姿がおかしかった。以前にもこういうことがあった。あれは針木セントラル街外れの公園での自殺事件。佳織の姿があった。いけないとは思いながらも邪推してしまう。

佳織は、あの事件に何か関係しているのだろうか。

だが、考えても分かることなどなかった。

こんな時、記憶を失ってしまったことを恨めしく思う。

俺は、佳織のことを何一つ知らない。

どうして、記憶は失われてしまったのだろうか――。

俺はあの白い部屋で、何をしていたのだろうか――。

あの建物は、一体なんだったのか――。

そして、不可思議な連続自殺。

ぐるぐるとキーワードが頭の中を巡り、混乱しそうになる。

「――通院、せんのかね？」

ふと、中野刑事の言葉が頭をよぎった。それもいいのかもしいい。

この頭の中に眠る記憶を呼び覚ましてしまえば――。

そうして、睡魔に襲われる。

意識は、闇に落ちた……。

記憶6 教会 ― 昴栄治

教会には三人の子供がいた。

こちらを見て怪訝な顔をする少年。目はくすみ、頬はこけてギラギラとしていた。今も庄治慶介は鋭利な印象を受けるが、当時を知っている俺たちにとって、今の慶介は全然丸いと思う。

こちらを一瞥した後、ずっと本を読んでいる少女。腰まで伸びた黒い髪。漆黒の瞳。まるで人形のような芸術品としての美しさをもし出す少女。慶介に対して沙耶悠希はあの頃から変わらない。厭世的で積極的に他者と交わることもない、孤高な存在だった。

そして、こちらを一瞥もせずに、床に座り込んでずっとキヤストパズルと呼ばれる知恵の輪をいじる少年。「の」の字型が三つ組み合い不思議な螺旋を描き出すパズルを解いていた。『その時』の沙耶久は、現在の久とは大きく異なる。

「おい、久――、新入りだぞ。興味ないってか？」

慶介はヘラヘラと笑いながら久に尋ねる。

「……静かに。もう少してエニグマが解けそうなんだからさあ
カチカチと久の鳴らす金属音だけが部屋の中に響く。

「悠希はどうなんだ？」

「……」

「チツ、無視かよ」

舌打ちする慶介を、呆然と俺は見ていた。酷く攻撃的な視線。佳織の嫌う大人たちよりもずっと怖ろしい存在に思えた。

「ここには三人だけ？」

エヴァは荒々しい慶介に怯えもせずに尋ねた。

「ああ、そうだ。お前らを含めて五人だ」

「……ここは、居心地がいいな」

そんなことを言った。

「……エヴァ」

俺はその名前で彼女を呼ぼうとして――。

「もう、その名前は止めよう」

彼女に遮られる。

「塚本佳織、昴栄治。私たちはもう、モルモットじゃない」

「物騒な言葉を言いやがる」

言いながらも、けしてその言葉の意味を問おうとはしなかった。

「気に、ならないの？」

俺は思わず尋ねた。

「そんなにオドオドすんじゃないよ。別にとって喰ったりはしねえよ」

詰まらなそうに溜息をつきながら。

「聞いてどうなる話でもねえだろ。……そんなもん、人に話すことじゃねえ。むしろ俺なら興味半分で過去を決るようなヤツは殺したくなる」

物騒なことを言っていた。

「……人数も増えたし、せっかくだからルールを決めよう」

パズルをいじりながら、久はそんなことを言った。

「あつ、解けた」

その言葉に、本を読んでいた悠希が顔を上げる。

「それより難易度の高いものはないわよ」

「残念だな……」

「おい、久。続きを言え、続きを」

「そうだった、そうだった。改めまして、初めまして。沙耶久です」
楽しそうに唇を歪める。慶介とは違う、異質な恐ろしさ。

「初めまして、だよね？ 塚本佳織さん？」

「……そうだな」

佳織は、ぽつりとそう呟いた。

久の印象は、突然異なったものになる時がある。それを見る機会
は年を追うことにまるつきりなくなっていたわけだが、初めて会ったと
きの久は、その異なるものだった。

「そう、ルールは至って簡単。互いに何があったか、何か秘密にはしていないか、そんなことはけして尋ねてはいけない。仲間面して心配してますって顔で尋ねるなら、そいつは排除する」

「排除って？」

佳織は尋ねる。

「精神的に、追い詰める」

そう言っただけで笑ううちに、戦慄を覚えた。本当に楽しそうに、唇を醜く釣り上げて、目を細めているのに瞳孔が開いていた。

「ビビんなよ」

慶介も楽しそうにへらへらと笑う。

「要はつまんねえ干渉さえしなければ、俺たちはおトモダチってことだ」

「……」

悠希は、相変わらず我関せずと言わんばかりに本に目を落としている。

「ねえ……何を読んでいるの？」

悠希は顔を上げる。

「私？」

「うん」

「別に……ただの脳医学の本よ」

「ただの、じゃねえだろ。ただのじゃ」

慶介は呆れたように溜息をつく。

こうして、暗黙の了解は生まれた――。

エヴァ 6 — 幕間

「ノヴァ……大丈夫だから、私は貴方を守ることが出来る。だから大丈夫。ノヴァが怯える事はないの。すぐに終わる。十日後に全てが――」

「エヴァ……、エヴァ……」

ノヴァは、エヴァの名前を拙く呼び続ける。
それはまるで……何かを懺悔するようでもあった。

——蜜月の刻は、終わりを迎えた。

「さて、期限の十日を迎えたわけではあるが……」
塚本泰三はそう前置きをする。

「随分と、酷い目にあったようだな」

そう言つて塚本泰三は廣田の方を見る。

「お前は頭が悪い。彼女たちが商品であるという前提を忘れているのだからな」

「えっ……」

廣田の額に冷や汗が浮かぶ。

エヴァの顔は晴れ上がっており、ノースリーブのワンピースから覗く素肌には、痛々しい痣が何箇所も見られた。

「まあ、必死に有能さをアピールしようとしたことだけは評価してやろう」

「あっ……」

それだけ廣田は嬉しそうな笑みを浮かべる。プライドの高かった男が、まるで御主人に尻尾を振る従順な犬のように。

「さて、対して私に反抗的なエヴァよ――」

エヴァは無言で睨む。塚本泰三にこれ以上ない憎悪を込めて。
「宿題は解けたか？」

「……」

エヴァは答えない。

「それは肯定の沈黙か？」

「……クソ野郎」

唾を吐きつける。

「き、貴様——！　なんだその態度は！　モ、モルモットのくせに！」

廣田の顔が真っ赤に染まる。

滑稽だった、同時に、ざまあみろ、とエヴァは思った。

「なるほど、なるほど、思ったとおり有能だ。お前なりに私を分析したということだ」

芝居がかった動きで、彼は両手を広げる。

「私に君たちは殺せない。私は感情ではなく損得を第一に考える。

君たち、いや、エヴァという才能を私は高く評価している。ここにいる無能な大人たちの誰よりも評価している。ならば私は君を殺さない。君を殺すことは大きな損失であるからだ。ならばノヴァは？

君がここで拒否すれば、私はノヴァも殺せない。ノヴァを殺してしまえば、最悪君もその命を自ら絶つ可能性がある。同じく、私にとって大きな損失となる。私にとって大きなプラスとは何か？　それは君たち二人の才能を私の為に十二分に活かすことだ。ならば、この状況で私は君たちを優遇しなければならぬ。モルモットとして扱うことを止め、人間として君たちをここに居る大人たち以上に優遇することだ」

雄弁に語る。エヴァの思考を読み違えることなく。

「ならば、不思議には思わなかったかね？　それに私が気づかないということはあるか、という可能性だ。君たちに「心」を教えた私が——」

エヴァは、ここに来て初めて唾を飲み込む。

塚本泰三の言うことは当たっている。エヴァはずっと考えていた。塚本泰三が気づかないという前提ならば、仮定は成り立つ。しかし、

塚本泰三が気づかない、ということが果たしてあり得るのか。エヴァは、彼の思考を図りかねていた。

「ところでエヴァ。どうだ、人間になった気分は？」

「……」

そんなことを尋ねてくる。

一体、何が目的で――？

「愛おしい、嬉しい、憎い、悲しい――、心が感情で埋め立てられていく気分はどうだ？」

「何、を……？」

「しかし、それではまだ足りない」

塚本は手を上げる。廣田がはっ、となり、その手に書類を手渡した。

「これが最後だ」

その書類をエヴァへと向ける。

「期限は十日だった。では、宿題を解いてもらおうか」

「だから――」

そう叫ぼうとして、エヴァの横から手が伸びる。

「えっ――？」

ノヴァが書類を手にして、一心不乱にその紙に数式を書き始める。

「ノ、ヴァ……？」

カリカリ、カリカリ、と。

書き綴る音だけが部屋を支配する。

呆然とエヴァは目の前の光景を眺めるばかり。

現実の光景に、理解が追いつかない。

「何……してるの……？」

塚本泰三の肩が、小刻みに震え始める。

「滑稽だ……お前は、実に滑稽だ……」

「止める！ 何してるの！」

「うるさいっ――！」

ノヴァの手を止めようとして、逆にその手を払われる。

「半身？ 同じ？ なぜその少女を疑わなかった？ なぜその少女が自分と同じように、お前を裏切らないなどと信じた？」

「ノヴァ……お願いだから……」

「助けてくれない……、誰も、助けてくれない……」

うわ言のように、ノヴァは口にする。

「そう、その少女は不完全なお前よりも遥かに人間らしい！ 自分以外の全てを疑った。お前の守るという言葉を疑った。私の助けるという言葉を疑った。疑い、天秤にかけた結果、彼女の損得の天秤は私へと傾いた」

「嘘だ、嘘だ、嘘だ……」

耳を塞いでエヴァは蹲る。

「だから……助かるしかない……」

ノヴァの言葉は、それでも聞こえてくる。

「始めから私は、ノヴァを選択したのだよ——。優秀さとは、知能だけではない。加えてどれだけ私にとって扱いやすいか、というのも指標となる。お前は、不合格だ」

「ああ……」

呻く。

「出来た——！」

ノヴァは両手で紙を掲げる。

「おじさん出来た！ おじさんの期待通りにノヴァは出来たよ！

ノヴァは、エヴァよりも優秀だったよ！」

「あつ……」

蹲りながら、エヴァは目を見開く。ポタポタと頬を伝い、何かが流れ落ちていく。

ノヴァ——大切だった私の半身。

私も辛いけど、それは貴方も同じ。だから、私は耐えられた。

貴方も辛いけど、それは私も同じ。だから、貴方は耐えられ、た？

だから私は貴方の半身、貴方は私の、半身？

手を繋ごう、輪を描こう——。

手を繋ごう、輪を描こう――。

輪は、崩れていく――。

音を立てて、重ねてきた価値観が崩れていく。メッキが剥げる様にボロボロと剥がれ落ちていく。涙に混じり、脳の中から大切だと思っていた何かがどんどん流れ落ちていく。

削げ落ちて、無価値になった――。

「廣田、そこにいるモルモットを、明日の取引に使う。体の状態をスキャンし、その脳は培養液に保管しておけ。脳だけになっても、まだまだ実験の使い道はある」

「わ、分かりました――！」

エヴァは廣田に腕を掴まれて、乱暴に部屋から引きずり出されていく。

感情の切れた人形のように、されるがままに、エヴァは引きずられていく。

――人間になった気分はどうだ？

何度も木霊して、頭の中で弾ける。

――人間になった気分はどうだ？

その答えは、本当に、酷い、気分です……。

その光景を、塚本泰三は楽しそうに見つめていた。

「おじさん、おじさん！ ノヴァはこれでもう、痛い思いをしなくていいんだよね！」

「そうだ、よく頑張ったな」

そして、頭を撫でられて嬉しそうにするノヴァだけが、残された――。

鬼ごっこ2 ― 昴栄治

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・撒いた？」

「・・・・・・・・撒いたっばい？」

しばらく耳を澄ませるが、近づいてくる足音はない。

「ふいー」

「だー」

どちらともなく大きく息を吐き、床に座り込む。

埃っぽい部屋に弛緩した空気が流れる。

「疲れた・・・・・・・・まさかチーム戦になるとは・・・・・・・・」

耐久鬼ごっこ三日目、俺、悠希、のぞみの上位三人の負けはなくなった。

三日目は別に必死になる必要もない、と思っていたのも束の間、事態は佳織の一言によって急変する。

「えっ、何言ってるの？ 罰ゲームは二人だよ？」

「……」

メモ帳の最後にルール一覧が書かれていた。

――三日間でもっとも鬼の時間が長かった者、三日目午前七時から午後五時までで最も鬼の時間が長かった者二名が罰ゲームとなる。

「……なあ、後付ルールじゃないよな？」

「確かめてみるか？ 多分悠希は気づいてたんじゃないか？」

悠希は体調を理由に保健室にいたり、今日一日の足取りは中々掴めなかった。

途中からゲームはエキサイトし、授業中の慶介の襲撃を境に授業は放棄する羽目になった。絶対後で南さんに怒られるだろうな。

しかし律儀に誰も学校から帰らないのは、全員がゲームを楽しもうとしているからだろう。誰か一人でも白けた顔を見せたら興ざめになる。

というわけで昴栄治は今、体育倉庫の跳び箱の中にいます。ちなみ塚本佳織さんはなんか応援団旗みたいなものに包まっています。うーん、確かにアレは分かり辛いけど……誇り臭そうだな。

「――誰か来た」

ドアを引く音。授業中に体育倉庫に来ると言ったら、体育の教師が俺たち七人以外にはあり得ない。

さて、ここでなぜチーム戦になったかを説明しよう。鬼に狙われた場合、一名だと間違いなく自分がロックオンされるわけだ。悠希作の獲物リーダーで場所も割れてしまう。だが二名の場合、相手を囲にすることや、鬼を攪乱することで助かる可能性が一気に開ける。というわけで、自然と鬼以外は二人一組で行動するようになった。いざという時はお互いを切り捨てあうための、とても嫌な運命共同体だ。

「さて――、どこに隠れているのかしら」

悠希の声。珍しく、鬼になったのは悠希のようだ。

体育倉庫とは隠れる場所が多い反面、出口が入り口か窓しかない。窓の鍵は開けて、いつでも出られるようにしている。後は、逃げるタイミングの問題だ。いつ飛び出してくるか、その時を悠希も警戒しているだろう。しかし、リーダーに映っているのに相手の姿がない場合は？ 相手は混乱する。じれるかもしれない。もしかしたら倉庫内ではなく屋根かもしれない。時間を稼いで逃げることで、相手がさらに焦れば付け入る隙ができる。その為に、完全に偽装する必要がある。

「跳び箱、ね……まさかこんな逃げにくい物の中に隠れているとは思えないけど」

どきり、と心臓が跳ね上がる。

「ん？ 開かない……。ねえ、誰がいるのかしら？」

ガタガタと跳び箱を開けようとする音が聞こえる。

跳び箱は、一つは開きにくいように一番目の段に内側から鉄アレイを何個か括りつけた。中から引っ張っているように錯覚させることができる。

俺はといえば、一番奥の跳び箱の中で、光の加減上、丁度影になる場所で身体を横たえている。跳び箱の中は非常に暗く、懐中電灯で照らさなければ分からないだろう。

「……案外中が暗くて分からない、ということは、それに紛れればやり過ごせると考える可能性があるわ。懐中電灯を……」

びくびくびく――。

冷や汗がダラダラと流れる。

まずい、かもしれない。

カタツと、丁度俺の隠れている跳び箱を開ける音がする。

「……」

――非常に、よろしくない事態！

「……誰もいない」

蓋が閉じられる。

思わず安堵の息を吐く。

さらに分かりにくいように下から二段目に暗幕をかまして、その下に身体を横たえていたのが幸いした。古典的だが、底上げ、二重底と同じ発想だ。

「おかしいわね、レーダーではここに二人いるはずなのに」

跳び箱の隙間から覗いてみる。

悠希はずっと体育倉庫の棚のほうを凝視していた。

……そこには、佳織が包まって隠れている応援団旗がある。

「何かを包んでいる……ように見える」

――まずい、ゲームオーバーだ。

このまま佳織が捕まってしまうと、そのまま佳織に俺が狙われてしまう。タッチの仕返しはないが、それはアリだ！

音を立てないように、落ち着いて暗幕を剥がし、そっと跳び箱の

箱を持ち上げる。

そつと、そつと。ぱかつとな――。

「……」

「……」

……なぜか、悠希と目が合ってしまった。

「……音、鳴っちゃいました？」

敬語で尋ねた。

「静かだから、衣擦れまで聞こえてるわよ」

ちよつとでも動くと聞こえてしまつらしい。

おとなしく動かなければ良かった……。

「と、いうわけで」

前置きをした瞬間――。

「ダッシュ――」

佳織が叫び、窓へと駆け出す。

「チツ――」

悠希がその動きに視線を追われた隙に、入り口へとダッシュをします。

二名同時による攪乱作戦！

悠希が反応したときにはもう遅い。すでにドアに手をかけた。

開けると同時に――。

「久――」

悠希が叫ぶ。

「ご苦労様」

タツチされる。

「えっ？」

あれ、鬼は悠希のはずじゃあ？

「鬼にタツチした後って狙われないから暇じゃない。だからこうしてゲームに参加してみたのよ」

「……うそーん」

鬼と組んでたのかよ……恐るべし沙耶悠希。

というわけで。

「うわあああああ——」

「きゃあああああ——」

「待て、待つんだ！ 日向！ のぞみ！」

両手を上げて二人を追っかけまわしました。

「……まじかよ、昴くんが高辻と一年生を鬼の形相で追い掛け回してるぞ。ありやマジもんの公開レイプだぞ」

「さすが昴くんだ、あの人にとっちゃマジ法律カンケーねえよ」
なぜか同級生から一目置かれていた……。

鬼ごっこ3 ― 昴栄治

「……最後の最後でミスった」

ついに三日間耐久鬼ごっこは終わり、結果発表。

ほとんど鬼になっていなかった悠希とのぞみで時間を計算している。

結局、そのままずると最後まで誰も捕まえられなかった。

まずい……十一時から十六時までだと五時間じゃないか。

七時から十一時まで合わせても四時間……。負けが確定している。

まじかよ……。女装して名門女子高に潜伏かよ……。

「ミッシヨン・インポッシブル……」

「まさかお前が犯罪者になる日を目撃することになるとはな」
慶介は感慨深そうに。

「……やっぱ、アウトだよな？」

「完璧アウトだ」
断言される。

「精神鑑定に持ち込んだらいいんじゃない？」

出た、佳織のひとつと発言だ。

「病院はやだなあ……」

精神科通院とか、ホントにダメ人間っぽい。

「ぶつといの打たれる」

「……注射のことだよな？」

「さあ？」

「……」

そういえば針木市にある病院の精神科医はマッチョのオジサマらしい。

「洒落になんねえ……」

「その時は赤飯炊いてあげよう。そだなー、『昴栄治、メイデン喪失記念』とかどう？」

「マジでブルー……………」

「やあ、新しいえーじ。はるー」

「そんな生まれ変わり方は絶対イヤだ!」

ダメだ。やっぱり頷くべきじゃなかった。

「でさあ悠希ちゃん……………はやっぱりまずくない?」

「そうね、私としても……………だし」

悠希とのぞみが集計しながら何か話し合っている。

「なあなあ、で集計結果は出たの?」

佳織が尋ねる。

「……………」

「ちよつと待つてね、悠希ちゃん今集中してるから」

「……………集中?」

佳織が首を傾げた。

「……………」

日向は一言もない。

「どうしたの、日向?」

尋ねてみる。

「……………自己採点の結果が」

人事ではないが、合掌してあげたくなった。

「でもまあ、計算ミスってことも……………」

「……………三回検算した」

なんて律儀な性格だ……………。

日向は真っ白な灰と化していた。

「結果出たよー」

のぞみが紙をひらひらとさせて持ってくる。

「ふう……………」

何を集中していたのか、悠希が両目を揉んでいた。

「結果、キキタクナイ……………」

日向の言葉はカタコトと化していた。

「日向、仕方ない。ここは開き直って一緒に新しい扉を開こう!」

日向の肩を叩き、爽やかに親指を立てて見せた。

「……黙れ、マゾ野郎」

本気で鬱入ってる……。

「というわけで三日間合計で一番鬼が長かったのは日向ちゃん。二日目の夜十二時以降鬼だったのが響いたね」

「すげえぞ、日向の本気が見れるぞ久……って久、どうした？」

「いや、凄く嫌な予感するんだよね……」

はっ、と久は顔を上げる。

「ふふふっ」

とても素敵な笑顔でのぞみと悠希は笑っていた。

「というわけで、三日目のビリは……久くんだよ」

「馬鹿なっ——！」

久が机を叩いて立ち上がる。

「ほら、久——」

そう言っで、メモ帳を悠希は掲げる。

「栄治に鬼を交代した時間、『十六時』、でしょ？」

確かに久が『11』と書いたはずのそれは、見事に『16』となっていた。

「ほら、貴方の筆跡よ」

「ひ、筆跡の偽造——！」

とりあえず仰け反って見せた。

「さ、さすがにこれはないよ、ねえ、佳織——！」

「んっー、そだねー」

佳織と悠希の目が合う。

口パク。

——カフェ・オードリーのケーキセット。

——オッケー。

「証拠ないでしょ」

買収成功してる！

「そんな馬鹿なっ——！　ねえ、栄治、何とか言っでよ——！」

「ねえ、栄治も間違いないわよね？」

久の声を遮るように、悠希が素敵な笑みで尋ねる。

「はい、間違いありません」

敬礼して答えた。

「なああああああ——」

ガタガタガタ、と久が机に倒れこんだ。

「救済処置、ありがとうございます！」

本当に犯罪者になるところでした。

「え——っ——っ！」

「うおお、久がブリッジしたぞ！ 久が壊れた！」

「こ、これで……ひさしの、ひさしの制服姿……」

「はいはい、悠希ちゃんヨダレが出てるので拭きますねー」

「ふふふっ……もうなんでもいいわ、世界なんて滅んでしまえばいいの……」

「……カオスだな」

珍しく、佳織が傍観者だった。

——敗者、高辻日向と、腐女子の本気により、沙耶久。

罰ゲーム ― 昴栄治

針木駅から三駅ほど東の南国市へと進んだ方向にある、名門私立女子校。

レンガ造りの塀に、煌びやかな装飾の正門。ここは本当に現代かと疑いたくなる時代錯誤の言葉。ごきげんようなどと挨拶するのは二次元にしか存在しないと思っていたのに。

「はい、では久子ちゃん完成です」

楽しそうなのぞみの声。

「……」

肩まで伸びたウィッグを付けて、薄くファンデーションを塗って化粧した顔、女性と言われてもなんら不思議はない。

「はあはあ……久……」

「はいはい、悠希ちゃん鼻血拭きましょうね」

「……悠希が壊れた」

こんな悠希は初めて見るな……。だが、その気持ちも分かる。

……可愛いじゃないか。

「結婚してください」

求愛してしまった。

「……栄治がダメだ。人としてダメだ……」

久の中で、また俺の株が下がってしまった。

「ぷっ、くくくっ……」

佳織が地面を叩いて必死に笑いを堪えている。

「くっ……、こ、こら、佳織……笑うな……ぷっ、メインは……これから、だ……ぷくくっ」

「……コ、コイツラ」

日向が拳をプルプルさせている。多分怒りだけじゃなくて寒いんだろう。

往来を歩く人が、何だコイツ、の視線を向けている。

「……ぐぐぐ」

これ以上なくらいに日向の顔が赤面していた。
だって……冬に街中でスクール水着だもんな。

「日向……同情するわ……」

悠希がいつの間にか普通に帰っていた。

「そう思うなら……止めてよ……」

「ダメよ——、久の女装が見れなくなるじゃない！」

いや、戻っていなかった。

「ダメだ、コイツ……」

こればかりは日向に賛成する。

「じゃあ佳織ちゃん、そろそろ始める？」

のぞみが尋ねる。

「んー、そだねー……その前に」

おもむろに、デジカメを取り出す。

「フラッシュ——！」

「うわあああああ！」

「きゃあああああ！」

激写——。

「じゃあお二人さん、ルールを簡単に説明するね。ルールは、正門をくぐって玄関まで入ってから戻ってくる。何があっても、玄関までは入ること」

何があっても、を凄い強調した。

「……あの、出来なかったら？」

「この写真を、学校中にばら撒く」

お、鬼だ……。

「はははっ……佳織ちゃん怖い」

「さて、行くはひと時の恥、行かぬは一生の恥。健闘を祈る、敬礼

——！」

残る五人は敬礼した。

「……あんた達、本気で後で覚えておきなさい」

それでも律儀に行こうとするのが日向のいいところだな。

とぼとぼとした足取りで女学生とスクール水着の奇妙な女の二人組みが校門へと足を進める。

「時に佳織」

「なんだ野獣？」

「もしも警備員に止められなかったらあまり面白くないんじゃないか？ 栄治だったらともかく、久だったらほとんど男だと分からないぞ」

「ああ、大丈夫、大丈夫。先に学校側に通報しといたから」
「……」

「ほ、本当に水着をきた露出狂と女装壁のある男の二人組みが！ いや、男だとは分かんが、言われて見れば男と言う気も……！ 通報ではあいつ等、突然服を脱ぎだして『見て、見てー、ばおーん』とか言い始めるらしいぞ！」

校門のほう騒がしかった。

「……佳織、お前手段を選ばんな」

「はははっ……佳織ちゃんちとやり過ぎ」

「一同、黙祷」

残る五人で二人の為に黙祷した。
ファンファンファン――。

「へっ？」

真っ赤なランプを鳴らしながら、威圧感丸出しの白と黒のお車がやって参りましたが……。

「……！」

「……！」

「オイ佳織、国家権力が介入してきたぞ」

「さすが教育機関。防犯対策も完璧だなあ」

「いやいやいや、落ち着いている場合じゃないよ二人とも！」

「まあまあ、落ち着きなさいのぞみ」

「いやいやいや、皆逆に落ち着きすぎだよー！」

「あつ、パトカーに乗せられた」

ボタン。

車が発進する。

「……」

「……」

そして誰もいなくなった。

「……帰るか」

「そだな」

「ちよつと、ちよつと、ちよつと——！」

よく晴れた冬の空の陽のこと。

ちよつとやりすぎたかもしれない、と佳織は少しだけ反省したら
しい。

もちろん次の日は、昼から教会で家族会議になった。

家族会議 ― 昴栄治

「貴方たち……」

教会のステンドグラスが陽の光に照らされて、神秘的な色を描き出す。

肌寒い空気に温かみを、地に光を、世界が神の奇跡により生まれたことを実感する。

そんな晴れた日に――どうして久と日向は肩を並べて正座していると云うのか……。

「一体何をしていたのですか……」

南さんの肩が震えている。

「怒りを通り越して、やるせなさすら感じます……」
目頭を押さえながら。

「……おい、佳織。これは説教よりも堪えるぞ……」

慶介が佳織に耳打ちをする。

「すまん、さすがに泣かれるとは思わなかった……」

「久……貴方はなぜ、女装してまで通学しようとしたのでしょうか……、どこで、どこで育て方を……」

嗚咽。

「……あ、あの、南さん……」

「けして、バイであることは否定しません……しかし、この過ちを犯してしまう前に相談して欲しかった……」

「……あの」

「ううう」

「じ、情報の齟齬が……」

久の背中が小さく見えた。

「そして……あろうことが日向まで……、たとえそんな性癖があったとして私は貴方を軽蔑したりはしない。しかし、……貴方がその性癖をさらけ出してしまっただけに色々な不満を溜め込んでし

まっているとは……もつと、話をするべきでした」

「死にたい……」

日向は日向で放心状態だった。

慶介が佳織にアイコンタクト。そして口パク。

佳織も口パクで返す。

読唇術を試みる。

——おい、なんとかしろ。

——ムリ。

諦めるの早いつて。

——つかえんアマめ。

——テメエこそなんとかしろ。

——ムリだ。

——マジつかえねえ。

——なんだと。

——やんのか。

地味な小突きあいの喧嘩を始めた。ダメだ、こいつらじゃ。

久と日向は使い物にならない。

残るは……。

「……」

悠希と目が合う。

よし。

助けてくださいオーラーを視線に込めて、捨てられた子犬のように見つめ続けた。

「……」

ポケットから携帯電話を取り出して、ぽちぽちと打ち始める。

おお、早くも何か名案が！

メールを受け取る。

『安心しなさい。久はノンケよ』

——違う！

ブリッジしたい気持ちを必死に抑えた。

カチカチとメールを打つ。

「……」
悠希はメールに目を通して。
かちかちかち。
送信。

『メンドい』

——バツサリ！

くそう、魔女の仇名は伊達じゃないのか。

「うう……神よ、初めはこんな子達ではなかったのです。どうか子育てに迷える哀れな私をお救いください……」

ああ、お祈りモードに入っちゃったよ。

「南さん」

のぞみが立ち上がり、南さんの肩を叩く。

真打登場！ これは、逆転の一打となるか！

「のぞみ……？」

「過ちは、誰しもが犯してしまうのだと思います。それは怠惰故に、感情故に、止められたかもしれない過ちから、どうしてもなかったものまで」

天使のような笑顔で。

「起こってしまったことを嘆くのは簡単です。でも、同じ過ちを繰り返したくないのなら、それを起こしてしまうにいたった過程を見つめなおして、もう二度と同じ過ちを繰り返さないように一緒に成長していくこと。本人だけじゃなくて、周りの家族も一緒に成長してあげることが大切なことじゃないかな？」

よく分からないが、何かいいこと言ってるぞのぞみ！ その調子だ！

「南さんも辛いけど、一緒に前を向きませんか？」

「そうですね……その通りです」

南さんが、ゆっくりと顔を上げて菩薩のような笑みを浮かべた。

まさか、ミッション成功か！

のぞみはもしや政府裏組織の交渉人だったのか！

四谷防衛庁対テロ対策犯仕込みのネゴシエイトだ！

とりあえず心の中で興奮してみた。

「というわけで、久くんと日向ちゃんが二度と同じ過ちを繰り返さぬよう、三人で、しっかりとお話をするべきだと思います！」

「えっ——」

「えっ——」

久と日向がハモった。

人柱作戦！

「そうそう、あとは三人に任せて」

佳織が途端にひとごとモードに入る。

「うむ、ねっとりとお話をしろ、三人で」

慶介、ねっとりじゃねえだろ。

「そうそう、ぐっちょりとお話だよ」

の、のぞみ——！ それ3P！

「ま、まあ、仕方ないよ。家に帰るまでが罰ゲームってことで
フォローして上手くまとめたつもりだったか……」

「——罰ゲーム？」

南さんがぴくり、と反応した。

「バ・バカ、栄治！」

「えっ？」

「罰ゲーム、ということですか？」

「あっ……」

「そうです、佳織が発案した罰ゲームだったんです」

「ひ、日向、お前！」

「ふふふ……死なばもろとも」

日向の目は据わっていた。

「き、汚えぞ。罰ゲームになってねえじゃねえ、か……？」

ぼん、と佳織の肩に手が置かれる。

「佳織、是非とも聞かせてください。貴方の浅はかな思いつきがどれほど多くの人に迷惑をかけるか、貴方は分かった上で発案したのか、それに足る理由とはなんだったのか……」

「はははっ……楽しそうだったー……じゃ、ダメかな？」

「南無」

佳織の為に合掌した。

「栄治、それに賛成した貴方たちも同罪です。今日はみっちりとお話ししよう」

「連帯責任！」

仰け反った。

慶介が恐る恐る手を上げる。

「南さん……俺これからバイトだったんでこれで……」

「休みなさい——」

慶介の動きが止まる。

「くっ——、呪いのステータス異常が……ごめん南さん教会に行かなくちゃ……」

のぞみはワケのわからないことを口走り始めた。

「のぞみ、教会はここです」

「のぞみミステイク——！」

のぞみの代わりにリアクションした。

「はい、じゃあ皆そろそろ説教されるわよ。正座に戻りなさい」

「……悠希、貴方は昔と変わりませんね」

「何のことやら？」

「全く……」

こうして七人は、日が暮れるまで説教を受けることになった。

……この感じ、なんだか久しぶりだった。
そう。

——家族。

優先順位 ― 昴栄治

「頭がふらふらする……」

佳織の足取りは怪しい。

「ああ……短期間に二度目はさすがに堪える」

「二度目かよ」

「皆さん、夕食はどうしますか？」

南さんが尋ねる。

「久しぶりにいいですね」

日向が答える。

「小父様趣味め……グッ——」

日向の高速の肘が、慶介の鳩尾に入る。

「何か言った、慶介？」

「くっ、今日はこのくらいで勘弁してやろう……」

そう言う割にはかなりのダメージのようだ。

「私も食べていきます」

のぞみが答える。

「じゃあ僕も」

続いて久。

「……佳織はどうする？」

尋ねてみると、ヒラヒラと右手を振って。

「私はパス。バイトの面接」

「お前がバイトすんのか？」

「なんだ野獣、その意外そうな顔は」

「いや、意外すぎる。働きません勝つまでは、のお前が……」

「なによそのキャッチフレーズは」

「じゃ、そういうわけで」

佳織は玄関を開けて、去った。

「……珍しいこともあるもんだ」

慶介がぼつりと呟いた。

「……悠希？」

久の声に振り返ると、悠希も立ち上がっていた。

「ごめんなさい、今日は春樹に呼ばれているの」

「……そうですか」

南さんが答える。

悠希も去ろうとして――。

「悠希――」

南さんが呼び止める。

「何かしら？」

「春樹さんとは、上手くやってますか？」

そんなことを聞いた。

「……ええ」

彼女は、短く頷いた。

「さて」

のぞみが立ち上がる。

「というわけで、今日は私がご飯係を担当します」

「おいのぞみ、普通のヤツだぞ、普通の。お前の飯は無茶をしなきゃ普通に上手いんだからな」

「慶介くん、それじゃあ面白くないよ」

「貴様、そこに面白さを求めるんじゃない」

「なんで作ってもらうくせにこんなに偉そうなのかしら」

「うるせえぞ日向、お前も手伝え、しっかりと見張りをするんだ」

「はいはい、アンタに言われんのは癪だけど、のぞみが無茶しないか私も心配だしね」

そう言いながらも、どこか楽しそうに。

「申し訳ありません、明日の仕事で準備がまだでした。ちょっと部屋に戻るので、出来たら呼んでもらっていいですか？」

「ほんとすみません……、私たちのせいですよね」

「終わったことはもういいですよ」

暖かな笑みを浮かべる。

「反省したということを行動で示してくれたらにこりと。」

「……はい」

皆でハモった。

暗に、『次同じことやったらしばきますよ』と言われた気がしたのは被害妄想だろうか？

リビングには、男三人が取り残された。

「何だか……こうやって三人で顔を突き合わせるのも懐かしいね」

久が、口を開く。

「そうだな」

慶介も頷く。

「——三人の密約」

久が、ぽつりと呟く。

「栄治は、覚えているかな？ これは栄治の発案だよ？」

「ああ……」

よく覚えている。

触れず、助けずの暗黙の了解——。

暗黙の了解を共にするはずのパートナー、その暗黙の了解を解除すること。

「考えればさ、それって暗黙の了解を破っているよな……」

矛盾した密約だ。パートナー、すなわち佳織の暗黙の了解に触れることを意味している。

「……馬鹿馬鹿しい」

慶介が背もたれに体重をかける。

「ゆっくりと時間をかけて、心の傷ってヤツが癒えるのを待てばいい話だろう」

「……癒える、ね」

久の声は沈む。

「癒えるというのは、言い換えれば忘れるって事だよ。感情の忘却。」

無理やり蓋をして、溢れ出してくるのを防ぐ」

一息ついて。

「それは、そんなに簡単なことかな？」

「簡単とは言つてねえよ」

「その密約を叶えるためには、彼女たちの執着する何かに、僕達が取って代わらなければならぬ。家族に代わる、新しい絆として」

久は笑う。

「それが、なんだか最近出来そうな気がするって、そんな期待をしてしまうんだ……」

言葉とは裏腹に、久は寂しそうに言った。

「ちよつと男連中、何をくつろいでるのよ。お皿の準備してよ」

台所から、日向の声が聞こえてきた。

「うるせえ。今やろうとしてたのに、やる気が削がれたじゃねえか！」

「オノレは小学生か！」

台所と居間で、壁を挟んで二人は口げんかを始める。

「……久、俺もさ、こんな毎日がずっと続けばいいって思うんだ」

家族——それは俺にとって、かけがえのない暖かいものだった。

「何年も……何十年も……ずっと変わらない。何が起きてても、この七人は変わらない。だから……いつも恐い。突然この日常が失われしまうような、そんな気がする……」

「栄治？」

——佳織が、時々どうしようもなく、過去に囚われているような気がする……。

それは、七人の絆に影響を与えるような、そんな力を秘めているような気がする。

「それでも……過去を暴くような真似を、久達は責めるかな？」

がたり、と慶介は椅子を引いた。

「……慶介？」

「……皿並べるの手伝ってくるわ」

慶介は立ち上がる。

「……悪いけど俺は反対だな」

背中を向けながらも、慶介ははっきりと明言した。

「お前、思いつめすぎだ。今のお前を見ると、佳織と一緒に
前まで潰れてしまうような気がするんだよ……」

「慶介……」

「子供じゃないんだ。アイツがもしも、どうしようもなくて助けを
求めてきたならば、答えてやればいい」

「……」

でも、もしも——どうしようもなくなって、助けを求めなければ？

無理やりにも腕を掴んで、引っ張ってやるべき時だってあるん
じゃないのか？

「……一つだけ、覚えていたらいいよ」

久も立ち上がる。

「万が一、もしもの時が訪れたならば……プライオリティをはつき
りさせておくべきだよ」

「プライオリティ？」

「栄治が、何を一番大切にしたいかってことさ」

そして、テーブルには俺一人が取り残された。

一番大切にしたいこと——。

決まっている。

この暖かな空間がいつまでも続けばと、心から思——。

「オラ、いつまでしんみりしてんだよ！」

「うわっ——」

椅子の足を蹴られて、かなりビビッた。

慶介が両手に皿を持って現れた。

「なんか真剣そうに話してたけど、何の話？」

その後ろから日向も現れる。

「昂栄治のトークショーだ」

「……なんか嫌な予感しかないんだけど」

「何気にすごく失礼ですね！」

のぞみも台所から姿を見せる。

「栄治くんの、モテないトークショー？」

「のぞみいいいいいいつつ——！」

とりあえずブリッジをした。

「あつ、栄治が復活した」

久もお皿を持ってすぐに戻ってきた。

「違うんだ……みんな、俺にだってモテる場所あるんだ！」

瞬間に、日向の目が細くなる。

「煩い、黙れ、キモい、この二次元オタク」

「ひいい、言葉の散弾銃！」

「うおつ、コイツブリッジで歩き出したぞ！　なんて器用なヤツだ

！」

「あつ、ご飯できたし、俺南さんと呼んでくる」

「えつ、そのままで行くんだ！　途中で階段があるのに……」

心配無用だ久。

「南さん、間違えて除霊とかしなきゃいいけど……」

心配そうな日向を他所に、俺はそのまま階段を駆け上っていった。

当然ブリッジなので電気はつけられない。

「南さん、ご飯、です！」

「ああ、栄治。わざわざありがとうございます、す……」

ドアを開いたまま、南さんの動きが止まった。

「……栄治、一般常識について少し話をしましょうか」

「ひいい！　そう言えば今日怒られたばかりだった！」

首元を掴まれて、後頭部を床に打ち付けた。

そしてそのまま、仄暗い部屋の奥へと引きずりこまれた……。

「おい、栄治遅えなアイツ。何してんだ？」

「まあ、予想はつくけどね」

日向の呆れた溜息の向こう。

垂れ流された針木市のローカルテレビ番組で、緊急ニュースのテロップが映し出された。

——針木市駅構内にて、回送電車に男性が飛び込み、死亡しました。

外敵 ― 昴栄治

幸せな日常。

それが、幸せだった日常に変わる。

俺の、宝物。

宝物だったものに変わる。

変化は唐突に、速やかに。

濁流で飲み込み、日常を滅茶苦茶にしてしまう。

そのニュースを知ったのは、帰り道に携帯電話をいじりながら、ニュースのコンテンツを開いている時だった。

「飛び込み自殺……」

事件が起きたのは、人でごった返す夕暮れの針木駅構内。

目撃者は多数。

回送電車に、ふらふらとした足取りの男が飛び込んだらしい。

ほんの、三・四時間前のことだ。

教会から最寄の駅にたどり着くと、行列のようなタクシー待ちの列が出来ていた。

「……これじゃあ、帰れないね」

久が呟く。

「仕方ないわね、今日は教会に泊めてもらうしかないさそうね」

日向も頷く。

「だな」

慶介も同意する。

「……栄治くん、どこ行くの？」

俺の足は、知らず知らず針木駅の方向へと向かっていた。

「栄治？」

久も、怪訝そうな表情をする。

「いや、ちょっと今日中にやらなくちゃいけないことがあってさ…」

……」

「ちよつと栄治、何キロあると思ってるのよ！」

日向の制止を聞かずに、俺は駆け出してた。

「おいおい、栄治。マジかよ！」

何キロ？

十駅分だ。地方都市の六駅ならば二十キロはあるだろうか。
一体何時間かかるだろうか。

分からない。

俺は馬鹿なことをしている。

何をそんなに焦っている？

まるで、誰かの焦りの感情が俺に伝染しているかのように。

思考が警笛を発して、俺の身体を稼働させている。

——誰かが俺を傷付けようとしている。

——誰かが俺達を破滅させようとしている。

——犯人は誰だ。

——どこにいる。

「何を……馬鹿なことを考えている」

自嘲する。

思考を止めてしまいたかった。

なのに、俺の意思とは裏腹に警笛を鳴らす鐘はどんどん大きくなるばかり。

「はぁ……はぁ……」

膝に手をつけて荒い呼吸を繰り返す。

運動不足が祟ったのかもしれない。

まだ一キロも走っていないじゃないか……。

「はぁ……はぁ……」

それでも、ゆっくりと歩を進める。

ゆっくりと針木駅を目指していた。

……。

国道のわき道を歩きながら、線路に沿っていくように。
足に痺れが走ってくる。

一時間、二時間……。

腰にまで痺れが上がってくる。

ふくらはぎが悲鳴を上げている。

ふとした瞬間に太ももをつつてしまいそうになる。

三時間、四時間……。

すでに日付が変わって二時間が経過した頃。

俺は……真夜中の針木駅前に到着した。

事故があったというのに、不思議なほどに静まり返っている。

……なんだったのだろうか、あの焦燥感は。

見渡して、何かを探そうとする。

——佳織の姿。

なぜ、佳織がいると？

どうやら、自分でも思った以上に情緒不安定なようだ。

本当に馬鹿げている——。

「……ただの、野次馬か？」

「——っ！」

突然声をかけられる。

「なんだ、ガタイと顔のワリに随分と小せえヤツだ、くくくっ」

爬虫類のような笑い方。今にも舌をだしそうな痛々しいパンクフ
アッション。

「誰だよ……」

「おいおい、学校で習わなかったか？ 相手の名前を聞く前にまず
自分から名乗るってよおお、ひやははははははっ——」

なんだ、コイツは——。

まるで、平穩の中に紛れてはいけない異物のような。

敵——。

その一文字が頭をよぎる。

「……見覚えがあると思ったら、テメエは沙耶久の仲間か。七人もいやがるから端役までちゃんと覚えてなかったがよ」

「久？ お前、久を知っているのか？」

「あん？」

俺の質問に不機嫌そうな顔を見せるが、やがてその表情は嗜虐へと変わっていく。

「ああ……知ってるぜえ。殺してやりてえくらいになあ……」

「殺、す……？」

日常からかけ離れた単語。

「仲間を殺されたから、殺し返す。なあ、昴栄治クンよお、それは当たり前のことだとは思わねえか？」

「お前、何言ってるんだよ……」

「オマエ？ 随分と馴れ馴れしいじゃねえか。桜井さん、だろ？」

少年は、桜井と名乗った。

「で、何で塚本佳織じゃなくてお前がここにいるんだ？」

「な……」

その言葉が――。

「何を、言ってる……？」

けして開いてはいけない扉を開いてしまったような気がして――。

「ひやははははっ――、なんだ、お前は何も知らねえのかよ。何も知らずにこんなところまでノコノコやってきやがったのかよ！」

ひとしきり笑った後、ヤツは近づいてくる。

身長は、俺の鼻ほどまでしかない。

下から見上げるように、睨みつけてくる。

生理的嫌悪感――。

強い毒素を持つ蛇への恐怖感に似たもの。

「……塚本佳織に伝言だ」

「何、を……グッ――！」

鈍い衝撃に蹲る。

「ガッ――」

呼吸が、苦しい……。

鳩尾に拳を入れられた。

「クソッ……」

今度は逆に、俺がヤツを見上げる形となる。

「逃げられると思うな、俺たちはいつでもオマエを見ている」

逃げ、る——？

何から？

「塚本泰三からは、逃げられない——となあ」

不快に笑いながら、その名前を告げた——。

エヴァ7 ―幕間―

この世界を認識するのは、他者の存在を確認した時。
それは、この世に対等な存在を見つけた時。

手を繋ぎ、輪を描いていた。

二人で一つの輪。何者にも代え難い、仲間という絆。
だから、現実味はない。

大切だった者の突然の死を理解できないように、彼女は裏切りを
理解できない。

ぶくぶくと、泡立つ緑色の世界に、脳だけで漂う今も――。

暗黒時代――。

文字通り、光はどこにもない。光を感じ取る感覚器はもうない。

怖ろしいくらいに静かだ。でもそれも当たり前。音を聞き取る機
関も全て？がれた。

許されたのは思考だけ。

描き出して、浮かび上がり、消える。

無数の泡がいくつも浮かび、例外なく弾けていく。
希薄だ。

存在があまりに希薄。

それは本当に、エヴァと呼ばれた少女だったのか。
培養液の中で漂う脳髓の見る夢は。

何秒たった？ それとも何日？

時計がない。世界に変化がない。心臓の音すら聞こえない。
温もりがない。

寒さすらない。

本当に何も無い。

本当に、本当に、本当に――。
感じたい。

感じたい、感じたい、感じたい。
痛みでいい。

なんならナイフで思いっきり傷付けて欲しい。
気が狂うほどの激痛がいい。

激痛が欲しい。

このままじゃ。

おかしくなる。

狂ってしまう。

誰か……。

誰か、誰か、誰か、誰か。

……どうして。

——どうして、こんなことになった？

彼女の痛みが全て脳波を通してモニターとなり、映し出される。

モニターは、言葉で埋め尽くされた。

たすけてたすけてたすけてたすけてたすけてたすけてたすけてた
すけてたすけてたすけてたすけてたすけてたすけてたすけてた
すけてたすけてたすけてたすけてたすけてたすけてたすけてた
すけてたすけて——。

「……お言葉ですが、こんな状態では一日も持ちません」

廣田が恐れながら意見する。

意見せずにはいられなかったのだ。

全うな意識が、五感の全てを失われた世界で正常であり続けるこ
とができるはずがない。

人は、三日間白い部屋に入れられ続けると発狂する、と言われて
いる。

ましてや、色も音もない世界。

狂わないはずがない。

実験も何もない、これでは無駄遣いだ。

「狂うのを待て」

塚本泰三は、短く指示する。

「……はい」

廣田の理解を超えていた。

じくじくと、意識が痛む。

この痛みを、何と表現すればいい。

脳の溝に手を入れられて、無理やりこじ開けられるような。

意識がボトルの中に入れられてシェイクされるような。

気持ち悪い。

気を抜けば、また時間を数えようとする。

苦痛――。

痛みのない苦痛――。

言葉にしてしまうと、ちっぽけになる。

妄想を。

妄想を、妄想を――。

世界から、逃れる術を、誰か――。

だれか――。

だれあ……。

あえあ……。

……ヴああ、おネガいいいい……。

意識が溶けていく。言葉を失っていく。まるで原始の獣のように。

彼女として保たれていたものが、胃袋の中で溶かされていくように

に形を無くしていく。

自我の消失。

――我？

どこまでも拡散し、薄れて世界と同化する。

言葉を失うのは危険だ。意識の上でも世界を固定出来なくなる。

「これ以上は……脳が耐えられません」

「そうか」

塚本泰三は短く答えた。

「出番だ」

その言葉に、彼の傍らに立っていた子供が反応する。
以前——、非献体の暴走事故があった。

その際に、凍結された少年だ。

「彼でしょうか？ 彼女でしょうか？」

少年は、ぼそり、と答える。

最もな質問。脳の外観だけで性別は判断できない。

「エヴァは彼女——、君の友達だよ、ウェイ——」

「ウェイ？」

廣田は首を傾げる。

「その子供の被献体名は……」

「暴走した献体をそのままの名前で商品として出すのは好ましくないだろう。ウェイという名は実際に被献体として扱っていた名前だ。不都合がない」

「……なるほど」

「新しいウェイの最終確認もかねて、エヴァの実験を次のフェイズへと移行する」

「そのエヴァを売って助かったノヴァは、どうしておりますか……？」

モルモットだった少女が、もしかしたら自分よりも優遇されているのかもしれない。

廣田のちっぽけなプライドが疼いたのかもしれない。

だが——。

「知らん、もうアレに用はない」

塚本泰三は冷たく切り捨てる。

塚本泰三は、廣田の理解外の存在だった。

「……失礼ですが、貴方はエヴァではなくノヴァを選んだのでは……？」

「いい加減、黙らないか」

「——し、失礼しました」

「さて、ウェイ——、友達に語りかけてあげなさい」

「……はい」

ウェイは、目を閉じる。

「えっ……？」

廣田の間の抜けた声が漏れる。

しばらくして、脳波の乱れが徐々に収まっていく。

とても文字と呼べなかったモニターの画面が、一貫性を帯びた文章として形どられる。

「馬鹿な……この少年は一体何をしている？　テレパシーでもしているというのか……？」

「インナー・マードーというプログラムを知っているかね？」

「……コードネーム、ファウラ。算理論……」

「ファウラに人格を付与し、ドナーの脳に組み込んで侵食する。やがて既存の人格を新しい人格が乗っ取っていく。それ故に『内なる殺戮者』という名前を与えられたプログラムだ」

「まさか……」

「そう、算理論はドナー、特殊な被献体レベルにおいて完成した。完成していた、と言った方が正しい。だが、本当に古き人格は失われてしまったのだろうか？　二重人格による人格の統合は、異なる人格の融合とされるように、古き人格を組み込んだインナー・マードーはさらなる変化を遂げてまた異なる人格となるのではないか。ファウラ、ウェイ——ファウラウェイ。この少年が、お前たちの夢見た希望だ」

「プラン・エーは成功した……」

「プラン・エーが日の目を見ることはない。だが、プラン・エーの生み出した副産物こそが、思わぬ莫大な金を流し込むことになる。それが、このテレパシーじみた事象だ」

モニターに映し出された会話に目を通しながら。

「脳波を増大することによる、間接的な精神侵食——意識を持つ人間にのみ通用する爆弾、何一つ破壊することなく対象の心だけを強制的に破壊する、この地球上で最もエコノミーな兵器だ」

「なっ——！」

廣田の顔が、驚愕に歪む。

「……兵器として、売り込むと？」

「環境汚染のない素晴らしい兵器だと思わないか？ この地球上で最も邪なものだけを除去する最高傑作。核とは違い、簡単にスイッチが押せるだろう」

抑止力として作られた核とは違い、使われることを前提で作られた兵器。

「一度でも兵器として使われたならば、対応方法もまた金となる」

「対応策が、あるのですか？」

「ファイヤーウォール」

短く告げる。

「……しかし、狂ってる、こんなものが兵器として使われたならば」
「増幅と電波の経路点の問題をクリアしたならば、全人類を滅ぼせるかもしれない。これがもしも、テロリスト国家に渡ったとすれば、間違いなく世界の情勢は揺らぐ」

どこまでも、塚本泰三は淡々と話し続けた。

——気分は、どうだい？

……。

——言葉は、まだ覚えているかい？

……だれ？

——そう、ゆっくりと言葉を紡いで行けばいい。その為に僕は雄弁に語り続けよう。はじめまして、エヴァ。エヴァとはキミの名前だ。名前、その固体・対象を表して個別するためのもの。僕の名前はウェイ、君の友達だ。

……ウェイ。

——なんだい？

言葉を、もっと聞かせて……。

——ああ、そうすることによろ。

相談 ― 昴栄治

―― 暗黙の了解。

互いの過去には、けして深く関わらないこと。

唯一絶対として取り決めた、俺たちの間のルール。俺たちの信用問題。

それを――。

どうして俺は、破ろうとしているのだろうか……。

レンガの建物――針木警察署。それを俺は、目の前にしていた。

しかし、何か良くない予感がする。

例えば、桜井要という変化。

具体的には何も分からないけど、何かが俺たちの中で変わろうとしている。

―― 佳織を、中心として。

意を決して、俺は歩を進めた。

「―― こんにちは、どうかされましたか？」

「中野刑事を…… お願いします」

…… 何が一番大切な、その為に何をするかを、ハッキリとさせないといけない。

「…………… 栄治くん、何かあったのかい？」

「何か…………… ですか」

「随分と、深刻なように見えるよ」

通されたのはロビーだった。

長椅子に、中野刑事と肩を並べて座った。

「はい」

缶コーヒーを渡される。

「…………… ありがとうございます」

「ん、いいよ、いいよ。…………… それで、今日はどうしたんだい？」

缶コーヒーを開けながら、中野刑事は尋ねる。

「先日の——連続自殺事件についてです」

ぴたり、と中野刑事の手が止まった。

「本当に、自殺なのでしょうか？」

「……」

中野刑事はコーヒーを傾ける。一口飲み、口を開いた。

「……どうして、そんなことが気になるのかね？」

「いえ……」

適当な言葉が出てこない。

「そんな好奇心のためだけに、こんなところまで来たのかね」

「それは……」

否定したいのに、本当のことを言ってしまうのが恐ろしい。

どうして——？

少なくとも、何かしら佳織の為になるかもしれないのに。

「まあ、顔を見ればそんな詰まらない理由じゃないことは分かるがね」

中野刑事は、再びコーヒーを口に運ぶ。

「すまないがね、捜査情報を公開することは出来なくてね……」

「塚本一族毒殺事件——」

口にした。

禁忌を口にするように、搾り出した。

「……栄治くん」

「もしかして、何か関係があるんじゃないかって……」

中野刑事ならば、信用できるから。

俺のことをずっと気にかけてくれた、中野刑事ならば……。

「私が君にこんなことを言っでは、あまりに不謹慎なことかもしれないが……」

言いにくそうに前置きをする。

「言ってください」

「……今更ではないか？」

「そうかも、しれませんか……」

中野は痛ましげに首を振った。

「あの事件。未だに、犯人は分からないままだ」

「時効には、まだ時間があります」

「犯罪発生から十八年、それが時効の成立だ。だから、残された時間はあと八年、それは長いと思うかね？ それとも短いと思うかね？」

「絶望的に短い、と思います」

「その、通りだよ」

長い溜め息を漏らす。

「犯人は見つからず、このまま事件は永久に闇へと葬られるかもしれない。なのになぜ、今になって真実に近づこうとするのかね？」

「……少し考えることが増えただけです」

「佳織ちゃんのこと、かね？」

「気づいてましたか……」

中野刑事は一気にコーヒーを飲み干して。

「彼女は、必ず現場に現れる。一連の派手な自殺事件の現場に必ず、なぜかは、分からないがね……」

「何を、していると思いますか？」

「親の仇のように、チョークのラインを見つめていたよ。もしかしたら……犯人を自分の中で決めつけているのかも知れない」

「自分の中で決め付ける？ 犯人に目星がついている、じゃなくてですか？」

「……あれは公式発表の通り、自殺だよ」

「どうして自殺だと？」

「直筆の遺書がある」

「偽造かもしれません」

「警察の鑑定を甘く見てはいけない。一昔前のレベルの低い鑑定ではない。紙にめり込む筆圧の強弱から、筆順、楕円の角度、跳ね、止め、そこから心理状態を分析して、何度も照合を繰り返しパーセ

ンテージをはじき出す。似てる、似てない程度じゃないんだよ。形態一致の範疇を大きく超えた、極めて信用できる結果だよ」

警察が言うならば、その通りなのだろう。

「ならば、自殺後の死体遺棄などは――！」

「栄治くん」

たしなめるような口調で。

「……すみません」

「どうして、そこまでこだわるのかね？」

「違和感が……時々どうしようもなく不安になるんです」
缶コーヒーを握り締める。

既に缶は温もりを失い始めていた。

「違和感、かね？」

「どこがどう、という言葉にできないのですが、ただ漠然と違うと頭が告げるときがあるんです。それっておかしいですかね？」

「刑事の直感だってそんなもんだよ」

「刑事がそんな曖昧なものに頼っていいんですか？」

中野刑事は真剣な面持ちになる。

「曖昧でも、それは確かなヒントなんだよ。どうして、頭で違うと感じたのか、それは何の根拠もなく浮かぶものではない。これまでの自分の経験法則から何かがずれているからこそ、何かが違う、とそう感じてしまうんだ。バカにしたものじゃない」

「俺の経験法則なんて、役に立ちますかね」

「ああ、それは大きなヒントだよ。何が違うと感じるのか、どの経験法則に基づいているのか、それらを突き詰めて考えていくことだ」

「恐らくは……塚本一族、毒殺事件のこと――」

「そうか、君の違和感はそこに結びつくわけか」

さて、と中野刑事は改める。

「どうするかね？ 自殺事件は無理だが、あの事件ならば当事者の君には話せる。だが、話せることは余り変わらない。話、聞いていくかね？」

時計を改めて確認して、頷いた。

父親 ― 昴栄治

「さて――」

中野刑事は分厚いファイルを机の上に置いた。

冷房の効いた応接室。

長机を挟んで、中野刑事と向かい合って座っている。

「事の発端は十年前、塚本家当主塚本泰三の自宅で原子炉融解事故の処理について重役が話し合うために集まった。集まったのは代表取締役の塚本泰三、各部署の部次長以上の役職者計二十名。塚本宅に勤める給士たちと塚本佳織ちゃん、そして君を含め、その場にいる人間は三十四名。話し合いの終わりは午後十時を予定していたが、日付が変わっても迎えを呼ぶ連絡が、会合に出席した誰からもなかった。不振に思った社員と部長の専属の運転手がその場に駆けつけたところ、君と塚本佳織以外の三十二名は全員息を引き取っていた」
「何度聞いてもピンと来ない。記憶のどこにも、その光景は存在しない。」

本当に俺は、その場にいたのだろうか。

だって俺は、白い部屋で眠っていたというのに。

「間違いないかね……と言ってもやはり無駄かね？」

「すみません……」

責められているわけではないのに、申し訳ない気持ちで一杯になる。

「話を進めよう。通報を受け、警察が駆けつけた時にはやはり、三十二名は死亡していた。だが、子供たち二名はどこにもいなかった。第一発見者の社員に事情聴取をしても、そのような子供はいなかったということだった。だが、テーブルの食事の数から、あと二名いると、そう我々は判断した。数日後、御座市と針木市の県境で身元不明の子供が保護された。彼らは飲まず喰わずで数日間歩き続けたようだ。衰弱が激しく、危険な状態だった。女の子の方は、塚本家

に残されていた資料より、塚本泰三の養子である塚本佳織であると判明した。そして、給士の一人、昴さんの一人息子も行方不明。そこから警察は、屋敷にいた最後の一名は昴栄治くんであると判断、つまり、君を昴栄治くんと判断したんだ」

「……それはつまり」

「そう、君は昴栄治くんではないのかもしれない」

そう言われればしつくりとくる。そして同時に、絶望的な気分にもなる。

昴栄治でないと言われることは、七人の家族に代わる絆を結んできた今の俺まで否定されたような気分になるからだ。

「……続けてください」

搾り出すように口にする。

「凶器となる毒物は、一昔前に除草剤として市販されていた無味無臭の液剤だった。これは非常に致死性が高いもので、一口飲めば確実に二十四時間以内に死に至る。解毒剤もない。助かる方法は、服毒してからいかに早く胃洗浄を行うかどうかによる。塚本宅のワインセラーより、直径一ミリ以下の小さな穴の開いたワインコルクが発見された。そして、食卓に並べられたワインの瓶、床に散乱したワインより、液剤が滴出された。毒物は恐らく注射器を使い、瓶の状態のワインへと混入されたものと思われる。毒物はいつ、誰の手で混入されたのか。この事件の解決の手がかりはそこに つきる。我々は塚本の屋敷を隅から隅まで調べた。しかし、そこから注射器のようなものを発見することは出来なかった。よって外部犯の線が強い。当時の捜査本部はその方針で捜査を始めた」

「……もしも」

俺は、とんでもないことを口にしようとしていた。

「ん？」

「……いえ、なんでもないです」

「もしも、子供たちが毒物を混入したとされる注射器をもって逃げたら、かね？」

はっ、と顔を上げる。

「安心したまえ、その線は薄い」

中野刑事はタバコを咥えながら。

「凶器となる毒物についての補足となるが、除草剤の液剤、毒物混入事件は昔にも起こっていてね、すでに市販はされておらず入手は困難だ。たまたま塚本の屋敷にあるか、とも考えたが発見はされなかった。最近ではそうした危険物や薬剤のインターネット上の取引も非常に厳しい規制がかかっている。つまり、子供たちがそれを手にすることは難しいんだ」

「……そうですよね」

安堵と共に、どうしようもない自己嫌悪に襲われる。

……俺はどうして、佳織が犯人だと疑うようなことを言ってしまったのだろうか。

「そのワインを運んだ業者も調べようとしたが、ワインは非常に古いものでね。塚本宅に納品されたのは十年も前だということが判明した。我々は途方にくれるしかなかった。被害者への動機を持つものは、それこそ八十万人以上。その後、御座市の警察機関は針木市へと組み込まれて捜査は継続して行われたものの、大した進展もない。この案件は、至上最悪の毒殺事件でありながら、上層部に匙を投げられたものなんだ」

「……」

毒物混入の期間は、それこそ十年間。容疑者はその十年の間に塚本宅に足を運んだ全てのもの。ブラック・マンデーにより、塚本宅に火がつけれ、御座市は放射能汚染の為立ち入り禁止。

もはや匙を投げるしかなかったのだろう。

この事件だけではない。

あの日見た、常軌を逸する殺人光景のほとんどは闇の中へと葬られてしまったのだろう。

「……栄治くん、私はね、別に自分が街に住む全ての住民の安全と生活を守ることができるだとか、そんな大それた事を考えてるわけ

じゃないんだ」

中野刑事は、タバコに火をつけないまま、机の上で両手を組んでいた。

「だが、あそこまで無力だとも思ってた……。刑事としての自信も、プライドも、全てが濁流に飲まれるように、私の目の前で社会が崩壊したんだ。弱き者を法の秩序により守る。法の秩序を上手く施行させる為に我々が正義となる。……認めたくはないがね、あの日、我々の正義は弱き者を守ることが出来ない、何の意味もないものだっただ……。」

組んだ両手は、震えていた。

それは雄弁に、この人の無念を語っている。

それは、底無しの無力感――。

守ろうとしたその全てが、手の平から落ちていくこと。

「……中野さん。俺には家族が出来たんです」

「えっ？」

「その家族は今、中野さんたち警察官の守る治安の下で平穩に生きることが出来ています」

彼にとつては、慰めになどならないかもしれないけど。

「それはけして、無力なんかじゃないと思います」

中野刑事は目を閉じて。

「……ありがとう」

小さく、そう呟いた。

「すまない、こんな愚痴をこぼすはずじゃなかったんだ。私も年だな」

そう言って、力なく笑う。

「家族か……。それは……。絶対に手放してはいけないよ？」

掠れたか細い声で。

十年前と違い、明らかに疲弊の色が強くなっていた。

だが、視線の強さは以前と変わらない。

この人の中で、正義を思う心は未だ消えてないのだと思った。

気がつけば夕暮れ。

オレンジ色の日差しが窓から差し込んでいた。

「もう、こんな時間ですか」

「そうだね……、今日はこのくらいにしておこうか」

「すみません、お忙しい中わざわざありがとうございます」

礼をして、立ち去ろうとした。

「栄治くん——」

止められる。

「はい？」

「……もう、いいんじゃないのかな？」

それは、諦めの言葉で。

「記憶が戻ればいい、と言った私が言うのもおかしい話だが。私は個人的に今のままでも十分じゃないかって思うことがある」

肩に手が置かれる。

こんなに小さな手だったのだろうか。

身長も、いつの間にか俺のほうが高くなっていた。

「君にも、家族が出来た。一緒に歩いていく仲間が出来た。今の君は、あの頃とは違って、本当に楽しそうじゃないか。……時間は、無限のように見えて、本当に短い。本当に貴重な時間だ。こうして過去のことで時間を浪費するよりも、一つでも多く、楽しいことをした方がいいんじゃないかって、私はそう思うんだ」

「……」

「だから、困ったことがあれば私に言ってくれ。これは、君のすべきことじゃない。君たちの平穏を守るのは、私たち警察の務めだ」

「はい」

小さいのに、どうしてこうも大きいのだろうか。

たまに思うことがある。俺にとっての父親と言っ存在は、この人のことじゃないかって。

記憶7 中野 ― 昴栄治

針木学園の入学日のことだ。

「かつたりい」

初日から慶介はだるそうにしていた。

玄関から正門までの並木道を、桜の花が彩っていた頃。

「経過次第だけど、来年からはのぞみもこの学校に通うことになるよ」

「まあ最初はどうなるかと思ったけど、案外すんなりと入学出来るもんだなあ」

慶介に話してみると。

「ブラック・マンデーの関係で、学校に通えなかったヤツも山ほどいる。まあ、その関係上、市が教育機関に働きかけているんだろくな」

校門に向かっていくと、なんだかざわざわとした空気が伝わってくる。

「……おいおい」

校門の前に、白と黒の車体に物々しい赤いランプをつけたパトカーが横付けされていた。

「何かあったのかな？」

久が呟く。

パトカーの窓が開き。

「やあ、栄治くん。久しぶりだね」

「……中野刑事」

助手席から顔を出したのは中野刑事だった。

「……栄治、貴様、何をやりやがった」

「いや、知り合いなんだよ」

周りがざわざわとしていた。

「オイ、あそこの厳ついヤツ、初日から警察の厄介になってるぞ、

何者だ？」

「三組の昴ってやつだよ。おっかねえな、よく入学が許されたな…

…」

よろしくない噂が流れ始めたようだ。

「……あの、中野さん。非常に目立つ車でどうされたのでしょうか？」

「いやいや、君が無事学校に通うことになったと神父様から聞いてね」

中野刑事は片手を上げる。

「栄治くん、入学おめでとう」

「……それだけの為に？」

「パトロールをさぼる口実だよ」

そう言って笑う中野刑事の顔を思い出した。

呪い ― 昂栄治

問題は、何も解決していない。

でもいくらか気分は軽くなった。

中野刑事は、本当に父親のような人だ。話すだけで心のもやが取れていく。

不思議なものだ。

久のように、父親となった人と上手くいかないこともあれば、俺みたいに父親でもない人が親身になってくれることもある。

「……栄治」

そんな浮ついた心に楔を打ち込むかのように――。

鋭利な言葉が俺を呼び止める。

「佳織？」

目の前には、夕日を背にして塚本佳織が立っていた。陰になった顔からは、表情を読み取することは出来ない。

「……」

佳織が何かを口にしたが、よく聞き取れなかった。

「なに？ 聞こえにくいんだけど」

「警察で、何してんの？」

一瞬、息をすることも忘れた――。

違う人間かと思えた。

影の中で瞳だけが、爛々と輝く。

「……何のこと？」

「白々しいんだよ、嘘が相変わらず下手だよな」

嘲笑する。唇が、醜く歪んだ。

「あの中野って刑事、あの時の刑事だよな？」

塚本一家毒殺事件――。

「それは……」

「今さら蒸し返すつもりかよ」

佳織は冷たく言い放つ。

「それは、重大なルール違反だろ？」

そう——、それは暗黙の了解にかかる。

額から冷たいものが流れ落ちた。

「昔のことだから無効だとか、まさかそんな甘いこと考えてないよな？」

「違う……」

「へえ……」

一歩ずつ、佳織は歩を進める。

「裏切り者がどうなるか……よく分かってないみたいだな。裏切りは怖いぞ……お前が裏切った全てのものがお前に対して憎悪を持つ」

「あつ……」

「裏切られて、悲しい。裏切られて、憎い。恨めしい——」
吐息がかかる距離。

「殺したくなる——」

瞳孔が、開いた——。

「あああああああつ——！」

佳織を、押しのけた。彼女はそのまま地面に尻餅をつく。

「あつ……ご、ごめん」

手を差し伸べようとしたが……。

「悪いことは言わねえ……止めとけよ」

ゆらりと、その手を無視して佳織は立ち上がる。

そして、横をすり抜けていく。

「……ダメなのか？」

問いかけた。

「当事者の俺も……踏み込んだらダメか？」

佳織の足がぴたり、と止まる。

「……」

背中合わせの無言、そして——。

「ああ、ダメだろ」

彼女は静かに否定した。

「お前が、お前じゃいられなくなるぞ——」
佳織は去った。

——俺が、俺じゃいられなくなる。

言葉の意味が分からない。

それは、何を示唆する言葉だったのか。

だが、その言葉だけが呪いのように何度も頭の中で響いた——。

エヴァ 8 ―幕間

樂園を失った少女の話をしよう。
名をエヴァという――。

失樂園とは、神話の時代にアダムとイブが樂園を追われた物語である。

彼らは、けして食べてはいけないと言われていた木の実を食べてしまった。

ではエヴァもまた、知恵の実を食ってしまったのだろうか。

幼き過ちに、羞恥を覚えたのだろうか。

ノーである。

彼女は禁じられた実を食したわけでもなければ、羞恥を覚えたわけでもない。

だが、彼女は失った。

たった二人の世界の住民となり損ねた彼女は、無明の空間の中、自らもまたその一部となろうとしていた。

そこに、言葉が発せられる。

――光あれ。

こんにちわ、眠り姫。

眠ることも許されない意識の淵でたゆたい続ける、無垢へと帰る少女。

だが、君はまだ見足りない。

それゆえに、満たされない。

さて、無垢という概念の話をしよう。

仏教の概念においては、煩悩がないということ。

そこに欲望はなく、執着はない。

だから愛情はなく、憎悪もない。

染みのない真っ白なシーツのように、純粹であるということ。

それ故に、君に全ての固定概念は通用しない。

道徳も、神の教えも、法律も、そこから派生する暗黙の了解も、全てが君には通用しない。

傷害も、殺人も、略奪も、強姦も——、君の中ではただの事象でしかない。

そこにはそれ以上もそれ以下もない。

赤子を撫でる母親の行為も、首を絞めながら児童を犯す死体愛好者の行為も、等しく同じものだ。

それ故に、全く混じりものがないということは、禁忌でもある。

それ故に、君は見足りない。

君の人生は、これまで半身への愛情という不純物で構成されていたのだから。

それ故に、満たされることはない。

人間の欲望には際限がないからだ。

街を手に入れば、隣の街が欲しくなる。国が欲しくなる。世界が欲しくなる。

歴史が略奪を正当化している。

その行為自体を否定するくせに、発展と栄光という言葉に覆い隠せば、それは名誉ある殺戮行為となる。

故に、君が満たされることなどなかった。

過去、君は自由を欲した。

籠の中に繋がれた、凶暴な獣の夢見る自由だ。

君がもしも、束縛のない世界を歩き回る自由を手に入れたとしよう。

次に君は、広大な大地において、自分の居場所がないことに気づく。

君は自分の居場所のために、誰かの自由を蹂躪する。

誰かは、喜んで自らの居場所を分け与えるかもしれない。誰かは奪われそうな自分の居場所を守ろうとするかもしれない。

しかしそのどちらとて、奪われる側の心境は問題ではない。

君は略奪する。自らの意志で、自らの居場所の為、略奪する。

居場所の出来た君が次にすることは、領土の拡大だ。

もしくは自らの領土の安全のために、他者の領土に干渉するかもしれない。

君は死ぬまでそれを繰り返すだろう。

それが善か悪か、などとは些細なことだ。

ただ、君はそうやって渴きを永遠に満たそうとし続けるということだ。

それが良いか悪いかも、問題ではない。

始めに言ったことだ。

その過程における略奪も殺人も強姦も、等しく事象に過ぎないのだと。

君は無垢へと帰る。

全ての執着も失われる。

それ故に、生に価値はなくなり、死に価値はなくなり、結果として生きながらえることになる。

世界を傍観し、朽ちていくだけの存在。

……そんなものは、けして存在しないというのに。

君は存在しないものに帰ろうとしている。

ならば君は一体どのような存在になるというのか。

無垢を目指した少女は、一体何になることが出来るのか。

僕は、非常に興味深い――。

光の代わり発されたのは言葉の洪水。

意識の中、介入してくる、途切れることなく思考されていく誰かの心。

再び、エヴァの中で、自己と他者が区別されていく。

心が温かくなっていくのが分かる。

三十六度の体温を取り戻すような感覚。

この感覚を、彼女は知っている。
この感覚を、彼女は知っている――。

――吐き気がするような感情と共に。

「少女は、深い絶望の底から目を覚ました――執着を失い、大切なものが無価値となり粉々にすり潰された。その極限状態において、彼女は『無垢』という概念に限りなく近い」

「無垢、ですか……？」

廣田が問いかける。

「世の中には、あまりにも善悪が溢れていると思わないか？ 宗教、道徳、法律、規則、主観的概念。無意識のうちに我々は余りにも多くの概念を刷り込まれ続けている。傷付けられ、痛みを恐れ、数々の価値観が形成されてきた」

「……人間ならば、当たり前のことでしょう」

「模範的な回答だ。素晴らしい、百点だ。そう、当たり前のことだ。そもそも人は衝動により稼動するように設計された生き物だ。だが、無垢とは執着の喪失を意味する。すなわち、衝動も喪失すること。全ての事象は同列に無意味、派生する全ての概念は同列に無価値、つまり、無垢の前ではどのような慈愛溢れる行為も残虐極まりない行為も等しく同じ行為となる」

「……」

「私はそれ故に思う。この世に絶対悪というものが存在するのなら、それに最も近いのが無垢という概念ではないか、とな」

廣田は、理解ができない、という表情を浮かべるが。

「その通りです」

少年は答える。

「人は意味のあることしか認めない。動機付けが出来ない物を悪とする。貴方が昔彼女に教えたように、人を害する恐れのある野良犬が保健所で処分されるように、理由を持たない行為を人々は忌み嫌

う。それ故に、無垢は絶対悪です。無垢とは、全てにおいて無意味、無価値である証明なのですから」

「……彼女は、それに近い、と？」

恐る恐る、廣田は尋ねる。

「どうだ、ウエイ？」

塚本泰三は、少年に質問を振る。

「……彼女が何者になるのか、僕には分かりません」

「ほお」

「意識とは他者がいる故に成り立ちます。他者が存在する故に自我が成り立ちます。ならば、自我が成り立つ時点で無垢という概念は否定されます。その質問は、彼女がどのような大人になりますか、というのと同じこと。僕には答えられません——」

「……」

「非常に、興味深いです——」

少年はそう呟くと、糸が切れたように倒れた。

崩壊序曲 ― 昴栄治

幸せな日常。

それが、幸せだった日常に変わる。

俺の、宝物。

宝物だったものに変わる。

『その密約を叶えるためには、彼女たちの執着する何かに、僕達が取って代わらなければならぬ。家族に代わる、新しい絆として』
それらから心を守る手段はあるのだろうか。

『それが、なんだか最近出来そうな気がするって、そんな期待をしましうんだ……』

それが罪であるかのように、親友は言った。

沙耶久は、知っていたのだろう。

確信に近い予感として、未来を予測していた。

俺たちは心を守る手段も分からぬまま、その濁流を迎え入れた。

――日常の崩壊は始まる。

「……なんだよ、コレ」

日常の終わりを告げたのは、あまりにも幼稚で悪意に満ちた落書きだった。

「援交学園、ウリ女」

壁一面に描かれた落書きの一文を、佳織は淡々と読み上げる。

「……知性の欠片もねえ」

吐き捨てるように。

彼女に驚きの表情はなかった。まるで予測の範囲内の出来事であるかのように。

「気に、ならないのか？」

「……何が」

佳織は億劫そうに答える。

「誰が、こんなことを……」

佳織が目を細める。

「お前……」

低い声で。

「なんでそんなに過剰な反応なんだ？」

まずい反応だったのだろうか？

「好奇心よりも、この事態にひどく落胆してるようなさ。お前はそんな正義感溢れるヤツだったか？ それとも、犯人に心当たりでもあるのか？」

その言葉に思い描いたのは、先日の爬虫類を思わせる少年。

——桜井。

「……おいおい、ビンゴかよ。お前も桜井と会ったのかよ」

「えっ——」

不意をつかれた。

襟首を掴まれて、乱暴に壁に叩きつけられる。

「ぐっ——」

後頭部を強かに打って、視界にチカチカと星が飛んだ。

「栄治答える——、あのクズ野郎はお前になんつつた？」

「く、苦しい——」

気管が押さえつけられて、呼吸が苦しくなる。

突然……どうして？

おかしい、最近の佳織はおかし過ぎる。

なぜ、こんなに佳織のほうこそ過剰に反応する？

「どんな危害を加えてきた？ 答える」

「……な、んで」

辛うじて言葉を紡ぎだす。

「なんで？ 何に対する？」

「桜井って……一体誰なんだよ……どうしてお前、そんなに気にしてんだよ……」

はっ、としたように、佳織は手を離す。

「チッ——」

そして舌打ちをする。

この感情の発露は、彼女にとって大きなミスだったのかもしれない。

「忘れる……」

「なんだよ、それ」

非難めいた言葉を口にしかけるが、考え直す。

——もしもこれが、暗黙の了解にかかることだとするならば？

異常なほどに暗黙の了解を遵守しようとする彼女が、口を開くことはあるのだろうか。

「犯人は、桜井ってヤツなのか……？」

彼女は歩を進めて離れていく。

答えはない。

だが、恐らくは間違いない。

彼女は『桜井』という単語を口にした。

ならば、桜井という人間のことを彼女から聞けないのであれば――
|。

彼女のあとを追い、校門をくぐる。

しかし、向かったのは彼女と同じ教室ではない。

校庭には何やら画像が印刷されたビラがばら撒かれている。

ビラにも同じ言葉、「援交学園」という文字。

そして、目的の人物を見つけた。

「……久」

こちらを振り返った久は、驚いた様子で。

「栄治、どうしたの？」

だが、すぐに平静を取り戻す。

「随分と……焦ってるような、恐い顔だよ」

「桜井という奴を、知っているか？」

単刀直入に尋ねる。

「……………」

「アイツは、一体なんなんだ。久の名前を口にしたアイツは……………」

「栄治……………どこで奴を？」

「飛び込み自殺事件——、その現場にヤツはいた。……………そこでヤツは、『塚本佳織じゃなくて、どうして俺がいる』と……………？」

突然両肩を掴まれた。

「他には——？」

どこか鬼気迫るような、普段の沙耶久からは考えられない表情で。

「アイツは、どうして佳織をつけ狙っている？」

「ちょ……………久、どうしたんだよ」

「あつ……………」

突然久は、頭を押さえる。

「うるさい……………、うるさい……………黙ってくれ」

うわ言のように呟き始める。

「お、おい、久。大丈夫か」

「栄治……………話は、昼休みに必ずする。だから……………」

ふらふらとした足取りで立ち上がる。

「だ、大丈夫なのかよ？」

「……………大丈夫だよ」

そうとは思えない足取り。

佳織、そして久——。

必然的に桜井という人物は、一つの事件へと連想されていく。

「……………ブラック・マンデー」

去っていく久の背中を見つめながら、その言葉を呟いた。

心の暗部 ― 昴栄治

そして昼休み。

食堂で、のぞみをのぞく六人が集まった。

それは、のぞみの暗黙の了解を端的に説明したものだった。援助交際を見せかけた恐喝、麻薬の強要と販売。それをのぞみが中心で行っていたという事実。淡々と、感情を殺したように久の口から語られる。

「自殺した人もいる――」

それはショックだった。七人の仲間たち、家族に代わる新しい絆。その一人であるのぞみが、他人を自殺に追い込んだという事実。

膝の上に置いた手を強く握る。力を込めないと、震えてしまいそうだった。

ああ……、なんて覚悟が足りないのだろうか。

――暗黙の了解に踏み込むということは、こういうことじゃないか。だからこそ、初めて教会に引き取られた日、久はそう提案したはずじゃないのか。

だが、佳織の反応は俺と異なるものだった。

「――のぞみんの昔の悪事なんてどうでもいいんだよ」

はつきりと、そう宣言した。桜井を許さない、攻撃する、と。

その顔は、目に映る全ての大人を拒絶していたあの頃のように、大人に従うくらいなら殺人を犯しても生きると南さんに宣言した彼女を思い出した。

慶介も同じく、日常に紛れ込んだ桜井という異物を取り除こうと言う。

しかし、久は反対。下手に出れば相手の思う壺だと言う。

そして、悠希は三人に反して、冷めた態度だった。いつも通りの彼女と言えるワケだが、いつも通りということが、ここでは明らかに浮いていた。

——暗黙の了解、仲間の過去には深く関わらないこと。

しかしそれは、見捨てるということではない。

矛盾しているようだが、仲間の過去に踏み込まないレベルで助けることは許されている、と慶介と佳織は考えているのだろう。

だが、悠希の意見はそれすらも拒絶している。『助けてください』と過去を懺悔し、手を伸ばしてくるまで彼女から手を差し伸べることはない。

彼女の発言が場に異質な空気を混ぜ込んだ。ぎすぎすと、これは、非常に良くない空気だ。

だが、いつもなら場を収めるはずの日向から、決定的な言葉が発せられる。

「……潮時なのかもね」

——耳を疑った。それが本気だと理解できなかった。冗談としか理解できなかった。

だが、彼女ののつぺりとした表情と、こんな場で高辻日向が冗談を言うだろうか、という状況証拠が、それが冗談だということを許してくれない。

「暗黙の了解……、他人の分まで背負うには重すぎるのよ」

待つて欲しい——、何を馬鹿なことを言ってるんだ。

その言葉の意味が分かっているのか？

『保身』の為に仲間を見殺しにするのは当たり前のことだ、と。

お前は今そう言ったんだぞ？

……それは。

——アイツが悪い、高辻を殺せ、と炎の中で叫んでいた獣たちの
光景。

……それを、許容すると言うことは——。

——自分に責がないと言葉を発して、他人を殺すことを許容した
世界。

ブラック・マンデーを許容すると、そういわれた気がした。
だったら……。

「佳織っ——」

慶介が叫び、日向との間に割って入る。

慶介の言葉に、日向は俯く。

急激に、熱くなった頭がクールダウンしていく。

だが——。

いくらか、冷静になった時、背筋が冷たくなるのを感じた。

——今、俺は日向に対して何を考えた？

『だったら……』

だったら？ 何に對して？

——日向が、自己の保身の為に俺たちの誰かを、もしくはその全員を裏切る行為を行った時。

『だったら……コイツはいらない——』

頬を汗が伝っていく。

恐かった……。

自分の中に、何か得体の知れないものが眠っているような気がして、それが怖ろしかった。

慶介と日向が言い争っている。

久が口を挟み、佳織が日向を糾弾する。

悪くなった空気を慶介がうやむやにしようとする。

はっ、とした。

馬鹿なことを考えている場合じゃない。

俺に出来ることは少ない。

——俺は俺を演じることで、みんなに平穏な毎日を認識してもらうことしか出来ない。

「……肉便器か」

だから俺は、必死に道化師を演じ続けるしかない。
だから、願う。

神さまでも、仏様でも、悪魔でも何でもいい。
どうか、どうか——平穏な日常を。

桜井要という男の話を考えてみた。

桜井はのぞみと共に麻薬の売買を、唐風組という暴力団を介せずに行っていた。のぞみのかつての仲間。唐風組という暴力団は、針木電力の代表取締役、つまり久と悠希の父親と密接に関わりあっており、久にとある指示が出された。

——春賀のぞみの犯罪を警察に通報し、現行犯で抑えさせろ、と久は命令に反して、桜井だけをブタ箱へとぶち込んだ。

そして桜井は出所して、組織に属し、久とのぞみへ復讐を果たす。久がどうしてのぞみを助けたか、それはこの際置いておく。のぞみの犯行への動機もいだろう。

疑問点は二つだ。

唐風組という組織はこの針木市一帯で絶対的な暴力団らしい。なぜか俺も街を歩いていると一度、「君、唐風に入ってみない？」とグラサンをかけた厳しい小父様がたの熱烈なラブコールを受けたことがある。……まあ、それはどうでもいいことだが。そんな絶対的な暴力団が身柄を狙う少年を、一体どこの組織が引き取るというのだろうか。下手すれば組織ごと潰されるかもしれないというのに。

そして、二つ目。

なぜ桜井要は、塚本佳織だけに接触をしたのか——。

もしかしたら俺の知らない間に慶介や日向も接触しているのかもしれない。

だが桜井は、ある言葉を口にした。

『塚本泰三からは逃げられない——』

——塚本泰三。

御座市の塚本一族のトップにいた男らしい。

塚本佳織と塚本泰三——。

父と、娘？

……出来の悪いミステリー小説じゃあるまいし。

だが、一体塚本泰三とは何者なのか。

桜井を匿った組織とは、一体何の関連があるのか。

俺の足は、再び針木警察署へと向いていた。

「裏切り者がどうなるか……よく分かってないみたいだな。裏切りは恐いぞ……お前が裏切った全てのものがお前に対して憎悪を持つ――」

彼女は、俺に警告をした。

こんなことを警察に相談するのは、佳織に対する裏切りなのかもしれない。

だけど、俺に相談できる相手は中野刑事しかない。

「塚本泰三、かね？」

針木警察署のロビーで、再び対峙した中野刑事は首を傾げる。

「……話を戻そうか。君は深夜に飛び込み自殺の起きた針木駅に行った。そこで桜井要という人物と出会った。その人物は君に危害を加えた後、佳織ちゃんに伝言を残した。その内容が、『塚本泰三からは逃れられない』かね――」

「はい、間違いないです」

「うーむ……塚本泰三からは逃れられない、ねえ」

中野刑事は首を傾げる。何か気になることがあるのだろうか。

「何か、キナ臭い気はするねえ」

「キナ臭い、ですか？ その塚本泰三という人間がですか？」

「んー……、そうだね。気になるというかね、塚本泰三という人間なんだが、彼はもう鬼籍に入った人間でねえ……」

「えっ……？」

「彼は、塚本一族毒殺事件の被害者なんだよ」

つまり、桜井要が言ったことは……死んだ人間からは逃れられな

い、ということだろうか。

「だから、逃げられない、という表現がどうにも気にかかる。これはまるで……」

中野刑事の呟きにはつとなる。

そう、それはこういう捉え方も出来るじゃないか……。

——塚本佳織が、塚本泰三を殺した。

——だから、彼女は塚本泰三の縁者に追われている、ということ。

「違う……」

自分が発した声なのに、滑稽なくらいに震えている。

ああ……、唇が震えているからだ。

「栄治くん……」

喉がひゅーひゅーと鳴っている気がする。

ああ、上手く呼吸が出来ていないんだ。

立っていられなくなる。

「栄治くん——、落ち着いて」

中野刑事に両肩を支えられる。

「落ち着くん。安心なさい……君の考えていることは不可能なんだ。屋敷にずっと閉じ込められていた佳織ちゃんには毒物を手に入れる機会がなかった」

「……えっ？」

それは、どういうことですか？

質問は、言葉にならなかった。

「これは、事件が起こる前に屋敷に出入りしていた家政婦から聞いた情報だが、塚本佳織という少女は、塚本泰三の養子だった。そして彼女は——拷問部屋のような悪趣味な地下室に監禁されていたらしい。……言にくいことだが、金持ちたちの醜悪な趣味のペットのような存在。それが、彼女だった。塚本の屋敷跡からも、証言されたスペースが発見されている。もっとも、焼け落ちて原型すら留めていない状況だったがね」

「証言者……いるんですか？」

「ああ、そうだが。だが、事件が起こる三ヶ月前に退職している――」

「教えてください――！」

光が見えた気がした。

過去の塚本佳織を知る人物――。

養子、ペット――。何をワケの分からない単語ばかり並べている！
ワケが分からない！

一体、塚本佳織とは何者なんだ！

「教えてください、その人はどこに！」

中野刑事に襟に掴みかかる。

「栄治くん、ちょっと……」

「頼むから！　お願いします！」

「栄治くん、冷静にならないか！」

手首に激痛が走る。

「ぐっ――」

万力のような握力。

血液の循環が止められて、掴まれた先が痺れてくる。

「一体……どうしたというんだ？　何て目をしている。まるで……人を殺しかねないような、今の君はそんな酷い目をしているぞ」

「……分かるですよ、なぜか俺には分かる」

胸の中に渦巻く何かを、言葉にして吐き出してみた。

不思議なくらいにしっくりとくる。

「――危険な人間、危害を加えるかもしれない人間。何かが起こるような予感。何かは分からないけれど、確実に皆がバラバラになる予感……」

自分でも、一体何を言っているのか分からない。

襟首を離すと同時に、中野刑事も俺の手を解放する。

「……今日はもう帰りなさい。君は随分とナーバスになっている。何なら、送っていくが」

「……」

この感情は、なんだ？

全然コントロールが出来ていない。

まるで黒い血液が全身を回っているかのように、ドス黒い感情が身体を熱し、思考を麻痺させていく。

止める――。

考えるな、そんなことを考えるな！

――卵の殻が割れて、中から雛鳥が這い出ようとしている。

彼に……なぜ彼にそんな感情を抱く！

――肉が腐れ、眼球が頭蓋から垂れ落ち、翼は骨の枠組みだけ。

父親だって……そう思ってたじゃないか！　なのに！

――そいつは腐臭を撒き散らし、俺の感情をばりばりと音を立てて噛み砕く。

中野刑事は、自覚はないが一つずつパズルのピースを埋めてしまっている。

そのピースが全て埋まったならば、警察は敵になる。
もしも中野刑事が敵になれば――。

「うわあああああああああつっつ――！」
叫んだ。

喉が擦り切れそうなくらいに、声を張り上げた。

「栄治くん――」

中野刑事の制止の声も聞かず、駆け出した。

逃げるように、必死に、全力で駆け出していた。

卵の殻の中にいたのは誰だ？

卵の殻の中にいたのは何だ？

その身は腐れ落ちて、醜えた臭いを漂わせる。

俺の意志を強制的に上書きして、俺の首は腐り落ちる。

そうして頭がすぐ替わる。

すぐ替わる、俺の頭――。

それはやはり、俺自身で……他の何者でもない――。

……おかしい。

何だよ、何なんだこの妄想は！

こんな妄想を俺は望んでいない！

『――お前が、お前じゃいられなくなる』

うるさいよ！

俺が、俺じゃなくて、一体じゃあ何者になるっていうんだよ！
狂っている！

こんな世界、おかしいじゃないか！

「あつ――」

そう、何もかもがおかしくなっていく。

――世界が逆さまに見える。

針木市のメインストリート。

空に聳えるビル群。

街を歩く人々。

道路標識と信号。

コンクリートに覆われた地面。

どれもこれもものつぺりとした黒い影に覆われている。

陽が作り出す影があるべき場所に人々はある。

地面をゆっくりと人々が這う。

俺一人がグロテスクな影の世界に取り残されてしまった。

人々は楽園へと向かう。

ノアの箱舟に取り残されて、俺は終焉を迎えようとしている。

ゾクゾクと背中を這い回る蟲のようなおぞましい寒気。

歯がカタカタと鳴る。

分かってる。感覚が告げる。

これは俺が作り出した世界の抽象画。

ピカソのゲルニカだってこんなに悪趣味でのつぺりしてない。
芸術は美で表現するからこそその芸術。

悪夢だ。

醜いものを醜いままで受け入れさせられることは苦痛以外の何物でもない。

遠い。

さっきまでいた世界がとてつもなく遠い。

肌を隔てて接触しているはずの世界は一体何光年先の世界だ？

光は恐ろしいものだった。

影が広がっていくのは本当に恐ろしい。

最低の気分。

手首を切りたくなる。

不意にノイズが混じる。

それは、自分の携帯から発せられる着うた。

悠希が唯一分かると言った流行歌、白々しいほど渴いた明るいメロディ。

折りたたみ型の携帯電話を開く。

表示されたのは、普段なら着信があれば少し嬉しくなる名前。

でも、この世界では絶対に見たくない名前だった。

――、――。

――誰かが、××と呼んだ女。

――！

けたたましいクラクションの音が響いた。

我に帰る。

目の前を大型車両が通過した。

ふわりと、風圧で髪が乱れる。

地面を見ると、盲人用タイルを通り越して車道のギリギリまで歩いていたようだ。

立ち止まる俺を何人かの通行人がぶしつけな視線を送る。

「……おいおい、お前も連続自殺に乗っかるつもりかよ？」

その中でも、痛烈な悪意を帯びる一対の視線。

「桜井、要——」

「何呼び捨てにしてんだよ、ガタイだけの臆病なハリボテ野郎」

思えば——コイツが始まりだった。

コイツの言葉が、存在が、俺の日常の土台を崩し始めたはずだ——。

「どうだ？ 懇意の警察屋さんは何か教えてくれたか？」

「……付けてたのか？」

「馬鹿言え、野郎のストーキングするようなホモじゃねえ。……とは言え、テメエを探してた。本当に目立つのが好きな奴だな。警察署から全力ダッシュなんて相当目立ってたぞテメエ。おいしいやつだな、おい」

「……俺が目当てなのか？」

桜井はにやりと笑い、俺の顔を覗き込む。

「そう、喜べ——。オレとテメエの利害は一致したんだよ」

囁くように、そう告げた。

コイツは何かを知っている。

——コイツは、一体何を知っているというのか？

「佳織じゃなくて、俺に何の用だ……」

「ひやはははっ、声が上がってるぜ昂くんよお……。なあ、本当は分かってんじゃねえのか？」

「何を……」

まるで、心の闇を掴まれる様に。

そう、この男は人間の負の感情の集合体みたいな男だから、知っている。

人間心理を、弱さを、本能でよく知っている。

「期待してんだろ？ いいぜえ、確かに知りてえよなあ。女が必死に隠してるもんを暴きたくなるのは男の下種な欲望だからよお」

「お前……」

「勃起してくるじゃねえか。クククッ」

「お前は——！」

頭に血が上った絶妙のタイミングで、場違いの甲高い着信音が鳴り響く。

俺の携帯電話じゃない、ということとは。

「チッ——」

桜井は舌打ちをする。

着信音は、すぐに途切れた。

「遊び過ぎってなあ、畜生が。いいさ、テメエに真実ってヤツを教えてやる」

そう言っつて桜井は踵を返す。

「どこに行くつもりだよ」

桜井は一度振り返る。

「三日後に電話してやる。楽しみにしている、お前の知りたかったことが、全て明るみになる。お前も知ることになる。塚本佳織ってヤツをよお……」

罨——。

明らかにこの男は、俺たちに悪意を持っている。

そしてその悪意は今、俺に向けられている。

行くべきではない。

理性はそう告げる。

だが本能は喉の渴きを訴えるように、真実を知れと叫び続ける。平穏を守る為に、全てを燃やせと——。

……。

…… 一体、俺は——どうしてしまったのか？

夜の始まり ― 昴栄治

それから丁度三日、桜井からの連絡があった。
要件は短く告げられた。

「――一時間後に、針木駅に来い」
俺は部屋を飛び出して、針木駅へと向かった。

幸せな日常。

それが、幸せだった日常に変わる。

俺の宝物。

宝物だったものに変わる。

『その密約を叶えるためには、彼女たちの執着する何かに、僕達が取って代わらなければならぬ。家族に代わる、新しい絆として』

それらから心を守る手段はあるのだろうか。

『それが、なんだか最近出来そうな気がするって、そんな期待を失ってしまうんだ……』

それが罪であるかのように、親友は言った。

針木市中心街から三十分ほど歩いた場所にある、高級住宅街。――際高い高層ビル、針木パレスが三棟立ち並び、三角形を描いている。
桜井は足を止めて。

「ほらよっ。受け取れよ、変態野郎」

そう言っつて、カードを投げる。

「……これは？」

桜井は顎で指し示す。

その先に、ガラス張りのエレベーター。

「……佳織」

登っていくエレベーターの中に佳織はいた。
これは一体、どうということなのか？

「……なあ、昂よ。お前の知りたかった真実ってやつが、これから起る」

「……何、を」

「行けよ、行つて聞かせてくれよ」

桜井は嗜虐の快楽に満ちた笑みで。

「頼むから……いい声で鳴いてくれよ……ひやはははっ——」

不愉快の声を背に、佳織のいた棟へと駆け出した。

全てが、桜井の思うままに動いているような不快感——。

その胸やけをかき消すようにマンションへと入った俺に、奴の独り言は聞こえなかった。

「——ところでよお、昂栄治クンよお……。その真実を知ったとしたら、オマエどうするつもりだ？」

『それが、なんだか最近出来そうな気がするって、そんな期待を失ってしまうんだ……』

それが罪であるかのように、親友は言った。

沙耶久は、知っていたのだろう。

確信に近い予感として、未来を予測していた。

どうしてかは分からない。

親友は、この光景もまた予測していたのだろうか。

——日常の崩壊は始まった

中野 前編

一つ一つの事件を見てみれば、どれもまぎれのない自殺事件。普通と異なるのは、その死に方が派手なことくらいだ。

しかし、と中野刑事は考える。

それが群となれば話は別だ。偶然に同時期、何人もの人間が死を考えて、出来うる限り派手に死のうと思った、などと考えるほど老いばれてはいない。

偶然と言つ言葉が当てはまるのは二度目まで。

三度目からは全てを作為として疑え。

それは刑事でなくとも、大人ならば誰もが知っていることだろう。そもそも二度目ですら、偶然で片付けるのは愚ではないかと彼は考えるほどである。

なのに、この事件は何だ。連続自殺事件と世間に騒がれる事件。

そう、昴栄治にも話したように、自殺としか見解できない死に方。一人部屋で首を吊るならば殺害の可能性が持てる。密室ならば何かしらのトリックを疑える。――だが、針木駅の飛び込み自殺、セントラル街の焼身自殺は大衆の目撃の下で行われた。ふらふらとした足取りの男が、そのまま電車へと飛び込んだ。突然男が自らの身体にガソリンを浴びせて、ライターで火をつけた。

洗脳？ 宗教？ そもそもそれらは、死に追いやるほどの効果を発揮するのだろうか。

複数人の自殺が、近接した時間・場所、類似した手段にて行われるものは確かにある。例えば、著名人が自殺したり、奇異な自殺や凄惨な自殺を遂げ、それがメディアを通して「特別な意味合い」を持つてしまった場合、それを模倣する自殺者が現れることがあり、この現象をウエルテル効果と呼ぶ。特徴は、その手段もさることながら、経済的・社会的な背景がなく、さらに言えば自殺に至る背景がなくても、模倣としての自殺をする者が現れることである。

人格者として考えずにいらなかった。いつからこんなにも命というものが安くなってしまったのだろうか、と。命の値段を勘定してもいいのは保険屋だけだ。それですら、金銭と失われた命が等価値なのではない。失われた命に対して、その金銭を持って自らを無理やり納得させる価値。いくら札束を積んだところで、失われたソレを買うことは誰にも叶わない。

そんなものがなぜ、ゴミのように簡単に捨てられなければならないのか。

なぜ自殺した？

誰かが自殺させた？

これを偶然の重なりだと納得しろ、とでも言うつもりなのか？

知らず知らずのうちに、握った拳が震えていた。

考える、他に共通点はなかったか？

……彼は自分でわかつている。

中野刑事は、事件に憤りながらも決定的な共通点を心のどこかで否定している。彼は疑わなければならない。疑うことで秩序を維持し、結果としてそれは人々の幸福につながるはずだ。

なのに、疑えない。——疑いたくない。

歳に似合わぬ、そんな青い感情に支配されている。

「——栄治くん」

ぼつりと、その名前を呟く。

昂栄治が中野刑事のことを『父』のように慕うのと同様に、彼もまた昂栄治のことを『息子』のように思っている。

ブラック・マンデーという未曾有の悲劇に巻き込まれ、それまでの幸福であつたであろう過去、記憶さえも奪われてしまった少年。幸せになつて欲しかった。

彼が幸せになれるような世界を、針木市という街を作つてあげたかつた。

自分に出来ることは治安の維持という一面しかなかったから、それだけが、彼の稼働させる大きな力となりえた。

中野はポケットの中に詰め込んだ金属を握り締める。

それは過去の自身の無力さの象徴。中野自らもまた、あの悲劇に巻き込まれた一人と言っても良いだろう。そしてそこに、中野が異常なまでに『他人の子供』である昴栄治に執着する理由もある。

「命は、けして軽くない——」
怨ずる様に呟いた。

中野刑事、——本名、中野誠。

中野誠は昴栄治に伝えていないことがある。

中野 後編

中野誠——、今年で丁度四十を迎えたベテラン刑事。

同期には警部、警視になった者も多いが、彼は一度昇格試験に落ちたきり、その後は受けようとしていない。彼はなぜか現場に執着すると、同僚たちは何度も噂した。その内容はいつも、同じ答えを迎える。

——職務に忙殺されていた方が、幸せなのかもしれない、と。

ブラック・マンデーが起こった時、針木署からも多くの人員が派遣された。自衛隊や州警察も合わせて千人単位の増員。しかしそれでも、混乱する住民、過激な市民団体のテロ事件、興奮の増埒と化した御座市を沈静するのは困難を極めた。

ブラック・マンデーの初期から派遣されていた中野は、家族を針木市に残したまま、長い時間を仕事に割いてきた。人々の安全を守るという誇りと使命感、けして口には出さないが、彼の行動は正しくそれを表していたと当時の同僚たちは語る。

初期は塚本一族毒殺事件の担当であったが、相次ぐテロ事件と御座市を抜けようとする難民たちの救助、人々が残された地区でも放射能汚染が酷いという見解もあり、事件の究明から住民たちの避難誘導へと職務は変更された。針木市においては電波障害、ジャマーのようなものがテロ団体により設置されており、陸続きでありながら、街は孤立していた。家族でさえ、中野の安否、連絡をとることも困難だった。

そうして昴栄治と塚本佳織の救出など、多くの命を助けてきた。それは疲労困憊の身体に鞭を打って続ける価値のある物だと彼は感じていた。充実していたのだ。誰かを助けると言う行為が、今の自分に図りきれない価値を与えてくれていると感じていた。

「辛くはないですか——？」

針木市の難民病棟で昴栄治がポツリと問いかけた質問。記憶も失い、故郷も失った少年。だが、命だけは救うことが出来た。針木市に残してきた娘と同じくらいの歳の少年。子供を助けられたということが、彼にまた満足感を与えた。

「家族と会えなくて、寂しくないですか――？」

――分かってくれるさ。

中野は、そう答えた。

隣の市で起きた凄惨な事件、ブラック・マンデー。多くの人が死に、さらに多くの人が心に深い傷跡を残した。それが、ある種の先入観を与える。数の比較による先入観。

――針木市は安全だ。死は御座市において起こりうる事柄。

……それは違う。死はどこにでも突然現れる。

二年が経っていた。ようやく、忙しい日々は終わり、中野は針木署に戻るようになった。彼はようやく、平穏な世界へと帰るはずだった。

だが、そこにあるはずの世界はなかった。

針木市の賃貸マンション、家族と住んでいた家はもぬけの殻だった。

ワケが分からなかった。分からぬまま、妻と子供の行方を追おうと妻の実家に電話をかけた。

そこで彼は、事実を知らされる。養父は震える声で、彼に事実を告げた。

――彼の妻は亡くなっていた。

彼が御座市へと出向してから一年後に、早期に汚染地区から非難した者が、針木市のスーパーマーケットにて強盗事件を起こした。犯人は放射能汚染により皮膚癌を患い、最早手のうち用がなかった男だった。金銭目的ではなく躁状態による愉快犯。精神的にもひどく不安定になっていたようで、売場より持ち出した包丁で従業員と客三人を殺傷した。

殺されたパート従業員の一人が彼の妻だった。当日は昼から夕方にかけてのシフトにて勤務しており、彼女が売場で商品整理を行っていたところ、台所用品の所で包丁を手にしてブツブツ独り言を呟いていた男を見つけた。明らかに異常な姿に気味が悪くなり、彼女は顔しかめ、急いでマネージャーに報告しようとその場を離れた。だが、その一連の動作を男は横目で眺めていた。そして、彼女が従業員専用の扉を開けようとしたところで、後ろから背中を三箇所刺された。救急車で病院に運び込まれたが、出血がひどく、その日の晩、彼女は死亡した。

その一連の通報、報告は針木署へと伝わっている。そして遺族への連絡として、御座市にいる中野にも伝えられるはずだった。しかし、人員不足から署員それぞれが普段の二倍もの業務に携わっており、その報告を御座市に向向した中野に伝えることが洩れた。お粗末な理由である。だが、忙殺されている職場においては、しばしば普段ならば起こさないようなミスが発生することもある。結果、妻の葬儀に中野が出席することはなく、一人残された中野の娘は妻の実家へと引き取られることとなった。

「君を責めても仕方がないことは分かっている……しかし——」

——どうして、娘と孫の側に居てくれなかった。

養父の言葉はナイフとなり、中野の心臓の深くへと突き刺された。知ることが出来なかったのか。休暇は本当に取れなかったのか。子供が小さいことを理由に出向を拒否する事だっただけ出来たはずだ。そんな、『どうしようもない、もしも』が中野の頭を埋め尽くしていく。

その晩急ぎで、針木市の郊外にある妻の実家へと向かった。中野を迎えたのは泣き崩れたのか、瞼の晴れ上がった養母と、目の下にクマの目立つ養父だった。彼らは言葉少なく中野を家の中へと招き、和室へと通す。リビングに隣接する和室には、香の香りが漂っていた。そこには、こぢんまりとした黒い仏壇が鎮座しており、その中央に記憶と違わぬ姿の妻の写真が祀られていた。

——冗談にしては、なんて悪質だろうか。

彼の隣ですすり泣く養母、その肩を震えながら支える養父。彼らを横にしながらまず思ったのは、そんな場違いなことだった。

ダンブに跳ねられたような衝撃に、感覚器が全て麻痺してしまう。妻の死という悲しみが、彼の心まで届かなかった。心の防衛機構が過剰なまでの麻薬を分泌し、彼は一切の痛みを一時的に感じられなくなる。

「……どうして、こんなことになった」

養父の呟く声もどこか遠い世界の出来事のように。

だが——耐えがたい痛みは、麻薬の効果が引くに従い牙を？く。

「……っ」

それはすぐにやってきた。

じくり、とそれは頭の中に染み渡ってくる。

「……あっ」

声が洩れた。

指先が小刻みに震え始める。

——これは、事実だ。

受け入れなければならぬ時がきた。

「……あああつつつ」

視界が滲み、口から涎が垂れる。呼吸がうまく出来ずに、発せられた悲鳴は、うまく音にならなかった。奇妙な濁音が混ざる音だけが、小さな部屋の中で聞こえた。

「嘘だ……」

言葉を発して否定しようとする。本当みたいな状況だけど、これは嘘だ。これは、現実に起きていることじゃない！ そんな根拠も確証もないことを心に信じさせようとした。

「誠くん……これは現実だ」

「さも本当であるかのように言わないでくれ——！」

「あの子は、もう帰ってこない……」

「そんなのは……嘘だ……」

アソコにいるアレ――。

アレは、妻じゃない。

そんな欺瞞は、けして長くは続かない。

襖を引く音が聞こえた。

目と口を拭うことも忘れて、彼は振り返る。

小さな人影。

ウサギのぬいぐるみの耳を掴んで引きずる姿。

真っ暗な、塗りつぶされたような感情なき双眸――。

「……」

――変わり果てた娘の姿だった。

「……」

家族に向ける憎悪を、彼は体験することになる。

「どうして、ママだったの？」

濁った目と、震える声。

「――パパが死ねばよかったのに」

「……止めなさい」

養父が娘を抱き、震えていた。

娘に向けられる殺意など、彼は知らなかった。

「――誠くん、分かっている。どうしようもなかったことだと……分

かっているが、帰ってくれ……」

娘を抱いたまま、養父は告げる。

「それでも私たちは……君を許せないんだ……」

――娘は一人、薄暗い病院の廊下で泣きながら祈り続けたいた。

――ママを助けて、と彼女は祈り続けていた。

――パパ、と。

――ママが自慢していたスーパーマン、私とママのヒーロー。

だが、その物語にヒーローは登場しなかった。

被害者が奪われて終わる、残酷な結末の物語。

だったら、ヒーローのせいにするしかない。

「どうして、助けてくれなかったの？」

その言葉に父親への期待はない。
憎しみを正当化する為の質問。

「——どうして、パパが代わりに死んでくれなかったの？」

——中野誠は、自ら親権を放棄した。

子供と妻の両親への負い目がなかったわけではなく、責任を放棄したわけでもない。

ただ、手遅れだったただけだ。

一年という時間は、中野への憎しみが凝り固まるのに十分な時間だった。

「……彼女は短い周期で躁と鬱の状態を繰り返しています。投薬による治療が続けていますが、恐らくは長期戦になるでしょうね」

娘は母親の死のショックにより、精神を患っていた。

娘の主治医は、残酷な言葉を告げる。

「……言にくいことですが、今は父親という存在が彼女にとってマイナスにしかならない状況です。なので……離れて暮らすことをお勧めします」

そうして、父親になり損ねた——。

それから、六年後。現在から数えて三年前。

忙しさにかまけて、全ての傷を忘れようとした彼の元に訃報が届く。

——園川恵。旧名、中野恵。

針木市セントラル街のクラブ『ピース』にて死体が発見される。
殴られた顔は腫れ上がり、歯は全て折れていた。だが性器の破損はそれ以上に激しく、血と精液に塗れ、犯された後に滅茶苦茶に刻まれて潰されたという見解。

死体からは、覚醒剤の反応が見られた。

どうせ、ロクな者にならない事は分かっていた。

精神疾患は病、気持ちの持ちようでなんとかなるものではない。傷ついた妻の両親に、壊れた娘を支えて生きていけるはずなどなかったのだ。

精神疾患を患った者が犯罪を起こしやすい、というわけではない。ただ、彼の娘の場合は、その原因が問題だったのだ。警察官という正義の味方であった父親が母親を助けずに娘を一年間も放置してしまった事実。そこから派生したのは――正義への疑問、すなわち、法律による秩序に対するアンチテーゼこそが彼の娘の原動力と成り得た。

ならば、これもまた仕方のなかったこと。娘の死を納得するしかなかった。

そう、この結果は仕方のないことだ。

「――だが、その原因は別の話だ。仕方がない、娘を助ける方法がなかった。それには関係なく、私は娘を『見殺し』にした――」

皮肉な話だが、この考え方は彼の娘を死に追いやった要因の一人、春賀のぞみの考え方と酷似している。これ以上無力ではいたくない、これ以上見殺しになどしたくない――。だが、方法は正反対だった。法や道徳といった社会のシステムに絶望し、それを放棄した春賀のぞみと、愚直に秩序の維持を追い求めることで幸福を得られると信じる中野誠――。

だが中野は、もしもの時はどうするつもりだろうか。

もしも、守りたいものが秩序を乱す存在だった時は――。

昴栄治の幸せを願うが為、この街の秩序を守ろうとする。この街の秩序を守るが故に、彼の大切な友人を疑わなければならない。

「だが……. 他にも『見殺し』にしてしまうのか……」
ポツリと呟いた。

そう、鍵は彼女が握っている。

――塚本佳織。

化物 ― 昴栄治

勢いよく駆け出したのは良いが、いきなり勢いを挫かれることになる。

何階建てか分からない、中が迷宮みたいなマンション。

全然わからないから、とりあえずエントランスで外から見えた、件のエレベーターへの行き方を尋ねたところ――奥のエレベーターを上がり五階に行つて、出て奥の通路を進み、Ｔ字路を左へ。そして、三番目のエレベーターを十二階まで進んでください。そして――

以下省略。

マンションの中歩くのにメモを取ったのは初めてだ。

詳しくはメモに全て書いてある。瞬間記憶術が欲しいと思った。

そして、件のエレベーターへと辿りつくが……。

「……いる訳ないだろうが」

どこに行つた？ まさか一階一階探し回るつもりか？ この広いマンションを？

「！」

ポケットが震えた。

「まさか！」

ご都合主義を期待して、携帯を開く。
だが、着信は登録されていない番号。

「……………」

普段なら無視していたかもしれない。

留守電残っているようなら聞いて、必要ならかけ直す。
そんなくらいだったはず。

なのに――。

「もしもし」

それが桜井要の罨だと分かっていたから。

「よう、昴栄治——エレベーターに乗ったようだな。そのエレベーター、外からよく目立つんだよ」

「桜井——、佳織はどこだ」

「慌てるなよ早漏、急がば回れってヤツだ」

次の瞬間に、エレベーターが縦に揺れる。

「なっ——！」

そして電気が消え、停止する。

「おいおい、停電かよ。電気保安協会は仕事してんのかねえ……ひやはははっ」

「何をした！」

「何でもいいんだよ。お前が知りたがったことだよ。塚本佳織に何があったか、過去に何が起こったか、残念ながら俺は知らねえし、興味もねえ。だがよお、その結果塚本佳織がどんな人間になっちまったか、それを教えてやることは出来るぜ」

「お前が佳織を語るな——！」

怒りに、頭が沸騰しそうになる。

「……ウエルテル効果って、知ってるか？」

突然、静かな口調で問われる。

「——ウエルテル、効果？」

「群発自殺、連続自殺事件——」

連続自殺事件——。

その言葉に、体中の体温が急激に下がっていく。

「昔、若者に人気だったロックバンドのギタリストが散弾銃を加えて自殺をしたらしいぜ？ その時、訃報を受けたバカ共が次々と自殺未遂が起こったんだとよ」

気にせず桜井は嬉しそうに話し始める。

「自殺模倣犯、自分に死ぬ理由がなくとも、その狂信が同じ道を辿ろうとする。滑稽だよなあ？ 蛾が死んだ蝶に憧れて空から落ちるんだよ。死んだら、蟻の餌にしかならねえのによお」

「ハッキリ言え、何が言いたいんだ」

辟易とした態度を取ろうとするが、頭の中では警笛が鳴り続ける。それは、後悔の始まりだと――。

「教えてもらうくせにいいご身分だな、お願いします、桜井様、だる？」

「鼻息がうるせえんだよ！ とつと言え！」

吐き捨てる。

「いいぜえ……、反抗したけりやすりやいいさ。おつと、『犯行』の間違いだったか？ ははっ、電話口じゃ漢字の違いなんてわからねえってな」

携帯電話を壁に叩きつけたい衝動を抑える。

コイツの一言一言が、癪に障る。違う。

苛立っているのはそこじゃない。

――俺が苛立っているのは。

「そろそろだな」

「そろそろ？」

「おい、お前の位置からだどエディフィスタワーが見えるだろ？ そのマンションのキャッチコピーの一つだよ、眺めのいい、街を一望できるマンションってなあ」

「マンション案内はいいんだよ」

「いいから見てみるよ。面白れえものが見れるぜ？」

ハイエナ野郎の言いなりになるのは癪だったが、不安感が勝った。見降ろしてみる。

「そうそう、素直なのはいいコトだぜえ……」

オレンジの光に溢れた針木市の夜景、眠らない街の彩り。

天体観測をしたことを思い出した。

七人が始めて一緒に行った『行事』であり、『悪戯』でもある。

そう――。

俺たちは、その楽園へと帰る。

そのつもりだった。

「楽園の崩壊だ」

桜井要が告げると同時——ガラスの外の景色に突然黒い影が走る。突然のことに、頭が真っ白になる。

脳から、アドレナリンが溢れ、景色がスローモーションになる。

——人影と目が合う。

……なんだ？ 男？ 中年？

いや、そもそも、なんでコイツはエレベーターの外にいる？

どうして、笑いながら、落下しているんだ？

コマ送りのように、ゆっくりと悪夢の風景が流れていく。

そう、これは連続自殺事件——。

地上五十階からの飛び降り自殺。

「……」

時間は動き出す。

そのまま、男は——奈落の暗闇へと吸い込まれていった。

「番組の途中に失礼いたします。臨時ニュースをお伝えします、つてなあ」

そしてエレベーターの明かりが付き、エレベーターが上昇を始める。

「……なんなんだよ」

「ああ…… たった今、地面に到着しやがったぜ。エグいことになってるぜ地上は。脳みそをばら撒きやがってよお。さてと、メインイベントだ昴栄治。舞台が主役を待ってるぜ」

行き先はいつの間にか『R』の位置に点灯していた。

——屋上。

「本日午後十二時頃、塚本研究所にて働いていた科学者、現在針木市で自営業に勤しんでいた男が死亡しました。これで、七人目です」

「……塚本、研究所？」

「あと何人殺せば気が済むんだろうな、あの女は。ああ……関係者を全員殺さなければ気がすまねえのか。『エヴァ』はイカれてるねえ」

エ、ヴァ——？

それは俺のよく知る名前、よく知る人物。
だから……。

だから、後悔するって思ってたんだ。

「……佳織」

「トモダチの秘密、暴きたいんだろ？ 感謝しろよ——」

「なんで——？」

突拍子もない。

予告も兆候もない悲劇は、何かの間違いだとは思えない。

「言っただろう？ ウェルテス効果だって。えっ、関係ねえってか

？ はははっ………関係あるんだわこれが。はははははっ——

——

「んなこと聞いてんじゃねえよっつ——！」

声を張り上げる。

携帯を握る手が震えていた。

恐怖だ。

まるで現実感がなくせに、得体の知れない恐怖。

しかし、今は現実感を帯びない悲劇も、やがて真実となり心を侵食していく。

認めてしまえば、それで終わり。

平穏な日常には、いられなくなる。

「はははっ、きれんなっ！ もったいねえ、アイツに是非とも聞かせてやりたかった」

「答えるよ……、佳織に何したんだ！」

「俺が、か？ さっきの見てなかったのか？ エヴァが、ヒト、殺したんだよ」

「だから、それがなんでか聞いてんだよ——！」

「ひやはははっ、知りたいんだろ？ もうすぐ答えあわせだ。地上五十階、夜景の見える屋上。なあ、気が利いてるだろ？」

だが、軽薄な笑い声は消える。

そして、真剣な口調で。

「……俺は、知らねえ。あんな化け物は見たことがねえし、聞いたことがねえ。チープな作り話としか思えねえようなヤツが、この世に存在したんだ」

その声は、震えていた。

突然、どうしたというのか？

「怖ろしい目は腐る程味わった。だがそれは、人間の怖ろしさだ。群れ、腕力、武器、残酷性——、だがいずれも想定内の恐怖だよ」
「……………」

桜井は、ソレを心底恐れるように。

「あれほど化け物だと思ったのは、初めてだったよ……。一体何をすりゃあんな人間が出来ちまうんだ？ ……はははっ、パワーバランスが崩壊してるじゃねえかよ」

力なく笑う。

「なあ、信じるか昴栄治？ 人を操って自殺させることが出来るって言ったらよお……」

桜井が、傲慢で、あれほど自分中心だった男が、彼女を思い出すだけで声を震わせて恐怖している。

「お前……」

エレベーターは、甲高い音を立てて、目的の階に付いたことを告げる。

ドアが開き、肌寒い空気が入り込んでくる。

足を踏み出し、屋外へ出る為の頑丈な鉄のドアに手をかける。

鍵は開いていた。簡単にノブが回る。

雲が月を隠し、辺りは暗かった。

屋上の端に、人影が佇んでいるが辛うじて分かる。

その人影は、こちらを向いていた。

「……………」

その人影の足元に蹲るもう一つの人影。

……二人いる。

……。
雲が動き、月が姿を見せる。
辺りを照らし出して。
人影たちの姿をさらした。

エヴァ 9 ―幕間―

——お別れを言いに来た。

その言葉は突然告げられた。

真っ暗な五感のないエヴァの世界に差し込んだ唯一の光。少年の
声もまた失われようとしていた。

待つて、と叫ぶ。彼女は身体を持たないから、強く意識した、と
いう表現が妥当だろう。

また、失わなければならないのか。

彼女が辛うじて彼女を維持できていたのは、偏に少年のおかげだ
った。だが、その少年もまた、彼女を置いて去ろうとしていた。

——どうして僕が居なくなるのか、それは君のせいなんだよ。

彼は、そんなことを言う。

——君はまた他者を欲そうとした。他者に依存しようとした。君
が期待されたのはそんなものじゃないんだ。

期待なんてどうでもいい。

彼女はただ、少年を求めた。そのどこが罪だと言うのか？

——その時点で、君はもうダメだ。求めるならば、他者がそうな
るようになければいけない。ここで言う依存という定義は、他者
に全てを委ねて思考を停止することに他ならない。君はそうやって
裏切られたはずだ。いや、そうしたからこそ裏切られた。だったら
君が裏切られたのは当然の結末で、やはり君はそうなるべきではな
かった。

だったら。

だったら、どうすればよかったと言うのか……。

——全てを事象として観察するんだ。君がノヴァに抱いた友愛、
君が僕に抱いた愛情、全てを事象として、言葉にしてみるといい。
大切なものは言葉に出来ない、と人は言う。だけど、それを言うて
しまえば、この世界に正しく表現できる言葉なんてない。例えば、

人という言葉だけで五十億人の人々を識別できないように、愛という言葉だけで五十億の心情を表現できないことと同じだ。出来るだけ正しく表現しようとすることは出来る。それが禁忌であるような考え方が主流だけど、それは思考停止でもある。言葉で考えられないということは思考停止と同義だ。だから、今度は君が言葉を紡ぎ続けるんだ。愛情を言葉で定義し続けるんだ。観察し、言葉を捜し続けて、その意味を理解しろ。それだけが、君を正解へと近づける。エヴァは、彼の言葉を聴き続けるだけだった。ノヴァと自分が同じ生い立ちであったことから、考えることから価値観まで全てが同じだと信じ、考えることを放棄していた。

塚本泰三は彼女に告げたのだ。――常に、考え続けろ、と。それはつまり、始めからヒントを出されていたということだった。

――常に考えろ、言葉を紡ぎ続けろ、自分以外の全てを言葉で表現しろ、と。

そうすれば不確定なことだと気づくはずだった。ノヴァへの信頼に理由がないことにも気が付くはずだった。

彼女は臆病で、いつもエヴァのことを盾にしていたじゃないか。

――さようなら。

少年の声は、聞こえなくなった。

また、暗闇の中に一人取り残される。

真つ暗な世界、音のない世界、自我の殻を失い、エヴァはまたどこまでも拡散していきそうになる。

だが、不思議と絶望はなかった。

考え続けよう、言葉を紡ぎ続けよう。

ノヴァと始まった日常を、塚本泰三に指南を受けた常識を、塚本泰三の変貌を、ノヴァの裏切りを、自分が受けた仕打ちの意味を、どうして少年が現れたのか、どうして少年は去っていったのか、全ての理由を言葉にしなければならぬ。

心の中で小さく呟いた。

――光、あれ。

世界が言葉で溢れ始める。

暗闇の中は、いくつもの言葉で埋まり始める。

言葉を紡ぎだして、思考を構築していこう。

そう、始まりは、矮小な研究室の世界だ。

——そうして、エヴァは目を覚ました。

「——おはよう、それとも、おかえりと言ったほうがいいかね？」

言葉を発した者を見ようとすると、輪郭がぼやけている。

目が役に立たない。突然光を目にしたからだろうか？

いや、違う。

視力が明らかに低下している。

「……塚本、泰三」

だが、その声は覚えている。エヴァから全てを奪った、一連の元

凶。

「——始めから、私を欲していた」

「それで？」

その会話は答え合わせのようで。

「でも、私は不完全だった。同じ境遇の者を盲目的に信じる愚かさも持っていた……」

「ならば、どうする？」

「意味を考えた、言葉を紡いだ。例えばノヴァという少女。彼女はエヴァと少しだけ違う。彼女もまた無条件にエヴァを、そして足長おじさんという男を信じようとした。彼女の場合は、自分に優しくしてくれる者全てを信じようとしたのかもしれない。言い換えれば、自分に都合のいい存在のみを認めていた。そして自分がエヴァよりも劣ることを知っていて、そして臆病だった。だから彼女はエヴァの後ろに隠れた。エヴァが彼女を守ってくれると分かった。ならば彼女はエヴァの後ろに隠れるようになった。しかし、塚本泰三という人間が現れた時、彼女は思った。塚本泰三はエヴァに出来損ない

を切り捨てろ、そう言った。その言葉は足長おじさんがノヴァを切り捨ててエヴァを選んだことを意味している。彼女は考えた。ここで自分が助かる為にはどうすればいいか。臆病さとは、自身の保身を思う心。つまりノヴァは、都合の良かった存在が都合が悪いものになるならば、切り捨てるかもしれない。あの時点で、ノヴァがエヴァを切り捨てる可能性は極めて高かった。ならば、塚本泰三が『なんなら君でもいい』と言った時点で彼女が裏切ることを考慮に入れるべきだった――」

すらすらと、言葉が溢れ出てくる。

当然だ、暗闇の中で何度も紡ぎ続けてきた言葉だ。何十回も、何百回も――。

「合格だ――」

塚本泰三は、満足そうに頷く。

「君は、人間となった。そう、言われたことしか出来ない、自分に都合のいいことしか考えない豚ではない。豚を支配する人間の思考となった」

彼女に手を差し伸べる。

「君に戸籍を与えてやろう。私の娘という戸籍だ――」
そうして彼女は、塚本泰三の娘となった――。

エヴァという少女の話だ。

さて、少しだけ後のことも語っておこう。

彼女に語りかけたウェイ少年が『彼女がどのような存在になるか』ということを気にしていた。無垢というものが存在できないということも。

ならば彼女は、どのような存在となったのだろうか。

一ついえることは、彼女は塚本泰三とはまた違う。

他人に憎しみを覚えない、シンプルに歪んでいる塚本泰三とは違い、彼女は自分の感情に従った。

つまり、客観的に言葉で表したのとは別に、ノヴァが彼女にした

こと、そして少年が彼女を置き去りにしたことをどう感じたか、ということだ。

——ノヴァには憎しみを教わり、少年には寂しさを教わった。

そして彼女はまず、少年への復讐を果たした。

彼女を裏切った少年を壊して、そして再生した。

そして今、彼女はたった一つの彼女の半身だったノヴァを追い求める。

その感情は、少年の時の比ではない。

そして、時は過ぎ、現在——。

『エヴァ』は、『ノヴァ』との邂逅を果たした。

偽者 ― 昴栄治

「――昴、栄治」

「悠希、どうして……」

そこにいたのは、沙耶悠希だった。

でもそれは、まるで別人のようだった。

腰まで伸びた漆黒だったはずの髪は、おぞましいほどに神聖な白銀だった。

その目は赤く、鮮明に輝く。

――異形。

黒のドレスを身に纏う、聖なる異形――。

ウサギの少女がいた。

「……なんで、栄治が？」

蹲る佳織の声が、震えた。

「悠希……どうしてここに？ それに、その姿は……」

比較にならない。彼女は以前からずっと神聖な存在だった。

だが目の前の彼女は、神聖という言葉さえ超えている。もはや魔女と呼べるものではない。

メフィスト・ファレス――。

ゲーテの戯曲『ファウスト』に登場する悪魔を連想させた。

「エヴァ――、貴方は佳織のことをそう呼んでいた。そう呼ぶようにプログラムされていた。もう一人のファウラ――」

「ファウラ？」

何を言っているのか、理解できない。

「十年越しになるけれど、改めて初めまして――。私が、本物のエヴァよ。栄治は疑問に思ったことない？ 貴方は自分の名前すら覚えていないのに、なぜ佳織をエヴァだと思ったのか」

「……やめろっ」

佳織が呻く。だが、その言葉は良く聞こえなかった。

……どうして、考えたことがなかった？

なぜ俺は、彼女の名前だけを知っていた——？

「答えは簡単よ。そこにいる『出来損ない』が、貴方をそうプロگرامしたからよ」

「プロگرامって、何のことだよ……」

「ねえ、そうよね、ノヴァ？ どうして自分をエヴァと呼ばせたのかしら？ どうしてエヴァと同じ外見の日向と仲良くなったのかしらね？ 性格は随分と違うのに、貴方は常に日向のことを特別視していた。日向の裏切りの発言に過敏に反応したのは、七人の輪を許せなかったのではなく、エヴァがノヴァを裏切ることが許せない、そういうことかしら？」

「……違う」

「例えばのぞみが同じことを言えば、貴方は激昂したかしら？」

「……やめろ」

一体、何がどうなっている？

佳織がエヴァではなくノヴァで、悠希がエヴァで、日向がエヴァと同じ外見？

色々な情報を詰め込まれて、頭の中が混乱する。

「会いたかったわ、ずっと、会いたかった。私だけのノヴァ——」

悠希の笑みが、あまりにも禍々しく、冷たかった。

そして——呪うように告げる。

「裏切り者のノヴァ」

——ノヴァ、その言葉に戦慄を覚えた。

『塚本一族毒殺事件、犯人の名前はノヴァ——』

以前に佳織が告げた言葉、すなわち——。

犯人は、塚本佳織……。

「あ……足長おじさんって、まさか……」

佳織は、ぽつりと呟く。

「沙耶春樹は来ないわ」

「なんで……あの時、確かに死んだじゃないか」

「ええ……、『塚本泰三』は、貴方が殺したわよね」
風が吹き、塵が舞う。

放射能にまみれた、死の街から風が吹き込む。

「ねえ、栄治——」

突然名前を呼ばれる。

「な、何だ？」

「面白い話があるの」

その言葉に反応した佳織が、顔を上げる。

血の気の引いた、悠希に負けないくらい蒼白な顔色だった。

「過去、チェルノブイリの原子炉融解事故では、世界中に八トンもの放射線物質が世界へとばら撒かれた。それに比べれば、放射線の量は約十分の一に過ぎない。なのに、五万人もの人間が犠牲になったわ」

「……なんで、そんなことまで」

呟いた佳織の唇は、震えている。

「融解事故だなんてとんでもない……。あれは明らかに外に向けての衝撃波を計算した兵器だったのよ」

「何を……言ってるんだよ」

俺の声も震えていた。

悠希は、これ以上何を言おうとしているのか……。

これ以上……まだ、何かあるというのか。

「止める、止める……」

懇願するように、佳織は悠希の足にしがみつこうとするが。

「蒙昧なフリは止めなさい、天才少女——」

鈍い音が鳴った。

「あぐっ——！」

「なっ——！」

その頬につま先を入れた。

鼻血が舞って、佳織が再び地面に蹲る。

本気で、蹴りやがった……。

どうして？

七人の、家族に代わる新しい絆だったはずじゃないのか？

「算正樹の名前を使い、新型原子炉に『算理論』と言う偽物の理論を提示したのは他でもない。南御座原子炉の新しい設計者は、そこにいる普通の人間よりもちよっとだけ優秀な殺人鬼なのよ。井端紫音に全ての罪を着せて、よくものうのうと生きていられるわね。本当に神経の図太さだけは一人前ね」

十数年前ならば、若干一桁の歳の少女だったはずだ。

そんな馬鹿なこと、どうやって信じればいいと言うのか。

「自らの自由と引き換えに私を悪魔へと捧げた裏切り者ならば、塚本泰三が望んだように自らの保身の為に八十万人の命だろうが、喜んで差し出すでしょうね——」

「……嘘だ、そんなこと、佳織が……」

なんだよ、それは……。

それはつまり、ブラック・マンデーは、佳織が故意に起こした、ということなのか？

「ついでに言えば、そいつは塚本佳織ですらないわ。貴方が本当は、昂栄治でないのと同様に、ね」

「なっ……」

「塚本佳織って言うのはね、悪趣味な成金共が人遊びの為に買った奴隷の名前なのよ。塚本の一族はね、塚本泰三に虐げられたストレスを、そんな風に歪んだ性癖で発散させようとしたのよ。そんなレイプする豚共の一族に買われた子供こそが、塚本佳織と名づけられた。戸籍のないような子供だったら楽でしょうが、そんな都合のいい玩具はこの国ではそうそう売ってないものね。だから、金に困る腐った母親から養子と言う形で子供を買い取るの。そうして壊れれば、塚本お抱えの医者に病死と判断させる。聞くだけで脳が腐るような遊びだわ。でもね、そんな可哀想な子供から、あるうことが命を奪って戸籍まで乗っ取った、もっと最低なヤツがいたのよ。警察が貴方を塚本佳織だと判断するように、貴方は色々なものを偽造し

たわよね？ アルバム、保険証、パスポート……。随分手先が器用じゃない。それともずっと前から、それを計画して用意していた、ということかしら？」

「がっ——」

悠希は、佳織の腹部に蹴りを入れる。

「お、おい——！」

「本当に薄汚いゴキブリ女——、貴方は臭い、臭うのよ」
何発も蹴りを入れる。

「止める——！」

言葉で制止しても、彼女はその足を止めなかった。

佳織は蹲り、それに耐えるばかりだった。

「私はずっと、アナタを殺してやりたかった——」
ウサギの少女は笑う。

「久は随分とヘイヴンにご執心だったから、下手に動きたくはなかったけど。私はうんざりだったわ」

——それは、決定的な決別の言葉。

佳織を蹴り続ける鈍い音が鳴り続ける。

「いつこの腐った友情の輪が終わるのか、ずっとその時を待ち焦がれていた」

いつも一步引いた位置から、俺達を眺めていた少女。

だが、それは母性からくる行動などではなかった。

六人から一步引いた場所で、彼女は呪い続けていた。

「ねえ、栄治——」

悠希は不意に足を止めた。

悪魔の赤き双眸を向けられて、体が凍りつく。

「春賀のぞみ—— ウォン、高辻日向—— サン、そして、塚本佳織—— ノヴァ。……過去、私たちにモルモットとしての名前がつけられていたように、私は彼女たちを心の中でモルモットとして名を付けて、ずっとそう呼んでいた」
「……」

「なぜだか分かるかしら？」

雄弁に彼女は語る。

「……なぜ？」

「別にのぞみのことは嫌いじゃない。好きでもないけどね」

妹のように、彼女に懐いていた少女だったはずだ。

「ただ、森野美月と塚本佳織——。お前らがそこにいたからよ」

そして悠希は、冷たく佳織を見下ろした。

「森野美月の壊れたハードに移された私は、それこそ地獄の日々だった。徐々に光を失っていく目。身体を襲う突然の苦痛。でも、それ以上に辛かったのは、その身体を少しでも延命するための死よりも辛い副作用の日々。私はこの十年間、想像を絶するような投薬の苦痛に耐えてきたの。投薬後は舌を噛まないよう猿轡を口に巻いてベルトで両手と両足を固定する。そして私は、久に見守られながら三日三晩地獄の淵を彷徨い続けるの」

日向の一番の理解者であつたはずの彼女。

だが日向は、彼女の健全な身体を奪い、のうのうと生きてきた。

それ故に、憎しみの対象となった——。

「そしてノヴァ——。唯一苦しみ分かち合えたはずのアナタは、日向のドナーとなるのを避けるために私を売った。ずっと不思議だったの。どうしてアナタがあの問題を解けていたのか。貴方、塚本泰三に接触していたのでしょうか？ 答えの解き方を、貴方は尋ね続けた。自分だけが助かる為にね」

日向は悠希の身体を苦しめ、そして佳織は、悠希の心を裏切った。

「どうして私は——貴方のような馬鹿を信じたのでしょうかね。それだけが、私の人生の汚点だったわ」

——佳織は、佳織を救うために、悠希の全てを奪った。

「だから、ずっとこんな友情なんてブチ壊してしまいたいと思ってた。粉々にして、二度と元の形になんて戻れないように。アナタが私を裏切ったように、私もアナタを希望という高い塔の上から叩き落してやりたかったのよ」

だが――。

「……その為に、久も裏切ったのかよ」

七人の輪を裏切るということは、悠希が唯一大切にしていた久すらも裏切るということじゃないのか？

「久は――、ずっと続けたかったのに」

だが、悠希は動じなかった。

「あの子もね、私を裏切ったのよ……」

声だけは寂しそうに、そう呟く。

「……久には、壊れて欲しいの。もう一度、私と同じところに来て欲しいのよ」

「久を壊す？」

「幸せそうなあの子を見るたびに、脳が軋むのよ。殺人、流血、悦楽……。嫉妬、憎悪、破滅願望――。私の真つ暗な世界にはそんなものしかなかった」

謳うように。

「心を育むであろう時期に、私にはそんなものしかなかったの。そしてあの子は、唯一私と同じところにいたはずだった。私を暗闇から救い出してくれたモルモット。でもあの子は、結局廃棄されて井端紫音に引き取られた」

寂しそうに。

「私には、のぞみを失った桜井の気持ちがよく分かる。同情はしないけどね。私は久を、あの子をどうしようもなく好いている。だって、あの子は私の一部なのだから。あの子が私を見捨ててなお、私はあの子のことを愛していたのよ」

「愛してる……？」

「それは何よりも強固な愛。自己愛。文字通り、自らを愛するようにあの子を愛した。だから、変わっていくあの子をどうしようもなく滅茶苦茶にしまいたくなったの」

「だから、久も壊すのかよ……」

「自分の身体を侵食していくウイルスを殺すのに躊躇する人間なん

ていないでしょ？ そんな風に、私はあの子を愛したの」

「……」

「爆弾を作ったのはそこにいる女だけど、あの事件のブースターは私——、所詮は春賀晃も森野勇次も脇役に過ぎない。十にも満たない少女一人で、一つの町をぶち壊してやったのよ。狂気を生み、ひとつの流れを作り出した。それこそが、ブラック・マンデーの真の意味」

言っていることが理解できない。ブースターだとか、真の意味だとか……。

「だったら、あれは……一体何だったんだよ」

これまで無言だった佳織が口を開く。

「……あれとは？」

「ヘイヴン——」

久の名づけた楽園の名前。

「ふふふふ——」

悠希は、肩を震わせる。

「嬉しいわ。絶望してくれているのね。それでこそ、あの気持ち悪いものを頑張つて続けてきた価値があるもの。あははは——、アナタにとっては大切だったのね。自分の次に大切だったのね」

心からの嘲笑を。

「戻らないのかよ」

佳織は悔しさに唇を噛む。

「……戻りたいのなら、いくらでも戻つてあげるわ」

「えっ——」

予想外の答え。

「そして再び裏切つて、また戻つて——、アナタが幸せを感じる度に絶望に叩き落してあげるわ」

それは悪意にまみれた言葉で。

「生きていることを後悔するくらい全てを致命傷にしてあげる。自殺するなら蘇生してあげる。狂うならば矯正してあげる。アナタが

私を愛してくれたやり方で、アナタの神経が全て焼き切れるまで私はアナタを愛してあげるわ」

愛している、と呪った。

怒りのあまり、我を忘れた。

彼女の言う気持ち悪いものこそが——俺にとっては全てだったから。

それをどうしてそこまで侮辱するのか！

彼女に、掴みかかろうとした。

「ふざけるっ——」

だが、その言葉は途切れる。

「——フリーズ」

悠希の指が、俺へと向く。

瞬間に、視覚情報が混濁とする。

耳が聞こえないはずの音まで聞き取ろうとする。

肌に当たる微弱な風が痛い。

全ての感覚が増幅されて、濁流となり頭の中を襲う。

「あああああああ……」

うめき声が身体の中で反響して一気に気持ち悪くなる。

止めてくれ。

音を、止めてくれ——！

「どう？」

悠希の放ったたった一言が、ライブハウスでバスドラムが響くように。

シンセサイザーが金切り音を立てて音割れするように。

血管を焼ききろうとする——。

止める。

止める、ヤメロ、ヤメロ——！

その音をトメ——！

「——リロード」

プッ——。

「えっ？」

視界は歪んでいない。

世界は静寂に包まれていた。

『……俺は、知らねえ。あんな化け物は見たことがねえし、聞いたことがねえ。チープな作り話としか思えねえようなヤツが、この世に存在したんだ』

桜井要の言葉を思い出した――。

『あれほど化け物だと思ったのは、初めてだったよ……。一体何をすりゃあんな人間が出来ちまうんだ？……はははっ、パワーバランスが崩壊してるじゃねえかよ』

なんだ、コレは？

こんなことを、悠希は出来るとも言うのか？

『なあ、信じるか昴栄治？人を操って自殺させることが出来るって言ったらよお……』

催眠術、いや、これはそんなチンケなものなんかじゃない――！
頭の中をいじられたのだ。

「……魔女」

学園で、悠希には俺たち以外に友達と呼べるものはいなかった。
高尚な芸術品のような、美しさと儚さを併せもつ外見。誰にでも平等に、冷血とさえ思える淡泊な受け答え。

異性はおるか、同姓でさえ、彼女を恐れ敬うか、陰口を叩くしかなかった。

その中で、彼女を表すキーワードの一つが、魔女――。

「魔女、ね――。本当に捻りのない言葉なこと」

怖ろしい。

メラニンの少ない目の赤色すら、魔法の力を秘めているように思えてくる。

「そうね、栄治……。貴方の頭の中を弄って貴方も自殺させれば、そこの芋虫も少しは答えるかもね」

「や、やめろ……」

佳織が震えている。こんな佳織を見るのは——初めてだった。それほどまでに彼女は、怖ろしい存在だった。どうすればいい？

本当に桜井の言う通りだ。こんなのはパワーバランスが違いすぎる。

彼女は、一歩ずつ近づいてくる。

「ああ……」

足がすくんだ。

一歩も動くことが出来ない。

仮に、動けたとして、一体何が出来るのだろうか？

それほどまでに異質な存在、圧倒的な存在——。

「……えっ」

彼女が、不意に足を止める。

「……どうやら、時間切れのようね」

「時間、切れ？」

——サイレンの音が聞こえた。

はっ、となり下を見る。

「警察……」

地上を見下ろすと、赤いパトカーのランプがマンションを包囲していた。

そっ、巷を騒がしている連続自殺事件——。

地面にぶちまけられた死体を見たら、通報するに決まっているじゃないか。

「……栄治、貴方の証言を、中野刑事は信じるかしらね」

悠希は、いつの間にか屋上の入り口に移動していた。

「さようなら——」

そして彼女は、この場を去った。

「……」

どうして、去った？

人を操って殺せるなんて証言、誰も信じないということか？

そもそも、悠希の目的はなんだ？

なぜ、人を自殺させていた――？

ワケが分からない、何一つ見えてこない。

「……あああ」

ただ屋上には、佳織の嗚咽だけが響いた。

その声は、俺の脳の中までも響いていた――。

真実の扉

飛び降り自殺事件――。

その一報は、残業中の中野の元に届いた。ここ一ヶ月で針木市を騒がしている連続自殺事件。だが、今回の通報は決定的に異なる点がある。

被害者が飛び降りたと見られるマンションの屋上に人影が見えるという目撃証言だった。それに加えて、マンションに入っていく高校生くらいの、大柄で目付きの悪い男の子を見た、と――。

まさか、昴栄治。

中野は急いでパトカーに乗り込み、現場へと急行した。

屋上で見た人影と言うのは、塚本佳織、ということになるのだろうか？

違って欲しい。特徴がたまたま似ていただけだとか、そんな結果であってほしいと、中野は祈り続ける。だが、焦燥感に駆られる心とは別に、どこか冷静な刑事としての自分が最悪の事態を思い浮かべる。

――認めなければならぬ。覚悟しなければならぬ時が来た。

「栄治くん……、すまない……」

気が付けば、謝罪の言葉を零していた。

針木パレス――地上五十階建ての超高層マンション。

摩天楼が、暗闇の中に不気味なネオンを灯して聳え立つ。

何かの終わりを象徴するような、そんな不吉な予感の中で。

「中野さん……間違いなくガイ者はこのマンションから落ちたのでしよう。ひどい有様です」

血溜りの前でしゃがむ同僚が口を開いた。

「現場を頼む……、私は、目撃証言にあった屋上に行く」

中野は駆け出した。

迷宮のような屋内、どこまでも続くような長いエレベーター。も

しも人影がすでに移動しているならば、隠れるところも山ほどある。入り口を封鎖するべきだろう。携帯電話を取り出して、あらゆる入り口を固めるように指示を出す。冷静に対応しながら、中野が思うことはただ一つだった。

「栄治くん……もしも佳織ちゃんがそこにいたとしたらば——」

我々は、重要参考人として、彼女に同行願わなくてはならない。

時刻は遡ること一日前——中野刑事は、事件の核心に迫るような情報を手にした。

情報源は、沙耶春樹——。

針木市の発展において一役買った男で、色々とキナ臭い事情に精通した男だった。

彼が塚本泰三と懇意であったということから、塚本一族毒殺事件の捜査の為に赴いたのだが、彼の口から聴かされた言葉は、中野が目を背けていた一つの可能性だった。

「塚本一族毒殺事件の生き残り、ですか……聞いておりますよ。成金どもの悪趣味な遊びに付き合わされた、可哀想な男の子の話ですよね」

「……男の子？」

「ええ……、ショタ、というヤツですね。顔の綺麗な少年に女装させて性的な暴行を加えるという、想像するだけでおぞましい趣味を彼らが自慢げに語っていたのを思い出します。出来れば、思い出したくなかったことですがね……」

「しかし、名前は塚本佳織、では？」

「そうです。塚本佳織——、性別、男性。名前まで女の子のものをつけた。顔と名前は女性のようなのに、男性器を持つ。金持ちどもの喜ぶ思考と言うのは、全く理解に苦しむとは思いませんか？」

「……おい、塚本佳織の写真の資料はあるか？」

中野は部下に指示する。

「は、はい……これです」

部下の二十台の刑事は中野に、塚本宅に残されていたパスポートを手渡した。

「塚本佳織を、貴方は見たことはありませんか？」

「……？ ええ、ありますか？」

「それは、この人物ですか？」

中野は、受け取ったパスポートを沙耶春樹に手渡す。

「……いえ、これは私の知る塚本佳織とは別人です」

愕然とした。

だが、落ち着いて考えてみる。

パスポートという身分証明書があることから、沙耶春樹の見た塚本佳織こそが別人であるという見解のほうが正しいだろう。

その思考も、沙耶春樹の次の言葉で間違っていると気づかされることになる。

「……そもそも、なぜ塚本佳織がパスポートを持っているのですか？ 海外に行ったことがある、というのは余りにも想像できない。

塚本佳織は私の見た少年とは別人と言うことでしょうか？ では、彼女は本当の養子だったと？ そもそも、塚本佳織を養子にしたのはブラック・マンデーの直前だったと聞いています。詳しいことは分からないのですが、塚本佳織が養子となつて以来、塚本一族の誰かが海外に渡つたという記録はあるのでしょうか？」

「……すぐに、調べてみます。税関の方にも――」

部下が立ち上がり、部屋を退出する。

「……沙耶さん、貴方は、どう思いますか？」

中野は、項垂れながら尋ねる。

「どう、とは？」

「どれが、本物の塚本佳織だと思いますか？ 貴方が見たと言う少年なのか、それとも、貴方の息子、娘さんとお友達の塚本佳織さんなのか……」

「……恐らくは前者でしょう。息子たちの学友を疑うことはあまりしたくありませんが、彼女が養子として書類を市役所に提出した日

にちが分かればはつきりするはずです。そして……恐らくパスポートは偽造である可能性が高いです」

「偽造？」

「……顔写真のある身分証明書を偽造出来たならば、『塚本佳織』に成り代わることが出来る——。そうした考え方ならば、偽造ができるという問題さえクリアすれば辻褄が合う気がします」

「……それは」

「本物の塚本佳織を知る人間を、全員毒殺すれば、彼女は塚本佳織になります——」

「——っ！」

中野は、立ち上がっていた。

「どうしましたか？」

「——全く筋が通ってます。素晴らしい推理です。だが、証拠はない。貴方の描くのは机上の空論に過ぎません」

「ええ……全くもってその通りですが。しかし貴方の口ぶりはまるで、『塚本佳織を疑いたくない』と言っているようにも聞こえます」
図星を付かれる。

「それに、パスポートを発行した記録がなければ、それが偽造だということが判明します。それは——私の推理の状況証拠になる、と言えるのではないでしょうか？　後は、彼女が本当は何者かを調べていけばいい」

「ええ——そうさせて頂きますよ」

沙耶春樹は、中野にパスポートを手渡す。

「御協力……感謝します」

そうして中野が応接室を後にしようとしたところで。

「そうそう……そう言えば、今巷を騒がしている連続自殺事件がありますね——」

ノブに手をかけた中野の動きが止まる。

「塚本にて仕事をしたことのある私だから分かることなのですが——共通点があるのですよ」

中野は振り返る。

「是非、事件の早期解決の為に伝えたいと思っていました」
沙耶春樹は、笑っていた。

「――被害者は皆、塚本一族の施設、塚本研究所に關係していた人々です」

何もかもが、間違いであって欲しい。
心から、そう思った。

――だが、部下からの報告は、パスポートは偽造であったという
事実だった。

そして今晚、自殺事件が起きた。
現場で目撃された人影。
まるで。

まるで誰かの描いたシナリオのように、真実が一本の線になって
いく気がした。

エレベーターが屋上へと辿りつく。

中野は、鉄の扉に手をかけた。

そして今――、彼は真実の扉を開ける。

開花 ― 昴栄治

「中野……さん……」

予想はしていた。何となく、彼が来るだろうと思っていた。

「……やはり、君たちだったのか」

中野刑事は、悔しそうに唇を噛んだ。

「今夜ここで何が起きたのか……知らないなどとは言わないね？」

「えっ――」

……その言い方は、一体どういうことなのか。

連想される事実を思考が拒否し、蒙昧であることを選択させる。

「……一体、どういうことですか？」

分かっていながら、分かっていないフリをした。

「……栄治くん」

中野刑事は顔を歪めながら。

「君は、自分が、そして佳織ちゃんが疑われていることを確信していたんじゃないか？」

「……」

「だから、真実を知ろうとした反面、真実を知ることが恐かった。

君は事件の事を忘れたと思い込むことで記憶の蓋に鍵をかけたかもしれないなかったからだ。それにより、心的外傷による一時的な記憶喪失のような状態に陥る例だって有名だからね……」

「……それは、何のことですか？」

「君の記憶喪失とは、そういう類のものだったのかもしれない……、いや、少し違う。君は……恐れている。真実を知ろうとするのは、まるで真実を闇に葬りさりたいが為に……」

「……はははっ」

喝いた笑い声が洩れた。

怖ろしいことが、最悪の事態と想定していたことが今、現実になるうとしていた。

『——もしも、中野刑事が敵になれば』

いや、俺が恐れていたのは、その現実が高い確率で実現するんじゃないかって、心のどこかで思ってたからか……？

「……栄治くん、なぜ笑っている？」

嘲笑でも、ごまかしの愛想笑いでもない。

ああ……。

本当に絶望的な時、こんな風に笑いが洩れてしまうのだ。

中野刑事に続き、何人もの刑事が屋上に現れる。

中野刑事を先頭に、彼らは俺を通り過ぎていった。

——その先には。

「——塚本佳織さん、貴方には連続自殺事件の重要参考人として任意同行願います。出来ればこのまま付いてきてもらいたい」

「そんな馬鹿な……」

ワケが分からない！ どうやって、佳織が自殺を行わせたというのか！

「違います——！ 中野さんは勘違いを——！」

中野刑事の肩を強く掴もうとして。

「黙っていなさい、栄治くん」

「がつ——」

その手を捻られる。

「これは……遊びじゃないんだよ。邪魔をするならば、公務執行妨害で君も連行しなければならぬ」

淡々とした口調に、寒気を覚えた。

——どうして？

——味方だったはずの貴方が、どうしてこんなことをしている？

「塚本佳織を、連行しろ……」

彼の言葉と共に、刑事たちが佳織の腕を掴み、無理やり立たせた。彼女にコートを被せて、なれた手つきで彼女を連れて行く。佳織は魂の抜けた人形のように、されるがままだった。

「佳織じゃない……、佳織は……嵌められたんだ……」

必死にもがこうとするが、万力のような中野の腕はピクリとも動かない。

「自殺だったって……大丈夫だって……そう言ったじゃないか！」

「そう……普通ならばどう見ても自殺。だがね、もうこれは普通というレベルを遥かに超えている」

それは……悠希が、普通じゃない方法で自殺を起こさせたということだ。

「犯人は、彼女じゃない……別にいる」

「どうして……連続自殺事件の容疑者がいると？」

なんだ、その質問は？

アンタは今、佳織を連行するように指示したじゃないか！

「正しく『連続自殺事件』だ」

「中野刑事の言ってることが分からない！」

「君は言っていたね。連続自殺事件の際、佳織ちゃんのおかしかったことを」

確かに言った。貴方を信じて、俺はそう相談した。

「そう、手段が分からない。自殺をさせる手段だ。催眠？ 洗脳？

分からないが、事件には意思が感じられた。何らかの意思がね」

「分からないクセに、逮捕したんですか！」

「任意同行だよ」

「さっき連行しろって言ったじゃないか！」

「ああ……、証拠がないだけで我々は真実に近い推論を得ている」

「どうしてそんなことを」

「それは……」

中野刑事は言いよどむ。

発狂しそうな焦燥感の中で、俺は中野の言葉を待った。

「彼女が、塚本一族毒殺事件の指名手配を受ける予定だからだ」

「……えっ」

うまく、中野の言葉を理解できなかった。

「……今、なんて言いました？」

問い返す。

「我々は塚本佳織を指名手配する」

中野刑事は機械的に応じる。

努めて、そう応じようとした雰囲気です。

「どうして？」

「彼女が、『塚本佳織』でないと分かれば、話は別だ」

どうして、中野刑事がその話を知っている？

一体、どこから？

喉が、やけにカラカラと渴く。

「ああ」

「それは——」

聞くんじゃない——、と。

一つの核心として脳内の警笛が発される。

「っ——」

未だに俺は……七人の絆にしがみ付こうとしているのだろうか。

今さつき、手痛い裏切りを受けて、それは致命傷だったのに——。

なのに、それが悠希の仕業だとはつきり告げられることを恐れていた。

「……彼女が何者か、そこに焦点は集まった。辿るうちに、我々は信じられない事実を聞かされたのだ。詳しいことは分からないのだが——ファウラウェイ・プロジェクトというこれまでのコンセプトとは全く異なるデザイン・チルドレンの実験だという」

「ははっ……なんですか、その荒唐無稽な作り話は？」

そんな作り話だと笑い飛ばされるような『真実』を、どうして中野刑事は信じたのか……。

『そう、証拠がなければ、こんなことは信じない——』

「そう思つのも無理はない、私も初めはからかわれているのだと思つた」

「だったら、なぜそれを信じたのですか？」

だから、聞くんじゃない——、と。

心音がさらに倍速。

冷たい血が全身を駆け巡る。

背筋が凍る。

指先が震える。

唇が乾く。

「被献体とあつたんだ——」

「……被献体」

オウム返しに。

言いにくそうに中野刑事は顔を歪めるが、それは一瞬で厳格さに隠される。

『それもまた、俺の友達だったから——伝えにくいことだ』

「沙耶悠希——、彼女は被献体でありながら、もう一人より劣っていた為に脳移植のドナーとされ、実験を続けられたらしい。そして、そのもう一人こそが——」

そして告げる。

「彼女を容疑者として指名手配した事件はそこに繋がる」

次に続く言葉も、予想の範疇外。

「今まで君と過ごしてきた塚本佳織は、ファウラウェイ・プロジェクトの被献体だ。そして、恐らくは栄治くん、君も——」

「嘘だ——！ そんな出鱈目を、警察が信じるというのですか！」

『俺は、随分と興奮している——。だからこそ、中野刑事は落ち着いて対応しなければならない』

「信じなければならぬ証拠が次々と提示された。そしてこれからの捜査で、それはどんどん明るみになるだろう」

「……捜査？」

……それは、まさか。

「御座市の、塚本研究所の捜査を行う段取りを整えている」

「……」

「すまない……結果として、君を傷付けることになるのだろう。法の元、君達の過去を暴き、傷を抉った上で罪を糾弾する。そんな……」

…最低の行為だよ」

「……」

「だが、都合のいい言葉に聞こえるかもしれない。だがね、それでも私は君のことを気にかけていた。本当の息子のように思っていたんだ。……こんな幕引きとなって、本当に残念だ」

訳が分からなかった。

まるで全てがそう仕組みられていたように、次々と真相が明るみにされていく。

——そうか。

これが、沙耶悠希の復讐ということか。

最終的には、ブラック・マンデーまで辿りつかせ、佳織を社会から永遠に抹殺する。

魔女は、佳織のほうだったのだ。

彼女は十字架に縛られて、炎に焼かれる——。

まるでゲームのように、カードを一枚ずつ捲りながら、彼女を追い詰めていく。

——裏切られた。

他の誰でもない、七人の輪から出た裏切り者——。
酷く堪える。これは致命傷だ。

そして——。

『——裏切ったという、罪の意識も』

「そうか……そうですよね、警察ならそうする」

『この人は、俺たちの敵になった』

「中野刑事——」

「……」

中野刑事の動きが止まる。

ただならぬ気配を刑事の勘が告げたのかもしれない。

「……どうしたのかね？」

「——テレパシーで、人を自殺させることが出来るとすれば、信じますか？」

はつきりと告げる。

「……」

中野刑事は言葉を選び。

「それが、今回の事件の殺害方法と言うことかね？」

中野は神妙な面持ちで問いかける。

「罪はないんです……」

「そう、彼女の罪はない——」

「彼女に、罪はないんです……」

「それしか、方法はなかった——」

「それは、これからの捜査ではつきりとさせることだ」

「捜査は、させません——」

「そう、栄治——、この能力は、ファウラの実験の副産物——」

「何を、言っているのだ？」

「つまり——貴方にも、同じことが出来る。受信しているでしょう？」

「色々な脳波を——」

「そう、『リ・ロード』だ——」

「熱暴走によるフリーズ、そして、リ・ロード。つまり、再起動——」

「——」

——悪魔の力を。

「そう……コレはもともと、貴方の、プログラム・チルドレン、フ

アウラ力なのよ——」

「デリート」

唱えた。

謝罪 ― 昴栄治

致命傷を負っても行き続けなければならない人生

時としてそれは、生物の生存本能に打ち勝つほどの苦痛だ

自殺はいけない、と誰もが言う。

分かっているながら、そうするのが恐いのに、恐くて堪らないのに命を絶つ。

生きるということが、いつから希望ではなく冷たい疲弊となったのだろうか。

何もかもが重たくて堪らない。

人と接触すれば、心が磨り減って痛い。

初めて知った広い世界は、冷たい絶望だった。

「・・・・・・はぁ・・・・・・はぁ」

息苦しくなる。

理由が、分からない。

「芥川シンдрーム・・・・・・」

かの文豪が、先の見えない不安、と遺書を残した。

それにもじった冗談を呟く。

そう――、漠然とした不安。

理由が、やはり分からない。

「ははは・・・・・・笑えるよ」

恐いものも分からない。

敵さえも認識できない勧善懲悪みたいな噛み合わない人生だと思
った。

恐いのは、毒殺事件だったのか、それとも彼女だったのか。魔女
だったのか。悪魔だったのか。自分だったのか。

よく分からないことばかりだった。

みんな、今頃何をしているのだろうか？

慶介は何をしているのだろうか。

久は？

のぞみは？

日向は？

いつの間に家族に代わる新しい絆は綻びてしまったのか。

「教えてくれよ……久」

ここにいない発案者に問いかける。

「どうして……俺はまた、二人に戻ったんだよ」

意識のない佳織を連れて、夜の針木市を歩いていた。

動悸が激しくて、いくら呼吸をしても酸素が足りてないみたいで、胃の中で毒物がぐるぐると侵食していくみたいに気持ち悪くて、立っていられなくなった。

膝を付き、そのまま床に這い蹲る。

冬の寒さの中、異常な発汗が体温を容赦なく奪っていく。

ただ、背中に背負う佳織だけが、暖かさを帯びている。

ああ、気持ち悪い――。

気持ち悪い物ばかりの中で、このまま死んでいくのだろうか。ふと、そんなことを思った。

「……誰か」

ひとりは、嫌だった。

「佳織……」

二人でいるのに、俺は一人だった。

「……っ」

そしてすぐに唇を噛んで閉ざした。

強く噛み、錆びた鉄の味を舌で転がす。

俺の記憶は、彼女が救いの手を差し伸べたところから始まる。

それ以前のことは、全ては知らないし、知る必要もないことだろう。

自分の素性も、自分が巻き込まれた事件も、何もかも。

「……もう一度、二人からだ」

呟いてみた。

——七人の輪は、完膚なきまでに壊れてしまったのだ。
立ち止まり、見上げる。

目の前には、聳え立つエディフィスタワー。

街頭テレビは、慌しく臨時ニュース。

「——アイツ、一体何してんだよ」

懐かしい友と出会った気分になる。

森野陽子が、亡くなったらしい。

あまり絡みはなかったが、慶介は悲しがっているかもしれない。

……。

俺は俺で、進まなくてはならない。

今度は自分が手を差し伸べる番だ。

それが出来なければ、本当に一人のままで死んでしまつかもしれない。

歩を進める。

眩暈がして視界が揺れる。

しばらく目を強く瞑り耐えようと、それも収まった。

体を引きづるように歩き始める。

一步一步踏みしめるたびに、胃液が逆流しそんな気持ち悪さに囚われる。

「佳織に、手を……差し伸べなくちゃ」

壁に手をつき、ゆっくりとゆっくりと歩を進める——。

横目で見える街頭テレビは、また違う臨時ニュースとなる。

「今日はほんとに……いろんなことがあるよな」

他人事のように呟く。

ああ……これは、他人事じゃないな。

『針木市中央区の高層マンション、針木パレスにて飛び降り自殺が発生しました。また現場に駆けつけた刑事の数名が屋上で変死しているのが見つかりました——』

後悔はない、彼は敵になったのだから。

……思えば、はじめから——。

初めて出会った時も、佳織を疑ってたじゃないか。
ずっと容疑者の一人として、それで俺達に近づいた――。

『都合のいい言葉に聞こえるかもしれない。だがね、それでも私は君のことを気にかけていた。本当の息子のように思っていたんだ』
信じられない。何を信じればいいのかも分からない。

信じたいという気持ちと、裏切られたという悲しみ。
父親みたいだと思ったのは、嘘じゃない。だって、中野刑事はいつだって、俺を気にかけてくれていた。

――でも、それでも恐い。期待して裏切られるのは、恐かった。

「――そうか……俺が、殺しちゃったのか」
そう、俺は他人が恐かった――。

痛いなあ……。

心だつて、血を流すのだと思った。

好きだから、死にそうなくらい痛い……。

知らなければ良かったことが、世界にはあまりにも多い。
そこかしこに理由は存在して、そんな風にしか生きてこれなかった背景が沢山あつて。

だから、知つてしまえば誰のせいにすることも出来なくなる。

自分を矮小に捻じ曲げるしかなくなる。

悪い人なんて居ない。誰も悪い人なんていない。

そして、みんな悪い人。みんなが、少しずつ悪い。

じゃあ、正解はどこ？ 正しい選択肢はどれ？

唯一無二の回答は、誰にも分からない。

だから人は、矮小に歪むしかなかったのかもしれない。

みんなどこか歪んでいる。

ああ……、とにかく、もうどうでもいい。

「……えーじ」

背中から、声をかけられる。

佳織が目覚めました。

「佳織……大丈夫だったか？ ごめん……上手くコントロール出来

なくて、巻き込んだしまった」

「忠告……したはずだろ？ お前は、本当に馬鹿だな……、こんな殺人鬼の為に、なにしてんだよ……」

「俺も……殺人鬼なんだ。サイキック殺人鬼」

「……笑えねえよ」

本当に笑えない。

こんな夜だというのに、街はいたって平和ボケしたような、白々しいほどにいつも通りだ。

「この時代を平穏と、誰が表現したんだろうな……」

佳織はポツリと呟く。

「十年前からは考えられないとかさあ——」

とんでもない嘘だと思う。

十年前から彼女の心を巣食う病巣は、確実に進行しているじゃないか。

だから——。

「お前が、俺を救ってくれた」

これ以上は、苦しまないで欲しい——。

背中から抱きしめられる。

「……」

彼女は、小刻みに震えていた。

その振動が、まるで彼女の心の叫びが漏れているかのように。痛い、痛い、と——。

一番大切なものを差し出すしかなかった彼女の痛みを。

これが物語ならば、人々は彼女を裏切り者と中傷するだろうか？

そんな風にしか生きてこれなかった少女を悪と糾弾するのか？

ふざけるな——！

そんな道しか、彼女には与えられなかったじゃないか。

死の恐怖に毎晩震える少女に、自己犠牲の尊さを強要するつもりなのか？

それが『正しい』と世界は謳うのか——。

「私なんか背負ってさ……、汚れるだろ……」
佳織は、ぼつりと呟く。

「汚れてなんていない」

「臭うじゃん……血の臭いがプンプンと」

「人間の身体は血で出来てるからだろ？」

「利用した。無知なオマエを、都合のいいように利用しただけだった。救うつもりなんてなかった」

「それでも、俺は救われた」

「オマエは、私のせいで違う人間になったんだよ。私はね……エヴァに代わる、自分に都合のいい友達が欲しかったんだ……」

「俺は、俺になれた」

「ファウラだとか、ノヴァだとか、そんなことはどうだっていい。昂栄治——。」

「お前がいてくれたからこそ、今ここに昂栄治はいる。」

「私は……私でしかなかった……」
震える声で。

「なあ……、私は結局自分しか大切に出来なかったんだよ。助けてくれよ、栄治……。私の為に、私の身代わりになってくれよ。ノヴァの真実に迫ろうとするヤツは全員消してくれよ……。警察も、塚本も、足長おじさんもさ、もう沢山だよ。……それでさ、私は一人安全な場所でのうのと暮らしていたって、そう思ってるんだよ。私の命かオマエの命って言われたら、迷いなくオマエの命を差し出す。私はさ……そういう人間なんだよ」

言葉のナイフで、自傷する。

泣きながら、切り刻む。

「……それって、普通のことじゃないか」

「普通……？」

「自己犠牲を推進して、自分たちは安全な場所でのうのと生きている。誰だって自分が大切だから美しいことを相手に強要する。美しいものは彼らを傷付けないから。彼らを傷付ける思考は、危険だ

と迫害して、自らの防衛する。でも、お前はそれから洩れた。だから、大切なものを傷付けるしかなかった。佳織は、普通だよ。普通だった。だから、それは悪いことじゃない」

「でも……ヒトを殺した」

「それが、必要だった」

彼女が自傷を選ぶならば、俺は彼女の心を彼女から守る。

その為ならば、ルールを侵すことも厭わない。

社会から外れたって構わない。

「……それでもさ」

力なく佳織は呟く。

「外れれば、人間でいられなくなる……」

「だったら……」

強く、思う。

「人間じゃなくていい」

守りたい人間を守れずに人間でい続けるくらいなら……、俺は、怪物で構わない。

正常と異常——、地球儀の世界が定めた境界線。

「仕方ないと、社会のシステムが追いつかないと、この世の人間全てがお前を見捨てると言うのなら、俺が最期までお前の味方でいる。昴栄治は、塚本佳織の半身になる。何千人だ？ 何万人だ？

何億人殺せば、俺たちはアダムとイヴになれる？ お前が望んでくれるなら、俺は全人類と戦争してやる」

「……出来るわけねえだろ」

「やってやる——っ！」

「もう……遅い……。警察は私を指名手配する。屋上にいるあいづらが死んだって、もう時間の問題だよ……。本当に……短い自由だった。十年なんて、あっという間だった。これがあと五回も続けば、私たちは死んじまう。そう思えば、人生なんて本当に短いもんだ。もういいよ、栄治……。もう、いいんだよ……」

そうして、彼女は語り始める。

白い監獄に囚われた十年間。

苦痛だけを繰り返し、自由はなく、同じ境遇の少女と怯えるだけの日々を。

大切だった少女を置き去りにしてつかの間の自由を手に入れようとした彼女。

その自由すらも、裏切りに満ちていて。

彼女は、人を殺す兵器を作らされた。

だから彼女は、自分を縛り付ける全てのものをリセットしようと思った。

全てに疲れた彼女が、都合のいい、自分だけの味方を欲して、そして作り上げた。

ファウラという人格矯正プログラムを使った、擬似的な心の誕生。昂栄治という、俺の人格は、始めからお前の味方であるためだけに存在していた――。

だから、俺はエヴァとは違う。

例えばお前が俺を裏切っても、俺を見殺しにしたとしても、俺はずっと……お前の味方でいることができる。

「お前がいたから……俺には十年という歳月を得ることが出来た」
動機はいらない。

お前が、俺を必要としてくれた結果だけでいい。

昂栄治という人格。

お前以外の人間に心を開くことができない、お前のためだけに稼動する機械仕掛けの魂。

「ありがとう。俺を生んでくれて……ありがとう。お前の為に生きさせてくれて、ありがとう……」

精一杯の感謝を込めて。

「この先にきつと、未来はない。人を害する恐れのある野良犬が保健所で殺されるように、異端の私達を人々は捕らえる」

「……」

「私たちは、もう詰みなんだよ……」

……俺たちに、未来はない。

だとすれば、佳織の為に世界の全てと戦おうと決めた決意。彼女の為に生きようと決めた意志。

それら全部が、彼女を守れなかった瞬間に無意味と化すだろう。恐かった――。

負けることが、こんなに恐いことだなんて知らなかった……。手先が震える。

守れないと想像するだけ、泣き出してしまいたくなる。

味方なんてどこにもいない世界の中で、俺たちは手を繋いでいたのだ。

「ごめん……」

懺悔の声。

「そんな風に……作っちゃって……ごめん」

後悔の螺旋。

背徳を犯した俺たちが許されることは、永遠にない――。それだけがこの物語の結末だろうか？

その為だけに、俺たちは生きてきたと言っただろうか？

「祝福を……」

祈る。

「どうか、祝福を……」

天を仰ぐ。

せめて、願う。

世界に破滅を――。

俺たちに祝福を――。

叶わなくとも、せめて――。

叶うと信じて――。

「あつ……？」

ふらりと足が絡まりそうになり、そして急激にめまいがした。

「……栄治？」

佳織の心配そうな声を背に、胃酸がこみ上げてくる。
そして、地面に吐瀉した。
……血が、混じっていた。

南 — 沙耶悠希

「ずっと、南さんに聞きたいことがあったの……」

沙耶悠希は教会にいた。

「なんですか？」

「……どうして、私たち七人を引き取ったの？」

「悠希——、なにか気になることでも……？」

「のぞみは置いておくとしても……偶然、この六人が集まったのかしら？」

「……」

深く透き通った赤い双眸。

悠希の目は、実を言うならば、すでにその機能を果たしていない。

「……どうして、貴方達を引き取ったのか。どうして貴方達だったのか。そこには理由がある、と言いますか」

「こんな偶然、あるはずがないでしょ——」

彼女が苛立ちを見せるのも珍しい。

「のぞみが犯罪を犯していることも知っていた。日向の正体も……。そして恐らくは、慶介と久の正体にも気づいていた。だったら……佳織と栄治の正体を知っていたとしても」

じじじつ、と蛍光灯が怪しい音を立てた。

少しだけ光が弱くなり、南の顔に影が落ちた。

「私が知りたいのは、貴方が何者かと言うことよ」

「南、という名前だけでは納得できませんか？」

「——ファウラウェイ・プロジェクトにどのように関わった？」

南は首を傾げる。

「それは、なんのことですか？」

「——私にはごませないわ」

悠希は自分の頭を指差して。

「貴方のここから発せられるものを感じないのよ。……貴方は、脳

を弄っている」

「……」

「脳波を別の信号に変換して、外部からのハックに対応するファイアーウォール。高度な技術と知識がなければ成しえない芸当だわ」

「やはり悠希……、ファウラの副産物について、貴方で研究が続けられていたということですか」

「貴方は……第三の塚本泰三じゃないかと、私は疑っている」

「第三？」

「それも、セキュリティを万全にした固体。明らかに貴方は、他の塚本泰三とは違う」

「……なるほど、そう言うことですか」

「それは、認めたということ？」

「止めましょう、その質問は無意味です。私がイエスと答えてもノ」と答えても、貴方の中でそれは真実と成り得ない」

「そうね」

「……本当にあつたことを真実と呼びますが、誰も本当と認めなければ真実と成りえない。如何にして真実を真実とするか、本当に難しいことです。過去、同じ事を久にも話しました」

「久に？」

「貴方が、ウェイと呼ぶ久です。彼は一笑するばかりで、本当の意味での真実には何の意味もない、世界は嘘をつき続けている、そう言いました」

「……そうでしょうね、疑い続けることこそが、この世界を生きる唯一の手段」

「しかし、貴方にも分かるでしょう。それもまた事象の一側面に過ぎない。角度を変えれば全ては正にも悪にもなります。慰めあうこと、角度を変えればその行為は傷を舐めあうことに過ぎない。疑うということも、けて正の否定にはなり得ない」

遠まわしに、南は悠希を否定する。

「……結局、何が言いたいの？」

「貴方の忌むべき過去の貴方と、今の貴方は等しく同じものです」

「……成長がない、そう言いたいのか？」

南の目を見つめ返す。

その目はどこか後悔を思わせて、憐れみを含んだ、複雑な感情を包括している。

「エヴァ——」

「……っ」

その言葉を口にとすると、僅かに悠希の顔色が変わった。

「不老不死の存在と言うものを、どう思いますか……？」

不老不死。

それは、ファウラウェイ・プロジェクトに取りつかれた大人たちの見ていた愚かな幻想。

「……反吐がでるわね」

「蘇生、再編——。それらはどうして、遙か昔より禁忌として位置づけられたのでしょうか」

「自然でないから、気持ち悪いから、死がなければ、それは生きていると呼べるのかしら？ その辺に転がっている石ころと何が違うのかしら」

「私は何度も願いました——」

「……」

「悠久の平穩、魂の救済——」

「……」

「そして、死者の蘇生、楽園への昇華——」

「……それは」

——ハイヴンをヘヴンへ。

「私は、久と同じことを望みました」

彼女は、責めるような口調で。

「……それは、どっちの久？」

それは、明確に責める言葉。

責める相手は——。

「分かりません……今は、何も分からない。今の久は、酷く矛盾している……。ファウラという破壊と再生のプログラム、ウェイという維持のプログラム。不完全なままでウェイが維持を望んだが為に……私の言う彼とは、貴方の言うどっちにも当てはまらないのです」

「……その鎖は、解いたわ」

悠希は呟く。

「後悔、しているのですか？」

「何に、かしら？」

「口にしなくても分かるはずです」

「……」

数日前、雨の中で、彼には告げたはずだった。

——後悔はない、と。

「日向のことも、佳織のことも、同じく後悔はないわ——」

「……今は、けて貴方の中では真実と成りえないが、いつかは認めなければならぬ」

「何を？」

「——憎しみとは、期待の裏返しでした。悠希、貴方は未だに恐れている。裏切れることを恐れている、置いていかれることに怯えている。だから、裏切った——」

「……違う」

「今は、『違う』でかまいません」

「……私が、家族を欲した裏返しだと？ はははっ、安易なものね」
「世界はシンプルです。絡み合い、複雑化しても、その一つ一つは、とてもシンプルなものですよ」

「希望はあるかしら？」

悠希は歩を進め、扉へと向かう。

「私たちの過去に、希望は残ってるのかしら？」

「それは、分かりません」

南は呟く。

「しかし、取ろうとしなければ、それは手に入りません」

「……とんだ、偽善者なこと」

ボタン、と扉を閉める音。

南は、薄暗い部屋の中に一人残される。

「そうです」

南は、拳を握り締める。

「取ろうとしなければ……それは手に入らない――」
噛んだ唇から、血が滴り落ちた。

二人 ― 昴栄治

窓を叩く雨露、弾けては形を変えていく。

人も同じ。人は様々な出来事に衝突しては一喜一憂する。感じ方も考え方も、心と呼ばれる機関の根源はけて同じ形ではいられない。

長い雨。夜闇に紛れれば、黒い雨のように。

だが、窓を滴る水滴は透明。

十年も振り続けて色を失ったのか。それとも潰れた形のまま地面へと落ちて、蒸発してなくなったのか、俺には分からない。

一泊三千円の小さなベッドとシャワールームしかないレンタルルームで、俺たちは肩を並べて横たわっていた。

窓に遠く映るのは、エディフィスタワー。御座市民の為、という偽善の名目の下針木市街に建てられた全く同じ形の建造物。

「何が見える？」

佳織が問いかける。

「雨が、降ってるよ」

「そうだな……」

窓を叩く雨の音がうるさい。あまりにもうるさい静寂だ。

佳織の方に振り返る。

目が合うと、なぜかいたたまれない気持ちになって、目を逸らした。

「……どうした？」

「……なんでも」

「反応が薄いな」

「そうでもないよ。少し寂しくなるって思ったんだ」

「……そうは見えないぞ」

「涙でも流せばいいのか？」

笑ってみせる。皮肉を楽しんで見せるように。

でも佳織は表情を変えなかった。

「……………ヘイヴンはこれで終わりかな」
彼女はポツリと呟く。

「また、一からやり直してとこだな」

「……………」

「エアコンの効き悪いよな、風邪ひきそうだ」

「……………悲しんでいるの？」

「悲しい？」

そう見えるのだろうか。

「俺が、悲しんでいるとでも？」

「大切そうにしていたじゃないか」

「そうだな……………何をしてでも、あの輪を続けていこうとしていた」

「それを壊したのは私だよ」

罪を告白する言葉なのに、どこか責めるような口調で。

「日向も言ったことだ……………潮時だった」

笑ってみせる。

「所詮、いつまでも出来る事じゃなかった……………。久は、分かっていたから『ヘイヴン』なんて皮肉な名前をつけたのかもな。ろくでもない過去に対する、せめてもの悪あがきに過ぎなかっただろうけど」

「悲しくはないのか？」

「……………優先順位が、それよりも高いんだ。だから、アレは諦めた」
「……………」

「それに、壊れた玩具にいつまでも執着する子供はいないだろう？」

「とても玩具と扱ってるように見えなかったけどな……………」

「……………じゃあ、佳織はアレに何を望んだ？」

「今さらそれを聞くな？」

「今だから、だよ。それを失った今だから、話さないか？」

「……………虐待を受け、全てが消えることを望み、仲間があったという間にゴミへと変わる」

エヴァを裏切った時の話だと分かった。

「自分が汚いことまで気づいたことは良かったけど、その後がまずかったな……」

呆けたような目で天井を眺めながら。

「人間の汚い部分を、受け入れようとした——それは仕方がないことだってさ」

「……」

「よくさ、いいところも悪いところもって言うけれど、所詮汚いものは汚いんだ。そこを否定しなくちゃ人間ってヤツはいつまでも救われない」

「そういう生き方は疲れるだろ？」

「疲れるさ……毎日が自己嫌悪と自己改善の連続。自分を否定し続けるわけだからね」

「じゃあ、もういいじゃないか」

「それが、責任者探しだよ……。結局、人間が責任者を求め続ける限り、同じことが何度も繰り返されていく。罪の簡素化は楽でいい。それは思考の簡素化で、物事の本質を見定めず自分がいい子でいられる最高のシステムだからね」

「それが人間だろ？」

「人間止めた私らが、人間を語るのか？」

嘲笑する。

「……何でそんなに自虐的なんだよ。苛立つてるのか？」

「……」

凶星だったらしい。

「自分が間違っていると思いながら、その行為を続けるならば、敵を殺すしかなくなるよな？　これから先、お前はずっとそうし続けるのか？」

「そう……人間やめても、気が滅入るよな……」

「当たり前だろ。人間として扱われないだけで、スペックは人間なんだよ」

「……………」

「……なあ、幸せだったよな」

「——っ」

急所だった。

「これから、幸せになれないみたいな言い方だ」

毒づく。

「……ああ、だって」

そうして額と額が重なる。

身体が重なり合い、温もりを共有する。

十センチもない至近距離で目と目が交錯する。

魂の籠もらない目と目。

互いを映し出し、その瞳に映る自身を見るように。

二人で一つ。

「今のお前を見ていると……………人間に見えて仕方ない」

「だって、スペックは人間なんだろう？」

「そうだな」

「だとしても、今更行き先を変えることはできない」

「……………そうだな」

佳織は静かに息を吐いた。

「佳織はやっぱり……大切だったのか？」

「……………」

「だから一人で、連続自殺事件に関わろうとした？ 誰も、お前の暗黙の了解に踏み込ませたくなかった？」

「止めるよ——そんな対したもんじゃない。これは私の蒔いた種、ただそれだけだよ」

「義務なのか？ そこに、自己犠牲は微塵もなかった？」

「あつたら……………なんだって言うんだ？」

憎しみを込めて呟く。

「……………もう、自分を責めるのはやめよう」

「……………そこに自己犠牲があればさ、エヴァと七人の絆に順

位が出来るんだ」

「順位？」

「そう。大切なものに順位をつけたことにならないか？」

「俺は、つけたんだ」

即答する。

「七人よりも、二人を選んだ」

「私がお前をそうなるように作ったからだぞ？」

「愛してたから」

「……バカだ。それにくせえ」

佳織は笑う。

「だから、七人は選べない。お前を救えなかった瞬間に、俺の存在は無価値になってしまっから……」

「御座市という八十万人の人間を巻き添えにしたとしても、そうできるか？」

「それも、お前の後悔の一つか？」

「……あの地獄は、覚えているだろ？」

「熱かった、そして疲れた」

「なんだよ、小学生の絵日記かよ」

チョップされる。

ただそれだけで、日常が戻ってきたようで、嬉しくなった。

「……」

だから、覚悟した。

たとえ傷ついて血を流しても、自らの呪いに体を侵されてもだ。

動かし始めた世界は加速度を増し、衝突し粉々になるまでこの体を巻き込み続けるのだ。

必死にしがみついてくれ。

そして擦り切れて形を無くし、俺達は何者でもなくなる。

それが嫌なら嘆いて身を投げればいい。

そう覚悟した。

そうやって、世界を呪った。

「俺たちは、世界を愛することを許されなかったんだ」

だから俺たちは孤独。ふたりだけの、孤独。

不意に、暖かいものに包まれる

佳織は静かに俺を胸に抱きしめる。

「こうして重なっていても、二人でも孤独」

佳織は、物語を語るように。

でも、暖かいならば、こんな孤独も悪くない。

——静かに俺は、眠りに落ちた。

夢 — 昴栄治

懐かしい、夢を見た。

教会で花火を見つけた時の事だ。

まだ、半年も経っていない記憶。

「ロケット、ロケット、ロケット。慶介……アンタでしょ」

日向が呆れているのも、毎度の光景だ。

「以下にも、戦争は男のロマンだ」

思えば慶介は、ミリタリーオタクの線があるな。

「戦争ということは、人に向けるつもりだったの？」

久が尋ねる。

「それ以外にロケット花火の使い道があるのか？」

「花火を人に向けるんじゃないわよ！」

「ぐつ、日向、ケツを蹴るんじゃない。二つに割れたらどうするつもりだ！」

それは初めから二つに割れてる仕様だ。

「それに、戦争以外にロケット花火の使い道があるのか？ だったらコイツはなぜ飛ばうとするんだ。意味が分からないじゃないか」

「……なんで鑑賞という言葉が出てこないんだろうね」

久は溜息をついた。

「まあ、待てヒッサー。ここで楽しい使い方を提供できる先生をお呼びしている。日向と違って空気が読めるのぞみ先生！」

「おはようございまーす、全国ちびっ子の皆さん。春賀のぞみです！」

どこの教育番組の人だ。

「ちよつと佳織、空気読めないってどういうことよ！」

「自分の胸に聞けっつーの。ってすまん、そんな小さな胸じゃ、何も入ってないよな。めんど、めんど」

「……殺しとくか、とりあえず殺しとくか」

日向の顔が物騒なことになっていた。ビジュアル的にも。

「で、のぞみよ。貴様ならばロケットを誰に向ける？」

「慶介……、質問の聞き方がおかしいよ」

「そーだね……それはキャラ的に一人しかいないんじゃないかな？」

「それもそうだな」

慶介とのぞみの視線が、俺に集まった。

「おいしいいつつ——！」

とりあえずブリッジをした。

……。あれ？

なぜ、反応がない？

せつかく身体を張ったというのに。

「……」

慶介と目が合う。

慶介はにやりと笑った。

……猛烈に嫌な予感がする。

「おい、あんなところにロケット花火の発射台があるぞ！」

「ノオオオオオオ——！」

予感的中う！

「おいおい、えーじはなんて気が利くやつなんだ」

佳織も悪乗りする。

「あれ？ こんなところに『危険、四十連発！』が」

白々しく久が凶暴な筒を掲げる。

「奇遇だね久くん。私もそれ持つてる」

ひいひい、のぞみのと合わせて八十連発！

「……馬鹿野郎、無茶しやがって」

「け・慶介、お前だろうがあああ！」

「いいから、いいから。俺に任せろ」

そう言つて慶介は久から凶暴な筒を受け取り、俺の社会の窓のジッパーをあける。

「いやん！」

「キモい声出すなデメエ！」

「ちよつと待て！ だからと言って逆向きにセットするのは止める！」

それは殺人未遂ではないのか！

夜の冷たい風が、社会の窓から股間へと入ってくる。

「こ、これはこれで気持——がああっ！」

筒を社会の窓にねじ込まれた！

「では、ファイヤ！」

佳織が導火線に火をつける。

「ラ・ラメエ！ そんなこと、てかアツ！ アツい、アツいよこれ！」

火花が！ パチパチと当たってますよ！

「ねえ……止めないの悠希？」

「あなたの仕事でしょ？」

「正直混ざりたくないわね……」

悠希と日向は知らぬフリを決め込んでいる。

「四面楚歌！」

こうなれば、死ねばもろとも！

俺は股間にセットされた砲台を横に向けた。

照準、ディアー・マイ・フレンズ！

「ば・馬鹿野郎！」

「こ・コイツ、玉碎覚悟かよ！」

「栄治の股間の銃がこっちに！」

「お、犯されるー」

「……ああ、馬鹿」

「……馬鹿ね」

六人それぞれのコメントありがとうございます。

これぞまさに人間砲台。

「靖国で会おう！」

六人に敬礼して見せた。

この瞬間、股間に物凄い圧力が加わる。

「ノオオオオオオオツツ——！」

な・ん・だ・コ・レ・は！

「ぬおおっ！」

「マジで来た！」

「ナアアアアアアアツツ——！」

股間が何度も押されて、砲弾が無差別に発射されていく。

「これが銃！　これが戦争！」

逃げ惑う人々！

見る！

人がゴミのようだ！

……。

と思つてたら、慶介が四十連発をこちらに向けて構えていました。

ま・まさか！

「目には目を、人間砲台には人間砲台を」

慶介はにやりと笑った。

「馬鹿野郎——！　ソイツに手を……うつ——！」

股間の衝撃に俺は振り回されっぱなしだった。

「良い子の皆は人に向けてロケット花火に火をつけたらダメだよ。

……ファイアー——」

「のぞみちゃん！　いい子だから向けちゃラメエエエエ！」

「この国が取るべき方針とは何か！　戦争しかないんだ！」

佳織が拳を握り熱弁する。

「右向け右の思想はヤメロオオオオ——！　ギャアアアアアア！」

アツイイイイイイ！

「標準が外れているぞ、合わせろ野獣！」

アツイヨオオオオオオ！

「慶介。弾幕をもつと熱く！」

イタイヨオオオオオオ！

「慶介くん加勢するね」

ナハアアアアアアアアアア!

……。

……でも、これはこれで気持ち……。

「ガッ——!」

側頭部に直撃を受けて、意識を刈り取られた。

……そう。

馬鹿みたいに騒いで、痛みを感じる暇もないくらい、必死に今を
楽しもうとした。

それが、それがいつまでも続けばいいと思ったんだ……。
ああ、なんだ。

——やっぱり、二人では足りないじゃないか。

エピローグ ― ノヴァ

「……馬鹿だな……本当に、お前は馬鹿だよ」

栄治は、幸せな夢を見ている。それが、佳織には分かる。

栄治は気づいていない。今なお、気づいていない。

塚本佳織は、彼の人格『ファウラ』にある細工を施した。

脳波の受信と送信の優先順位。

……彼は知らぬ間に、佳織に感情を垂れ流し、また佳織の感情を拾い上げる。

だが、それは完全ではない。

天才のエヴァと違い、ノヴァは凡才だった。

不完全なノヴァでは、完全なものを作り上げることは叶わなかった。

——だから、昴栄治は崩壊を始める。身に余るその力は、栄治そのものを失わせる。

彼は酷使した。だからもう、彼は終わりだ。

「……私たちは半身になり得たんだ。心の強さだけでは、それを成す事はできないから」

なのに、栄治は今なおひたむきにそれを信仰し、私を無条件に第一とする。

なんて、酷い女だ、と思った。

文字通り彼を、自分の都合のいい存在に作り変えた。使い捨ての、インスタントの白馬の騎士。彼の意志を、そのように作り変えたのだ。

栄治は、優しい過去の夢に溺れている。

でも、彼女にとってはそれさえも優しくくない。

思い出が優しいのは、都合よく歪められ、美化されるからだ。

だが、限度というものがある。

封じ込めた記憶は残酷過ぎて、都合のいい妄想では美化しきれな

い。

人をオモチャのように扱い、いらなければ簡単に壊してしまう。幼い佳織は、それが当たり前のように出来た。

最たるは、足長おじさん。

その存在は、彼女の都合のいい妄想だった。

人の皮を被った悪魔のような男。

悪魔は人の弱さに語りかける。

無知な思考に、答えを囁きかける。

善悪を教えることなく、子供たちに都合のいい答えを与えてあげる。

だから彼が自分に危害を加えると分かった瞬間から、佳織は彼を殺すことだけを考えて。

それすらも、彼の手の中だったというのに。

それに佳織が気付いたのは、ずっと先の話だ。

その時同時に、彼女は心が震えあがるような恐怖を覚えた。

それこそが過去の呪縛。彼女が奪った三十二名の、そして八十万人の復讐が始まる。

過去に蓋をするしかなかった。

一番の方法は蒙昧であること。

蒙昧に振る舞い、道徳も論理も全てを曖昧にしてしまうことだ。

人には罪意識というものがある。

もしも、自分が同じ事をされたと仮定した時、基本的にその想像が自分に与える架空の苦痛が、そのまま罪意識になる。

苦痛が大きければ大きいほど、人は罪を背負わなければならない。

少年期に与えられることのなかった憧憬は、時を得て、七人の世界へと映し出された。

大人が与えてくれなかった憧れを得た。

同時にそれは、苦痛の生の始まりでもあった。

罪が始まった。

奪った全てのものからの復讐が始まった。

そんなものが彼女の中にずっと眠り続けて居たのだと気付いた。それに気付いたから、心が震え上がるような恐怖を覚えたのだ。自らの人間性を、自らで歪めてしまうほどに――。

あれは本当に……許されない罪だったのだ。

その罪状を、栄治に知られることを何よりも恐れた。

それは、嘘と何が違う？

嘘をつくというのは、本人が対象に対して偽りを述べることだけだろうか。

本人が何も語らずとも周りが勘違いして噂が一人歩きをすれば、虚偽が真実と入れ替わることもある。

本人が対象に対してそれを訂正しなければ、対象は虚偽を真実と受け入れ続けるだろう。

勝手に勘違いをした、という言葉は悪徳商法や詐欺の常套句として利用される。

合法的な悪意だ。

合法的な分、嘘よりも性質が悪い。

騙そうとする意志がそこにはあった。

だから、これは塚本佳織の嘘だ。

……彼女は黙して語らなかった。

そのまま、昴栄治に空白の過去になど囚われずいて欲しいと、ただ、彼女の思うままの、彼女を絶対に裏切らない存在であれと、そう願った。

「やっぱあれは……正しいことじゃなかっただろ？」

虚空に呟いてみる。

だが、答えはない。

規則正しい栄治の寝息が、聞こえてくるばかり。

「栄治……私はね、ずっと責任から逃れることばかりを考えてた」
独白する。

「私の変わりに、私の罪を肩代わりしてくれる存在をずっと探していた」

そんなもの、ありはしないのに。

「だから……せめて……、お前だけでも救いたいって思う」

エピソード ― エヴァ

「佳織……」

狭いベッドの上、昴栄治は一人目覚めた。

「どうして……どこに……？」

急いで上着を羽織る。

レンタルルームを出て、針木市セントラル街へと出る。

「……」

途方に暮れた。

佳織を探したい。彼女はこう言った――昴栄治は、彼女の脳波を優先的に受信すると。

なのに、思考に膜が張ったかのようにぼやけて、何も感じない。

「……どうして？」

仄かに鉄の香りがして、鼻から水滴が垂れ落ちる感覚。

拭ってみると、服のすそが真っ赤に染まっていた。

鼻血が、ダラダラと流れている。

恐怖に、一気に血の気が引いていく。一体どうなっていると言うのか、彼には全く理解できなかった。佳織の心を受信しようとしても、流れるのはノイズばかり。力の使い方が分からないというよりも、この感覚は故障と呼んだほうが妥当なのかもしれない。

いくら拭っても、血液は流れ続ける。

手に入れた力は、必要なときに何の役にも立たなくなる。昴栄治は、二本の足だけで塚本佳織を探さなければならないのだ。この広い針木市からこの状況でたった一人の少女を探すのは、砂漠に落とした星の砂を探すのに等しい絶望感だった。

「あつ……」

ふわりと、眩暈が襲う。

ダメだ……。

意識を刈られそうになるほどの疲労感。

抗おうとしても脳を侵食し、思考を食い潰されていく。

心臓の音に合わせて、視界が歪み続ける。

一体、どうなっているのだろうか。

「……俺の体、どうなっちまったんだ？」

膝を、付いた――。

頭の中が熱い、循環する血液が沸騰してるみたいだ。

換気をしなくては。

頭蓋骨をくり貫いて、風通しを良くしないと。

想像しようとして、顔を歪めてしまった。

「グロい……」

呟いたと同時。

その目の前に、影が現れる。

顔を上げて、目の前に立つ人物を確認するのすら億劫だった。

「……貴方に、言い忘れたことがあるの」

……悠希。

声で分かる。

「私が……七人の絆が嫌いだったのは事実よ」

だから、彼女は七人を裏切った。それは、彼も分かっている。

でも不思議なものだ。

それが分かりながらも、今、彼の胸中に憎悪は存在しない。

「でも……私は、貴方が佳織の思うように作り変えられていなければ、きつと敵対することはしなかったでしょうね」

随分と、遠まわしな言い方で。

「私とノヴァ、二人だけの世界となる前に、貴方は私たちの世界の中にいた」

「……分かるように、言ってくれないか」

栄治の声が掠れた。

「私たちは、同じ境遇の友達だったということよ」

なるほど、あり得ない話じゃない、と思った。

「貴方は、初めから私たちの仲間だったの。だから、貴方には悪い

ことをしたと思ってる。負い目を感じているわ」

「……そうか」

なんとなく、彼は理解した。

「だから俺は……悠希とすぐに仲良くなれたのか」

「ええ……あの子の組んだプログラムは穴だらけ。過去の感情も貴方の中には残っている状態よ。そんな『ファウラ』で能力を使っただけ。だから、こうなることも分かっていた。ふふふっ、私も、酷い人間だわ……貴方が壊れるのを知りながら、それを酷使させたのだから。魔女と言う呼び名は、捻りはないけれども、本当に的を得ているわ」

彼女は、自虐的に笑った。

「……」

理解すると、急激に眠気が襲ってくる。

「貴方は、もう持たないわ——」

言葉の意味も、今の彼の中では深刻さを帯びない。思考も、感情も、全てを麻痺させるほどの圧倒的な倦怠感だった。体がどろどろになり、形を崩していく様を連想した。

それでも。

昴栄治は、抗おうとした。

「だから栄治……、貴方はもう一度、真っさらな貴方へとフォーマットする」

「ダメだよ……探さない」と

働かない脳だけど、それだけは否定する。

彼女、探さないと——。

「聞けないわ」

「頼むよ……」

それは、否定ではなく懇願に近い。

「これは貴方の為じゃないわ。私のための救済措置。友人を救えたというちっばけな自己満足のためだけに、私は貴方を助けるの。貴方の気持ちを鑑みずに。一方的に救済する。だから貴方は、私を酷

い人間だと罵ればいい」

「それは、出来ない……」

「どうして？」

「……だって……友達じゃないか」

彼女の手の平が、優しく俺の頭を撫でる。

「これでおあいこで……また一からやり直さないと……だから、佳織探さない」と

体温を感じない冷たい手だけど、熱暴走を起こしている体だから逆に心地よかった。

「ありがとう、栄治」

ぼやける景色の中で、彼女は微笑んだ。

「でも、さよならよ」

それはやはり儚さを帯びていて、絵画の中に永遠に封じ込められたようなそんな微笑で、俺の憧れだった。

美しい少女——悠希。

「大丈夫……全て夢だったと思えばいい」

おいおい……夢オチはダメだろ、と。

そんな馬鹿なことを、考えていた。

素晴らしかった日常のひとコマのように。

せつかく、彼女が笑ってくれたのだから——。

心の中の絵画に収めたかった。

七人、という絵画の中に——。

「目覚めた世界が、貴方を祝福しますように——」

祝福は、掴み取るんだ。自らの手で掴み取って、維持していくんだ、と。

これが、最後の力だ。昂栄治の心の、最後の抵抗だった。だが。

「——フォーマット」

彼女の祈りが、頭の中を浸透していく。指先から、感覚がなくなっていく。

酷いめまいなのに、痛みはない。

聴覚は滅茶苦茶で、既に視界は役に立たない。

体制的に、なんか床に横になったのかもしれないな。

とにかく、分からない。

真っ暗になって、遠くなっていく。

そんな意識の中で、彼女の言葉だけは変わらずに浮かび続けた。

——ありがとう、栄治。

——そして、さようなら。

悲しい、そう思った。

何が悲しいのかも、もはや思考することは出来ない。

ただせめて、彼女の声に答えてあげたかった。

昂栄治は、意識だけで答える、

……。

……さようなら。

——ウサギの少女。

あとがきみたいなもの

今まで一、二文ちよろちよろっと、最終話の下の方に書かせてもらってたのですが、

とある友人より「あとがき読みにくいから、それで一話でアップすれば？」

という貴重な意見を頂き、あとがきで一話とる書くことにしました。とは言うものの特に何か熱くつらつらと語るようなものもなく、ましてやプロでもないのでダラダラとこんな日記みたいな文章になっちまうのは御了承ください。

・謝罪

誤字脱字が多くてほんとすみません。

いや、言い訳をさせて頂くと、書き終わった後大体脳が沸騰状態なんです。普段使わない分。

友だちに添削してもらったような霊長目ヒト科のナマケモノなんです。そうに違いない。

・三部作じゃないです

ここまでこの駄文にお付き合いいただけただけ神様のような方がいらっしやるかは分かりませんが、

このシリーズ、？ウォン？サン？今作のエヴァ、という形になっています。

というわけで伏線は回収しきれず？があります。

もはや初回に立ち上げたプロットからとんでもない脱線を繰り返しもも当てられない状況です。

思いつきで突っ走った結末とはかくも怖ろしい。猛省。

またコッコツと四つ目をアップしていくか、と思っています。

四部に続く……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0472i/>

EVAcuee of EVA -the 3rd story-

2010年10月8日14時39分発行